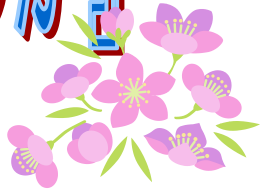


『性差によるのか、賜物によるのか!』



原題 : Gender Or Giftedness

目次 :

世界福音同盟女性委員会「性差か、賜物か」全文訳

参考資料① ディスカッションのためのノート P.77

参考資料② 教会における女性の位置づけの見解 P.109

日本福音同盟女性委員会 考察 P.113

性差によるのか賜物によるのか
---キリスト教界におけるリーダーシップの根拠の再考察---
女性の聖書的位置づけに関する研究資料

マリリン・B.・(リン)・スミス著

はじめに

私たち日本福音同盟（JEA）女性委員会の委員は、委員会の議事終了後、毎回ではありませんが、上記の本を翻訳したものを少しずつ学んできました。本の題から推測できるかと思いますが、かなり微妙なテーマを扱っています。私たちもその内容に目が開かれる思いがしたり、励まされたりしつつも、時には、新しい発想に戸惑いや違和感を覚えることもありました。

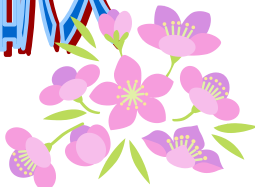
しかし、敢えて皆さまにもお分かちしようと思いましたが、この本が世界福音同盟の女性委員会から出版されているからなのです。機関誌 JEA ニュース の「海外コーナー」でご紹介しましたアジア福音同盟女性委員会はこの世界福音同盟女性委員会に属しています。即ち、日本福音同盟女性委員会もここに属することになりますから、この本の存在や内容を知ることは意義あることだと思います。この本から学ぶべきことも多くあります。

但し、この本の立場が必ずしも日本福音同盟女性委員会、あるいは日本福音同盟の立場ではないことをあらかじめお断りしておきます。そもそも日本福音同盟に属する諸教派、諸教会、諸団体のそれぞれの立場を重んじる時、私たちがこのテーマに関して統一見解を出す立場にないのは当然であります。また、この本は、学びのための一資料であることも付け加えさせていただきます。

前置きが少々長くなりましたが、この本が出版されるようになったいきさつが、本の序文に記されていますので、補足説明しながらご紹介したいと思います。



『性差によるのか、賜物によるのか』翻訳文



序文

1992年、マニラにおける世界福音同盟女性委員会の会議の場で、クリスチャン女性の家庭、教会、社会における聖書的位置づけに関する研究資料作成への要望が明確に打ち出されました。世界各国代表（アフリカ 3人、アジア 3人、カリブ諸国 1人、ヨーロッパ 1人、中南米 2人、中東 11人、北米 1人、南太平洋 1人）がそれぞれ自国の女性たちが何を最も必要としているかを報告しました。その結果、程度の違いはあれ、問題は基本的に教育、励まし、そして模範（モデル）、または先章による指導、という三つの分野における必要であることがわかりました。

それらの必要が確認された後、その必要に対処するために要する資料と、その必要を満たすに当たっての障壁の性質が明らかにされました。そこで、女性の基本的な必要の一つ一つに取り組むための特別プログラムが委員会によって始められました。

教育の分野に関する討議が始まってみると、基本的な読み書きを必要としている国々から、管理技術の上級訓練を必要としている国々まで、その必要は幅広いものであることが明らかになってきました。それと同時に、国や地域を問わず、女性は男性の権威の下にあって、男性の補助的な働きをするべきであるという、教会の伝統的な教えが、女性にとって彼女たちの文化（社会）の中にすでに存在している教育の機会を活用する大きな妨げになっていることも明らかになりました。また教育の機会を得ることのできるクリスチャン女性たちも、学んだことを教会という場の中で用いることができない可能性もあります。男性が権威ある地位を占めているところでは、読み書きであると管理技術の上級訓練であるとを問わず、女性が教育から益を受けることができる自由は、男性が何を許容するかによって制限を受けることになります。

そこで、どのような教育計画が展開されるにしても、男性も女性も、女性の位置づけについての伝統的な教えを再考察する必要がある、そのために、しっかりとした基礎を築く手助けとなる研究資料を提供することが賢明であると思われました。クリスチャン女性たちが、貧困と搾取（訳者注：多くの場合は売春）の悪循環から抜け出すためには、そのための努力は聖書の教えに矛盾していないことを知る必要があります。また女性たちが、神の召しに応えて、教えることや管理の分野で賜物を用いるためには、それが神の御旨にかなっていることを知る必要があります。クリスチャンの男性たちも、女性たちをこのように新しい奉仕の分野に向けて励ますことが、聖書的であることを知る必要があります。

本書の資料は、以上述べられてきたような教育の必要に応じるために準備されました。信仰の共同体における女性の働きは、霊の賜物という観点から述べられています。その際、「性差が働きを決定するのが、それとも、働きは召しと賜物から生じるものなのか」また「何を根拠にこの決断をするのか」という問いかけをしています。

熱心に、献身的に、情熱的に、そしてすべての賜物をもって神に仕えたいと願っている女性たちに敬意を表しつつ、本書を諸教会に捧げます。願わくは、本書が世界中のイエス・キリストの教会に新しい希望と新しい活力をもたらすものとなりますように。

世界福音同盟 女性委員会

1997年5月

聖書は私たちに幻（ビジョン） ---- 神の御国における生活についての幻（ビジョン） ---- を見るようにと招いています。皆さんにはどのような幻（ビジョン）が見えているのでしょうか。キリストがご支配される領域での生活を思い描く助けとして ---- どれも不十分ですが ---- 多くの比喩があります。聖書には、からだの各部分が本来の機能を果たしつつ、からだを建て上げていくという比喩があります。聖書はまた、私たちが一つの民 ---- 聖なる国民 ---- 共に礼拝し、学び、仕える信者の共同体であると言っています。この学びの中で、皆さんに投げかけられている問い ---- それに対して答えを出さなければいけないのですが ---- は「この共同体の中における奉仕やリーダーシップに要求されている資格は何か」ということです。

この共同体の中における奉仕やリーダーシップに、第一に求められる資格が、共同体の一員であること、というのは言うまでもありません。そして、共同体の一員であることの根拠はキリストの血による贖いです。この学びは、教会の中における奉仕やリーダーシップを考える根拠となる聖書個所の解釈の基準となるべきものとして、贖いを枠組み（パラダイム）、または骨組み、として提示しています。そうすることによって、この学びが、キリストが私たちに享受するように望まれた共同体の幻（ビジョン）を伝えるものとなり、その幻（ビジョン）を現実にするための手段をも提供することになることを願っています。

私たちが望むことは、この学びの結果、男性も女性も解放されて神からの召しに応えることです。信仰の共同体を生き生きとしたキリストのからだに建て上げ、一つのからだとして一致を持って働き、そして、キリストがすでに自由にしてくださった者たち（人種、階級、または性別によって）を犠牲にしたり、束縛したりする社会の価値観に挑戦することです。

私たちは、男性も女性も、それぞれが置かれた文化（社会）の中で、神がキリストの名において行うようにと召しておられる働きのために、聖霊の力によって出て行くようにとチャレンジを受けることを願っています。

I. 研究の概略

この章における課題は、私たちの物の見方を再考する必要性があることを認めることです。

A. 研究の理由

女性 ---- 特に教会における女性の指導的役割 ---- に関する伝統的な聖書の解釈を再考すべきであるというチャレンジは、教会に対する真剣且つ率直な問いかけから生じてきます。

問いかけの中には、今日、世界的に見られる、女性と児童を取り巻く状況に焦点を当てた報道から生れてくるものもあります。教会はなぜ、苦痛を緩和させるべく声を上げようとする者を沈黙させ、教会の中ですら起こっている虐待と搾取（訳者注：ここでは売春の意）が続くの許してきたのでしょうか。

ほとんどすべての社会において、女性の位置づけに変化が生じているゆえに発せられる問いかけもあります。変化はいつも不安定さをもたらし、それに対する対応も様々です。何の疑問も持たずに変化を受け止めて、周囲を当惑させる者もいれば、変化にあらがってもがく者もいます。しかし、その両者とも、結果的には混乱をもたらします。クリスチャン女性たちは、神が彼女たちに賜物を与え、召しておられると信じている働きと、教会が

彼女たちに許容する働きとの間の矛盾に苦しみます。教会は、社会のこのような変化にどのように対応すべきなのでしょうが。

女性の位置づけについての教えに関する私たちの理解を形成してきた聖書の翻訳に見られる偏見や、紛れもない誤り（下記の枠内参照、注1）を、男女両方の学者たちが明らかにしたことから発せられる問いかけもあります。女性に関する多くの聖書箇所解釈が異なっていたり、しばしば互いに相反するのを、教会はどのように扱うべきでしょうが。

さらに、教会史の研究によって、教会が、その存在する全期間に渡って、女性の価値に関する見方をいかに変化させてきたかということが明らかにされたところから発せられる問いかけもあります（IV章を参照）。

女性たちは、自分の人生に関する神の召命に応えつつ、同時に聖書の教えに忠実であることが可能なのかを知りたいと思っています。また、知る必要があります。いかにしたら、聖書の教えを完全に保持しつつ、しかも信仰の共同体の中で他者の徳を高めるために自分の賜物を用いることができるかを知る必要があります。

このような葛藤があることから、聖書は女性の位置づけについて本当は何を言っているのかを明確にし、教会におけるリーダーシップについて決断するための基準を設ける必要性が生まれてきます。

レベッカ・メルル・グルースイスは、著書『女性のためのグッドニュース』の中で以下のように指摘しています。初期の教父たちは、パウロにより、アンドロニコと共に「使徒たちの間によく知られている」として推奨されているユニアが、女性であり、使徒であったということを受け入れていました。しかし、最近の学者たちは「ユニアは女性ではなかった、あるいは、女性であったにしても、使徒ではなく、単に使徒たちに重んじられたに過ぎないと説明するのに懸命でした。」彼らがそうしたのは、使徒は男性でなければならないという前理解に立っていたからです。さらに、テキストを自分たちの前提にかなうものとするために、聖書翻訳者たちが彼女の名前をユニアスに変えることもありました。

（訳者注：NIV は「ユニアス」と訳していますが、スタディー・バイブルの注で女性名であるとしています。新共同訳は「ユニアス」と訳しています。AV、NRSV、JNT は「ユニア」と訳しています。新改訳とNASB は「ユニアス」と訳し、注で「ユニア（女性）」訳も紹介しています。）

B. 研究の目的

この研究資料の目的は、信仰の共同体の一致と聖書の一貫性を共に保ちつつ、この共同体における女性の位置づけの論議に取り組むために、教会が実践的枠組み（パラダイム）を発展させるのを助けることにあります。

大方のクリスチャンは神のことばに従いたいと真剣に考えていて、神のみこころを知りたいという純粋な願いを持って、教会内における女性の適切な役割について論議します。しかし、私たちの多くは、そう願いながらも、神の真理の発見を阻むものを二つ持ち込んでいることに気づいていません。

その第一番目は、解釈の枠組み ---- そこを通して聖書のメッセージを眺め、そして理解するところの「窓」 ---- です。この枠組みは、多くの場合、自覚的に選んだものではありませんが、事実そこに存在しています。私たちは、聖書全体を創造、墮落、贖い、天国、自分の体験、または経済といった「窓」を通して眺めている可能性があります。しかし、どのような「窓」であつたにしても、その「窓」を検証してみるまでは、それが私たちの聖書のメッセージの読み方、解釈の仕方に、どれくらい影響を与えているか気づかないでしょう。(下記の枠内参照)

私たちが、それを通して本文を見るところの枠組みが、本文の中に何を見るかを決定しているという事実に気づく必要があります。私たちが本文の中に持ち込む問いかけが、本文の中から何を取り出すかを決定します。

間違つた「窓」であれば、それは私たちを真理に対して盲目にすることがあります。教会は、神の真理として教えていたことを、新しい証拠がもたらす光の中で、しばしば考え直さなければならませんでした。奴隷制の問題は、教会がいつも正しかったわけではないことを示す明らかな例です。W. ワード・ガスクは、論説文「教会、社会、家庭における女性の位置づけ」の中で以下のように述べています。

「・・・19世紀の半ばまで、殆どのクリスチャンは、奴隷制度は神の定めた制度であると信じていました。なぜなら、パウロが奴隷は主人に従うべきであると、大変強調しているからです。奴隷制という考え方は神のかたちに造られた人間の尊厳と価値に対する侮辱であると感じていた、当時の一握りの先見の明のあるクリスチャンとノン・クリスチャンたちに対して、パウロとペテロの書簡の数箇所が反論の根拠として用いられました。」(注2)

経済という「窓」から聖書を眺めることによって、多くのクリスチャンたちは、奴隷制の実践に対する支持を見出したばかりでなく、奴隷制が神によって定められたとさえ主張しました。

神の真理を見出すことを阻む第二番目のものは伝統です。伝統的な文化は強力な影響力を持ち、それは地域により、時代により様々です。教会の持つ伝統的な文化が、周囲の社会の伝統的な文化と食い違うとき、当然、そこに衝突が起きてきます。衝突が起きるとき、教会はしばしば、自らの実践に対するチャレンジとして受けとめるのではなく、自らの立場を縮小させ、後退させ、そして強化させます。

科学的証拠があっても、すでに確立していた教えを疑うことを教会が拒否した明らかな例は、地球は、教会が伝統的に信じていたように平らではなく、丸いと教えたがどで、ガリレオを破門した件です。教会が誤りを認め、彼を赦すのに350年という年月を要しました。教会が自らの神学や伝統的習慣を再考するようにというチャレンジを受けるべき時というものがあります。そのようなチャレンジは真理を発見する機会になりうるものです。

教会における女性の位置づけが単に文化の問題として見られるとき、教会によって許容される慣習の変更は、文化に自らの神学を決定させているという議論を起こしかねません。しかし、もし、女性の位置づけを、文化が

多くの著者たちは、聖書が女性について何を教えているかを明らかにしようとして、直ちに関連のある聖書箇所を目を留めます。そこには二つの危険があります。ひと

つは、関連があるとして選ばれる箇所は、その著者がすでに持っている立場によって決定されるということです。もうひとつは、聖書がそのように語っていると私たちがすでに信じていることを、聖書が言っているように思えてしまうということです。新しい事柄を発見するために、少なくとも、すでに持っている視点を単に補強しないために、先入観によって曇らされていない目を持って臨むのは、困難なことです。

教会に対して考え直すことを強いている神学的問題として受けとめるならば、真理が伝統に対して勝利することができます。

この研究の目的は、議論を伝統的な習慣から切り離し、キリストのからだにおける奉仕の根拠に焦点を合わせるために、聖書解釈の適切な「窓」を見つけることです。そのためには異論の多い用語（例：かぶりもの、沈黙、または権威など）の定義や、男女間の力のバランス、あるいは階層対平等というような特殊な議論は、検討のための明確な聖書の枠組みが確立されるまで脇に置いておかなければなりません。

枠組みが確立されてはじめて、どの教会にとっても必要な原則が明瞭にされ、適用されることが可能になります。幻（ビジョン）や原則が明らかになるとき、各人、各教会の課題は、「私たちの独自の文化の中で、その原則に向かってどのように進むべきであろうか。私たちが取り組むべき課題、私たちが取るべき具体的な道筋は何か」と問うことです。

C. 研究のための聖書解釈の原則（注3）

女性に関する聖書の箇所を解釈するに当たっての枠組み、あるいは「窓」を探し求める前に、この研究の土台となっている基本的な解釈原則をはっきりさせておくことが重要です。世界福音同盟女性委員会は、以下の前提が解釈の基盤になっていることを宣言します。

1.
 1. 聖書を信頼するということは、無意味であるとして斥けられうる聖書の箇所は存在しないということを意味します。
 2. 聖書の中には自己矛盾はありません。矛盾が生じているように見えるところでは、誤っているのは聖書ではなく、著者が本文を通して伝えようとしていることに対する私たちの理解です。
 3. バウロが状況により、別のことを言っている理由を見出すためには、文脈や扱われている特殊な状況を考慮する必要があります。
 4. バウロが此のことを言いつつ、彼のことをすることはありません。彼のことばと行動との間には一貫性を見ることができます。
 5. イエスはこの世の力と罪の行動様式の両者を打ち破るために来られました。

6. 初代教会は福音の良い知らせをふさわしい形で実践し始めていました。
7. 私たちは聖書の原則を調べ、その原則と私たちの文化との関連を見極めるように招かれています。
8. 福音の強調されるべき点は、受け手である文化の必要に応じて変わるかもしれませんが、そのメッセージは不変です。

話し合いと熟考のための質問項目 ― 第1章

1. あなたは、なぜこの学びを始めようと思いましたか。話し合いの中で、どのような問題点や疑問点を取り上げようと思いますか。

この学びを一人でしている方は、問題点や疑問点を書き留め、後の復習の参考にしてください。グループで学んでいる方は、問題点を全員で共有してください。後程、その問題をもう一度取り上げることになるでしょう。

2. 教会、家庭、そして社会において、男性と女性がどのような形で共に仕えるべきかという問題について、あなたは、今、どのような幻（ビジョン）を持っていますか。
3. あなたは、神の召しと教会が課す制約をどのように和解させますか。
4. あなたはキリストのからだにおける奉仕の基準をどのように理解していますか。
5. あなたにとっての理想的な共同体を描写してください。
6. あなたは女性に関する教えの中に、（もしあるとすれば）どのような一貫性の無さを見ますか。
7. 男女平等を獲得しようと努力している人たちが、聖書は家父長的なので、今日の社会には不適切だとし、聖書を放棄することに対して、あなたはどのように応じますか。

II. 枠組み（パラダイム）の検証

この章における課題は、解釈を決定する枠組み（パラダイム）を評価することです。

A. 聖書的枠組み（パラダイム）を求めて

聖書の真理に対して唱えられる異議は真剣に受け止められ、それに対して真剣な答えが出されなければなりません。しかし、自分の生き方にも、教えていることにも一貫性がないことを気にも留めずに、「伝統的な」教えで堅固に身を守ろうとする人たちもいます。

経験という枠組みを用いて聖書を解釈し、女性たちが現実体験していることに照らし合わせると、聖書を斥けざるを得ないという結論に至る人たちもいます。聖書の教えは家父長的であり、今日の社会に不適切だという理由からです。

どちらの立場も、適切な姿勢で聖書を扱っているとは言えません。そのどちらも採用するのではなく、私たちは、今日の教会に対する神からのメッセージを見る目と聞く耳を持って聖書に向かうしなければなりません。検証されていない伝統に逃げ込むのではなく、聖書を不適切なものとして斥けるのではなく、神の原則を提示している明確な聖書の教えを探する必要があります。

適切な姿勢で聖書に取り組みたいと願う人は、

文化が私たちの見解に異議を唱えることを許したとしても、それが私たちの見解を決定することを許すことなく、また伝統から情報を得ることはあったとしても、それに縛られてはいけません。

最初に手がけるべきことは、聖書の最も重要な主題を理解し、その主題と整合性のある枠組みを選ぶことです。創世記から黙示録に至るまでの中心テーマは、神がご自身を霊とまことをもって礼拝する人々、神を愛し、互いに愛し合う人々をお造りになり、彼らを、ご自身との交わり、そして互いの交わりに絶えず招き入れておられるということです。神とご自身の民との交わりの図¹（次頁）を参照してください。

創世記 1 章、2 章は天地万物の創造を描写しています。

神が異なっているが一体であるところの男と女を創造されたとき、神は統一体と共同体の両者を創造されたのです。彼らの多様性は明らかです。彼らは男と女とに造られました。しかし、彼らの一体性もまた明らかです。一つの肉が二つの被造物になったのです（注¹）この一体性のゆえに、彼らは交わりと共同体を喜ぶのです。創造の御業の前にも後にも存在している彼らの一体性、彼らの「一つの肉」性が創世記 1 章と 2 章において、上下関係を排除しているのです。（注²）

創世記 3 章は罪の支配をもたらした人間の墮落について語っています。

罪が入り込んだとき、最初に無くなったものは一体性でした。アダムとエバは神から、そして互いから隠れ、自らの行為の責任を取ることを拒み、一人が支配者になり、もう一人が被支配者になりました。それは共同体の歪んだ形でした。（注³）一体性の中に存在していた平等性は失われました。

旧約聖書の残りの部分は、神がご自身の反抗的な民とどのように関わられたか、また、クリスチャンたちが織り称して「古い契約」と呼んでいるところの様々な契約を、神がご自身の民とどのように結ばれたか、という物語を描いています。

バベルの塔は、共同体にさらなる歪みをもたらしました。アブラハムがやがて一つ

の家族（共同体）の父となることが定められていましたが、その共同体は奴隷に成り下がりました。その後、一つの国民、ヤーウエを神とする共同体、神に忠誠を尽くし、互いに仕える祭司の王国を作るために、神はモーセを召して、民を連れ出されました。神は民をご自身の元に連れ戻すために士師を立てましたが、彼らは王を欲しました。その結果は分裂王国であり、彼らは崩壊しました。共同体は再び消え去りました。（注4）

しかし、神はご自身の民をご自身との交わりに引き戻そうと招き続けました。預言者たちは、神がご自身の民のために何か新しいことをなさると予言しました。ヨエルの預言は、聖霊が注がれるとき、女性たちも新しい形でその中に含まれると宣言しました。

新約聖書において、キリストは「贖罪」と新しい契約の導入と共に登場なさいました。

キリストは新しい共同体、王である祭司、ご自身のからだを確立されました。キリストは、いのちの与え主でした。キリストの死を通してこの共同体は塵み出されました。キリストは、死を遂げられる前に、私たちが営むべき成熟した共同体の模範を示されました。キリストは一致のために祈られました。キリストは一つの群れ、一つのからだについて語られました。（注5）

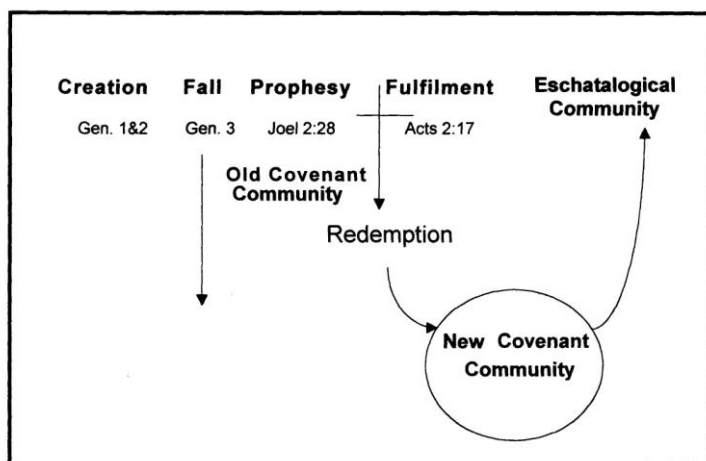
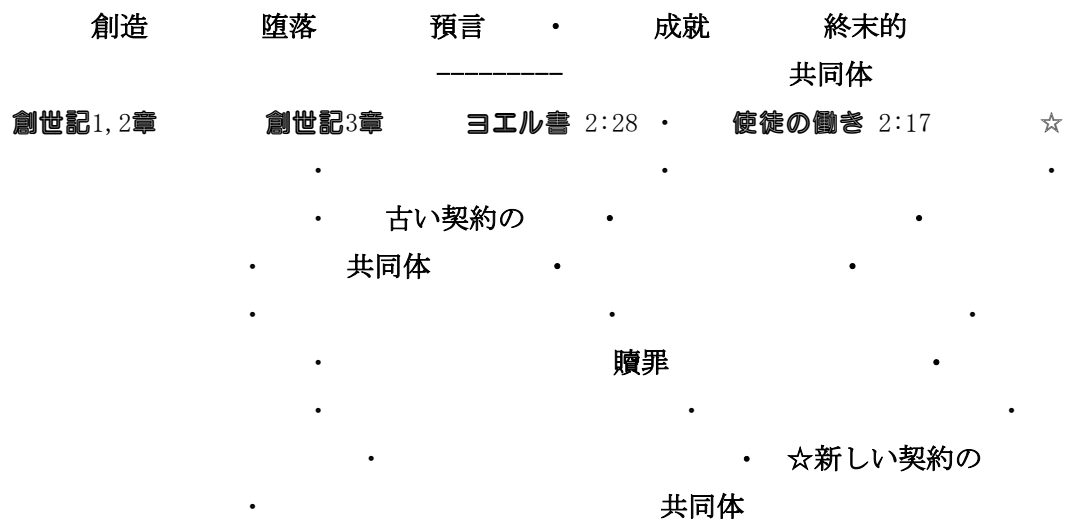


Figure 1



神は、私たちがこのような共同体を、今、ここに、作り出す努力をすることを明らかに望んでおられます。新約聖書は、キリストの再臨の時に享受する永遠の共同体をより忠実に反映しながら、今の世において、キリスト者が聖霊の助けによって、信仰、態度、そして関係における成熟に至る道を示しています。

男も女も、神との、そして互いの交わりを持つために創造され、聖なる国民、王である祭司として選ばれ、キリストのからだを構成するために贖われました。地上において、キリストをかしらとしてこの共同体の中で調和と一致をもって生きることが期待されています。この信仰の共同体の中で愛をもって互いに仕え、それによって私たちの周囲の世界に神の真のご性質を表わすことが命じられ、そして最終的には、天の軍勢と共に神を永遠に礼拝し賛美するのです。スタン・グレンツとデニス・ミュイアー・クジエスボが著書「教会の中における女性たち」で述べているように、「信仰の共同体は・・・福音を述べ伝え、将来における神による統治を、現在において認める者たちの集団としてこの世で生きる〔べき〕です。」(注6)

キリストこそが旧約聖書のすべてが指し示すお方であり、そのお方から新約聖書のすべてが流れ出て来るのです。キリストによる贖いは古い契約の中で予兆され、新しい契約の中で成就されました。贖われた者だけが神の民であり、贖われた者だけがキリストのからだであり、贖われた者だけが神との交わりを持つという目的を達成し、贖われた者だけが聖なる国民、王である祭司であり、贖われた者だけが神の真のご性質を表わすことができ、贖われた者だけが「キリストにある」永遠のいのちを持つことができるのです。なぜなら、私たちは永遠に向けて造られ、贖われたのであり、私たちは、この地上での新しい生活を、後に来る生活を予兆するようなかたちで生きるべきだからです。

贖いこそが神のご計画の全容を表わし、贖いこそが聖書を解釈する際に全体像を心に留めることを可能にし、それゆえ、贖いこそが聖書全体を理解するための論理的な枠組みとなるのです。しかし、教会における女性の位置づけに注目するとき、別の枠組みを用いて特定の箇所を解釈してしまいがちです。今まで、そのように教えられてきたので、気がつかないうちに不十分な枠組みを用いてしまうのです。この研究の中で、私たちは一貫性を追求します。その結果、異なる枠組みが、異なる解釈をもたらすことが明らかになるでしょう。

B. 伝統的な枠組み（パラダイム）の検証

教会の中で育ったクリスチャンの大半は、男性と女性の関係について、また教会の中における女性の位置づけについて、家父長的、階層的な模範（モデル）を教えられてきています。（伝統的な教えがいかに私たちの信念を左右するかという例が下の図に挙げられています。（注7））この伝統的な模範（モデル）の中では、女性の働きは性別によって制限されていますが、男性は能力、賜物、そして召しによって働くように励まされています。キリストが入って来られた社会の秩序、すなわち、家父長制度は伝統主義者たちによって、すべての時代における決定的な形として見なされています。

また、罪のもたらした結果の一つが、アダムがエバを支配することだったので、この裁きの余波がいつの時代においても男性と女性の基準を決定するものと見なされています。墮落という枠組みが聖書を解釈するときに用いられるようになると、罪のもたらした支配が説明（＝descriptive；神は罪のもたらすものが何であることを説明しておられるという示唆）ではなく、定め（＝prescriptive；神は私たちが罪のもたらすものに苦しみ続けな

ればならないと定めておられる、あるいは決定しておられるという示唆)になります。当然の帰結は、罪の結果は神によって確立されたと見ることです。

この伝統的な見解の主な特徴の一つは、男性には権威が与えられているが、女性には与えられていない、ということです。その結果、権威は神のことばや共同体の中にあるのではなく、男性の指導者の中にあると見なされ、服従とは女性（あるいは妻）から男性（あるいは夫）への服従として教えられます。

フェイス・マーチンは、私たちの生活を形成する多くのものは成文法ではなく、むしろ痛みを伴う経験や拒絶を通して教えられた習慣 ---- 文明の中にある慣例はあまりにも強力で、あまりにも基本的なので、私たちはその妥当性について疑おうとしません ---- であると指摘しています。

彼女は、私たちにその文化的な束縛から抜け出すようにとチャレンジしています。女性を隷属的な立場に置くような慣例は疑問視すべきであるという事実、実際、文明全体が間違っていることもありうるという事実の例として、マーチンは文化の中における様々な状況を詳細に述べています。たとえば、女性の割礼が実施されている文化、自分自身が生き残るためには息子を必要としている極貧状態に置かれている母親が、次の妊娠の機会を早めるために娘を早く乳離れさせる傾向のある文化、そして、嫁入り時の持参金制度が「息子は家族に富をもたらすが、娘は富を持ち出す」という意味になる文化です。

力は権威を持っている男性に内在すると理解されるので、女性の側からの男女平等に向けての努力は、男性の正当な力を侵害するものであり、それゆえ、神のみこころに反する動きと見なされ、避けるべきものであるとされます。

この考え方は、男性と女性の伝統的な位置づけの受容か、あるいは一方に男性の支配、他方に女性の支配を置く天秤によって表わされる力の闘争のどちらかを引き起こします。今日、どちらの極端も支持する人は殆どいないので、理想はどちらかというところの中心に近い所にあると考えられます。平等は両極端の中心点にあると見なされます。(図2参照)

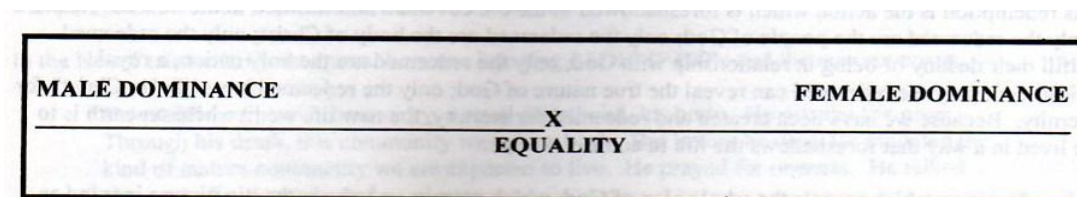


Figure 2

男性の支配

女性の支配

男女の平等

図2

この天秤について語られるときにしばしば用いられる用語は、権威、命令、力、統御、統治、支配です。権威は、その権威に服従させられる人の「上に」ある権威として理解されます。

この型（モデル）の問題点は、それが力に基づいた型（モデル）であり、その型（モデル）枠組みの中で女性の位置づけについて議論することは、単にその力の抗争を果てしないものにすることです。ある人たちはそのバランスの中心点を男性の支配の側から中心点に向けて動かそうとします。あるいは男性の支配に釣り合わせようとして、そのバランスの中心点を女性の支配の側に持っていこうとします。

しかし、どの地点にこの天秤の中心点を置くと決めても、その位置は二つの相対立する両側の緊張状態を保つことによって成り立ちます。一方が少しでも譲るなら、他方が力を得ます。一方が少しでも力を得るなら、他方が失います。このように男性と女性は敵対関係に置かれ、どこに理想的な中心点があると決めたとしても、それは相手方の力の侵略を拒絶することによってのみ保たれます。それゆえ男性は女性の「力」の助長を恐れ、女性は男性の「力」を拒みます。

教会がこの型（モデル）を用いて男性の支配と女性の支配のバランスを見出そうとするなら、緊張関係は続きます。緊張関係は恐れから生じて来ます。その恐れとは、他者の力への恐れであり、自らの力への恐れであり、支配されることへの恐れであり、支配権を失うことへの恐れです。支配は常に恐れを生み出します。しかし、聖書の教えは支配と何のゆかりも関係ありません。むしろ、信者の共同体における生き方は、しもべの態度によって特徴づけられている、というのが聖書の教えです。キリストのからだの中であって、互いを愛によって建てるのが目標です。しもべの心より支配する態度を増長する枠組みは私たちが求める型（モデル）とは言えません。

もし、墮落という枠組みの代わりに贖罪という枠組みが用いられるなら、罪がもたらした結果は歓迎されざるものと見なされ、その罪の結果を贖う必要が私たちの目標となります。罪の結果には男性の支配も含まれます。それは女性の支配に取って代わられるべきものではなく、また両者の緊張関係によってバランスが保たれるべきものでもありません。支配という型（モデル）から完全に離れ、新しい型（モデル）—— 新しい秩序 —— を採用すべきです。その新しい型（モデル）を愛のうちに確立するためにキリストが来られたのです。

それでは、愛によって創造され、支配を非聖書的として排除する型（モデル）とはどのようなものでしょうか。

C. イエスの枠組み（パラダイム）の採用

キリストのからだにおける、男性と女性の働きにふさわしい聖書的な型（モデル）を確立するために、私たちは支配の天秤から完全に離れて、全く違う領域に移行しなければなりません（図3参照）。神の国の中での働きは、男性の支配と女性の支配のバランスによってではなく、キリストによって導入された新しい秩序によって決定されるべきです。その新しい秩序とは、いのちを育むことと賜物を磨くことが、支配というものを一切締め出す新しい共同体です。

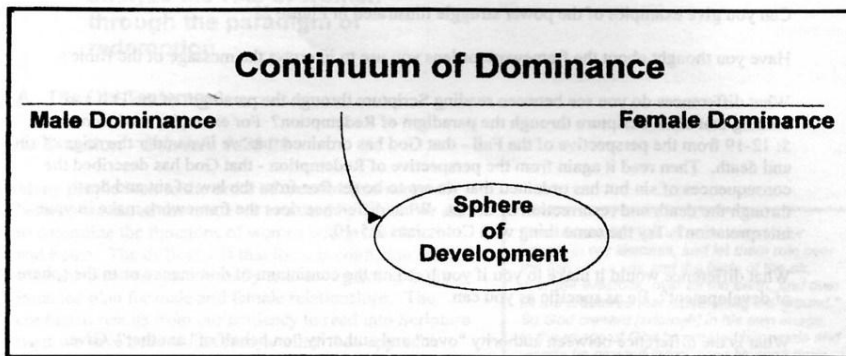
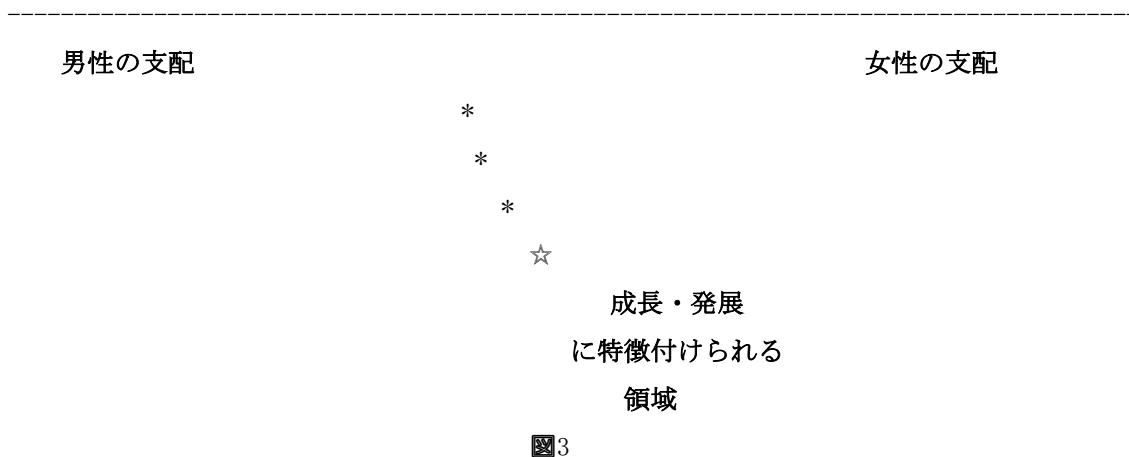


Figure 3

支配の天秤



この枠組みの中では、別の世界観から問いが寄せられ、権威、命令、力、統御、統治、そして支配という天秤は、励まし、養育、そして共同体という領域に席を譲ります。力に基づいた型（モデル）の代わりに、賜物に基づいた型（モデル）になります。そこでは、権威は誰かの「上に」振るわれるのではなく、誰かの「ために」行使されます。平等性は一方が他方に力を譲ることによって保たれるのではなく、それは共同体に内在するところの価値です。

この領域に関して使われることばは、賜物、奉仕、励まし、養育、共同体です。権威は神のことばの中に位置づけられ、権威ある地位は人々の益という目的のために与えられ、人々の上に力を行使するためではありません。服従はキリストのからだの中において互いに服従すること、そしてキリストに服従することとして捉えられています。職務は性差からではなく、霊的賜物から出て来ます。

罪の結果ではなく、キリストの贖罪の御業がこの新しい枠組みを確立したのですから、私たちはこの贖罪という「恵」を通して聖書全体を見るべきです。

これが、私たちが教会内における女性に関する問題を見るのに用いる枠組みとなります。

1. 教会内の女性の位置づけについてのあなたの考え方や議論に、どのような型（モデル）が影響を与え
2. イエスはどのような型（モデル）をお用いになると思いますか。
3. 図2に例証されているような力の闘争の例を挙げることができますか。
4. あなたが聖書の教えを解釈するのに用いている枠組み、あるいは目がねについて考えたことはありますか。
5. 同じ聖書の箇所を、人間の墮落という枠組み（パラダイム）と、贖罪という枠組み（パラダイム）を用いて読むのでは、どのような違いがあると思いますか。たとえば、ローマ人への手紙 5:12~19を墮落という視点 ---- すなわち、神は、私たちが罪と死の支配下に生きようとお定めになられた ---- から読んでみなさい。次に、同じ箇所を贖罪という視点 ---- すなわち、神は、罪の結果を説明しておられるのであって、私たちがキリストの死と復活を通して罪と死の律法から解放されるようにお定めになられた ---- から読んでみなさい。枠組みはあなたの解釈にどのような違いをもたらしますか。同じことをコロサイ人への手紙 3:5~10でも試みてみなさい。
6. あなたが支配の天秤の中に生きているか、それとも成長・発展に特徴づけられる領域に生きているかによって、どのような違いが出てきますか。できるだけ具体的に答えてください。
7. 誰かの「上に」振るわれる権威と、誰かの「ために」行使される権威の違いは何ですか。例を挙げなさい。

III. 聖書解釈

この章における課題は、贖罪の枠組み（パラダイム）を通して女性の位置づけを分析することです。

A. 旧約聖書

1. 創造 - 創世記 1:26~28

多くの人は（男が女より先に造られたという）創造の順序を教会及び家庭の中における女性の役割を決定づける模範あるいは基準と見なします。問題は、神が男女の関係に対してあらかじめ持っておられたご計画について、創造の記述が何を語っているのかということについての混乱が存在するということです。この混乱は、私たちが偏見なしに聖書を読んで聖書そのものに語らせるのではなく、聖書がそのように教えていると、すでに教えられてきたことを聖書に読み込んでいく傾向から生じてきます。

創造の記述を新鮮な目で読んでみましょう。

創造に関する最初の記述において（聖書の他のどの箇所でも同じですが）、私たちが自分で選んだことをそこに読み込むのではなく、そこに書かれていることを探す必要があります。

まず初めに、*アダム*ということばの用法は、混乱を招きやすいという問題があります。神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに *アダム*（＝人、ヘブル語の土という意味の *アダマー* に発音が似ている）を造ろう。・・・そして彼らに支配させよう」と仰せになりました。ここで *アダム* は明らかに複数形であり、人類 ---- 男と女 ---- に言及しているはずです。

次に、土地を支配するようにという命令が彼ら ---- 男と女 ---- に与えられているということは明らかです。その命令は、女を助手、召使い、奴隷、または部下とする男に与えられているものではありません。またこの命令は、女が造られる以前に男に与えられたのではありません。ですから、女は、男が地を支配するための部下の「助手」として造られたという考え方はこの箇所からは出てきません。

それ故、創世記 1 章は男も女も同様に神のかたちに造られたという根拠の元に、女の劣等性または従属性に反対する議論を展開しています。神は男と女を共に祝福し、彼らが地を満たし、それを従え、すべての被造物を支配するように命じられました。彼らは同じ人間であり、祝福と責任に共に預かるべきです。

この箇所はまた、罪がこの世に入ってくる前に神が人を男と女に造られたという根拠の元に、性や性欲は罪の結果であるという考え方を斥けます。

創世記 1 章は、創造全体の概観の序章の役割を果たしています。他方、創世記 2 章は創造の 6 日目に焦点を当て、男と女としての人間の創造についてより多くの情報を提供しています。

2. 創造の詳細記述 - 創世記 2:4~25

創世記 2 章には、男と女の創造についての詳細な記述があります。この箇所から男の優越性と女の劣等性の議論を導き出す人たちがいます。この立場を支持する主な議論は、長子には卓越性と権威があり、助け手は従属的であり、名前を付けることは権威を示唆するという考え方を含んでいます。しかし、これらの議論を注意深く分析すると、それらが決定的でないことがわかります。

最初に造られた者に権威が与えられるのでしょうか？

最初に造られることがすなわち権威という考え方は、やはり本文に読み込みをしている考え方です。

この箇所には上下関係ではなく、不完全さのみが示唆されています。男が最初に造られたのだから、男に優越性があるという考え方は、この箇所に見出されるものではなく、押し付けられたものです。

「助け手」は「劣等性」を意味するのでしょうか？

この箇所から男の優越性を論議するもう一つの理由は、彼に「ふさわしい助け手」と訳されている *エゼル* *クネグド* ということばの使い方によります。

神が上下関係を意図されたという議論を展開するために「助け手」または「助力者」ということばの用い方に伝統的に大きな強調点が置かれてきました。しかしヘブル語の *エゼル* *クネグド* ということばを注意深く研究すると、そのような考え方は排除されます。

英語の「助け手」ということばは従属性または劣等性を示唆しますが、ヘブル語の *エゼル* には、そのような言外の意味はありません。この個所で女を指すことばとして用いられている *エゼル*（助け手）は、旧約聖書で使われている²¹回のうち15回は神を指しています。その意味は「守り手」（詩篇 33:20）と「救出者」（出エジプト記 18:4）です。これは *エゼル* ということばの内に潜在的に低い立場という意味が含まれているという考え方を明らかに排除します。（注1）実際、イスラエルを生み出し、守り、救い出す、上に立つ御方としての神を描写することによって、*エゼル* は「劣等性」よりもむしろ「優等性」を示唆するとさえ言えます。但し、それが女を指すときは、「顔と顔を合わせて」、「同等の」、「・・・の前に」あるいは「目に見える」という意味の *クネグド* ということばによって修飾されています。フィリス・トゥリブルが著書「神と性の修辭学」の中で説明しているように、この修辭語こそが、「優越性という言外の意味を和らげ、アイデンティティー、相互関係、そして平等性という意味を持たせるのです。ヤーウエの神によると、ちりて造られた被造物が必要としているものは、自分の下にくるものでもなく、上に来るものでもない伴侶、すなわち同一化によって孤独を緩和する存在です。」（注2）

そこで、この個所で提示されているのは、権威も従属性も排除する、鏡のイメージです。重要なのは、類似性です。不幸なことに、多くの人々によってこの個所に読み込まれている考え方は、「助け手」は従属性を意味するというものです。

論説文「女性の働きを支持する」の中で、J. I. バッカーは女性が助け手であるという考え方を、男性が常に事を始める人であり、リーダーであって、女性は常に寄り添う者であり、決して率先して事を始めないということを示唆するものとして用いています。（注3）女性は男性に対して責任を取ることも、権威を持つこともできません。しかし、これは原語のヘブル語 *エゼル* ことばの一般的な用い方に由来しない考え方です。

著書「のろいを超えて」の中で、アイダ・ベサンコン・スペンサーは、この問題を次のように説明しています。「『助け手』ということばを返めることは、創世記2章全体の文脈を無視することになります。女はアダムに仕えるためではなく、アダムと共に仕えるために造られたのです。」（注4）アダムは「エテンの園を耕し、守る」（創世記2:15）ためにそこに置かれました。そして、神は人がひとりであるのは良くないと言われました。

「ひとりで」とは、関係の中に存在するのではなく、孤立していることを指します。男が女を必要としているのは、ひとりで園を耕せないからではなく、彼が交わりを必要としており、*エゼル* *クネグド* —— 彼と同等であり、パートナーであり、「顔と顔を合わせる」仲間であって、彼の愛を受け、彼を愛するにふさわしい、彼に似た人—— の存在なしには、（神のガたちに造られた）自分の人間性を十分に発揮出来ないからです。彼らの違いゆえにではなく、彼らが似ており、人間は関係を築くように造られているので、男は女を必要としているのです。（注5）

神がアダムのところに動物を連れて来たとき、彼はそれらに名前を付けましたが、—— 神が女を造るまでは —— 彼にふさわしい助け手が全く無いということがわかりました。この文脈の中で、彼らの仕事は違うものになるだろうという示唆は何もありません。男はふさわしい助け手を必要としており、彼らは共に創世記1章の命令を守るだろうということだけです。園を「耕し、守る」ということは、人が「全地を治める」一つの方法です。（注6）

名前を付ける行為は、権威を意味するでしょうか。

男は動物に名前を付けることによって動物に対する権威を実証し、また女に名前を付けることによって女に対する権威を実証したという考え方は、聖書全体を支配する枠組みとして「墮落」を用いている例です。なぜなら、エバは、実際には、墮落の後に名前を付けられたからです（創世記 3:20）。ですから、エバの命名を、神が創造において男に権威を与えたという根拠として用いることはできません。

さらに重要なことは、この解釈は創造の記述の大切なポイントを逃しているということです。ポイントは男と女は同質であるということです。

男がちりから造られたからといって、ちりに劣るわけではないのと同じように、女が男から造られたという事実によって、女が男に劣るわけではありません。むしろ、この箇所が指摘しているのは、彼女のアイデンティティーの本質は、男と「違う」というよりも、男と「同じ」というところにあります。この箇所は、女は「私の肉からの肉、私の骨からの骨」と明確に宣言しています。男と女は 動物とは違って ---- 同じ種類の ---- 「ひとつの肉」です。

ひとつひとつの動物が彼のところに連れて来られたとき、彼は自分の名前と関連していない名前を付けました。動物の本質は異なっていたからです。しかし、女が彼のところに連れて来られたとき、彼は彼女が自分から出たことを認識しました。彼女は同じ質からできていて、人は今や男と女、すなわちイシュとイシャとして認識されました。強調点は、動物とは違って、---- 同じ本質 ---- 一致という点にあります。一方は他方から派生したものです。

この箇所を注意深く読むと、エバに名前を付けたことは、男が女に対して権威を持っていることの裏付けとして用いることができないとわかります。権威という考え方は、前もって決定された意味をその箇所に読み込むときにのみ出て来ます。

誰が誰と結び合うのでしょうか？

男の権威は創造において確立されたという伝統的な考え方の論破に加えて、創世記の記述は意外な構図を提示しています。男はその父母を離れ、妻と結び合うべきです。（欽定訳）これは、女が父母を離れて男に結ばれることが期待される家父長的男女観に反します。新国際訳（The New International Version）は、創世記 2:24 の**ダバク**というヘブル語を「結ばれる」と訳していますが、この同じことばが他の箇所ではヘブル語の意味により近い「しっかりくっつく」と訳されています。（注7）メアリー・エバンスが著書「聖書の中の女たち」の中で結論づけているように、ヘブル語のテキストでは「くっつく」ということばは、弱い者が強い者に対してくっつくときに使われます。（注8）それはイスラエルが神に ---- 逆ではなく ---- にくっつくという図式です（申命記 10:20；ヨシュア記 23:8）。

まとめ

創世記の第1章は、女の源は男の源と同じであると明確に指摘しています。女は神の御心によって神のかたちに造られました。第2章は女の持つ関係と働きは、男の持つ関係と働きと同じであることを強調しています。それぞれ互いに依存しており、また一体となって生殖と支配の祝福と責任を享受します。

ここにおける強調点は彼らがどのように造られたかではなく、どのような関係を持っているかです。(注9) 彼らは互いに恥ずかしさを覚えることなく、一体化していました。これが共同体の始まりでした。

このように、聖書の創造の記述の導入部分が「創造の秩序」を提示していることは明らかなです。そこでは、男と女は同等のものとして神のかたちに造られ、彼らの造り主との関係に等しく招き入れられ、被造物に対する支配を等しく命じられました。この二つの章の中には、上下関係、従属性、家父長制、または服従さえも表わすものは一切ありません。このような考え方は、すでに決定づけられた解釈がテキストに読み込まれたときにのみ発見されます。

3. 罪によって損なわれた関係 - 創世記 3:1~24

フェミニストたちは、創世記 3:16 は女性の従属性の基盤になっているので斥けなければならないと主張します。伝統主義者たちは、この箇所が男の権威と女の従属性の基礎であり、それは恒久的かつ規範的であると主張します。

私たちはこの箇所をどのように見るべきでしょうか。実際には何が起こったのでしょうか。アダムとエバは一体になるために造られました。彼らは同じ目的のために造られた同質のものでした。彼らはどちらも神のかたちに造られ、被造物に対して一緒に責任を果たすことになっていました。

罪が入り込んだとき、人間のレベルでは二つのことが起こりました。彼らがそれまで経験していた一体性は壊されました。―― 彼らはいちじくの葉で自分たちの裸を隠し、神から、そしてお互いから隠れました。そして与えられていた共同の責任体制が消え、責め合いが取って代わりました。その結果、一人が支配者になり、もう一人が被支配者になりました。罪の結果は、神が人類のために計画しておられた共同体の分裂でした。

男女間の上下関係を信奉するジョージ・ナイト III 世は、著書「男女の役割関係についての新約聖書の教え」の中で、創世記3章は、妻と夫の役割は神の創造の秩序によって制定され、その関係は今や罪の結果によって影響されることになるという前提に立っている、と述べています。「彼はあなたを支配することになる」ということは、罪の結果が（彼らの）関係を損なったことを表わすと主張しています。(注10) この点に関しては、彼は正しいです。彼が間違っている点は、第一に創造の記述の中で、神によって任命された関係が上下関係だったということと、第二にその関係が損なわれた過程です。

ナイトは神によって造られた関係は、かしらとしての夫（すなわち権威ある立場）と助け手としての妻（すなわち彼の権威に服すべき立場）である、と主張します。それゆえ、ナイトによると、罪の結果は、女が男の権威に従うことを望まなくなることです。(注11)

この議論の誤りは、神によって制定された関係は権威と服従の関係ではなかったという点にあります。罪が関係を損なったというのは事実です。しかし、損なわれた関係というのは、男と女の間を権威の関係、すなわち、支配と服従の関係にしたことです。不従順が入り込む前は、男と女はその源においても、その行動（創世記 2:24）

においても「ひとつの肉」でした。しかし今や、「ひとつの肉」は裂かれました。フィリス・トゥリブルのことは
を惜めれば、

男は女の願いに答えようとしません。むしろ彼は彼女を支配しようとしめす・・・
それゆえ女は墮落して奴隷になり、男は墮落して主人になります。男の優越性は神
から与えられた権利でもなければ、特権でもありません。女の従属性は神の命令で
もなければ、宿命でもありません。神はこの結果を描写しておられるのであって、
それを罰として命令しておられるわけではありません。(注12)

家父長制度は、必ずしも女性に敵対する社会組織ではありませんが、女性を支配し、搾取するような男性優位
の制度を正当化する可能性があります。家父長的なヘブル社会では、神はご自身の民が自らの支配下にある者た
ち誰に対しても、公平かつ憐れみ深く振る舞うことによって、神の贖いの力を証しするようにお命じになられま
した。(注13) グレッチェン・ゲープリン・ハルによると、

家父長制度という社会組織について考えるとき、真に問うべきことは、差別と人権
の侵害を正当化する制度の続びをどのように繼うかではなく、果たしてそれを繼う
べきかということです。(注14)

私たちは、神の贖いの力によって「一人の人が常に支配しなければならない」と主張する哲学を避け、そのよ
うな哲学を「キリスト教化する」ことは、すなわち、その哲学に終止符を打つことであると悟るべきだ、とハル
は主張しています。(注15)

男も女も呪われてはいなく、ただ蛇と土地だけが呪われている(創世記 3:14, 15, 17b) ことに注目することは
重要です。女にとって罪の結果とは、産みの苦しみと、夫を恋慕うが、夫が彼女を支配するようになること
です。男にとって罪の結果とは、苦しんで食を得ることと、エデンの園から追放されることです。しかし、それ
らは永久に続くようにと意図されたものではありません。すべての罪の結果がそうであるように、科学、医学、人
間の憐れみ深い行為に見られる神の一般恩寵、そしてイエス・キリストの贖いの血潮によって、それらは贖われ
ることができます。イエスは墮落の結果を取り除くために来られ、人類も食糧生産と出産の苦しみを軽減するた
めに、確実に協力してきました。女も男の「支配」を取り除くという益を受け、むしろ、「平等の関係と・・・キ
リストの贖いの恩恵を被る(生き方)」を楽しむべきではないでしょうか。」(注16)

4. 旧約聖書における女性

a. 神の女性的イメージ

神は食糧、水、衣服を用意するというような、ヘブル文化では女性によってのみ担われていた働きをする者
として描かれています。神はまた産みの苦しみを経験し、子供の世話をし、母親のように慰め、一般に母親のもの
とされている感情を経験する者として描かれています。神はまたすべての涙を拭き去る御方です。

詩篇 123:1~21

イザヤ 66:13

創世記 3:21

ヘブル人には女神崇拜は厳しく禁じられていましたので、神に対して女性的イメージが記されていることは驚きです。しかし、神に対する女性的イメージは、神が女性であることを意味しません。同様に、神の男性的イメージも神が男性であることを意味しません。男あるいは女として神に言及するのは、ヤーウエに対するヘブル的理解と一致しません。男であれ女であれ、すべてのイメージは形而上学的なものであり、神を性別化する働きはしません。それらは、むしろ、神を人格化し、神が被造物との関係において、どのように行動されるかを表現するものです。性は、それ故に「男性的であること」も、被造物世界の特質です。

男性の権威という考え方を維持し、支持するために、ことばの違いにおいて微妙なニュアンスの違いを作り出すクリスチャンたちがいます。彼らは、神は（性別という意味では）男性ではないことには同意します。しかし、神は（行動においては）男性的であると主張します。そのニュアンスの違いの含みは、女性にとっては重要です。もし、神が男性的であるなら、この世において、男性の行動は神のガたちをより良く反映することになります。この事実は「男と女の違いを、生物学的あるいは社会学的な違いを越えた、霊的な違いという新しい、重要なレベルを当然のものとしします。」（注17）

しかし、聖書は男性的あるいは女性的な行動を絶対的に、あるいは排他的に区別していません。ただキリストの姿に変えられるべき（男として、そして女としての）男性と女性についてのみ語っています。性は神が人間のためにお造りになったものです。旧約聖書は性や性的な行為をヤーウエに帰することを厳しく否定しています。「創造の原動力をその性質において性的と見たのは古代の異教の教えです。」（注18）。聖書は、地とそこに住む人々は神の意思によって創造されたと教えています。神はことばによって世界を産み出し、人間の命を形造るために、この被造物世界の物質を取られました。これは創造の行為であって、生殖ではありません。「神は、この世界とそこに住む人々を ---- 産んだのではなく ---- 造られました。」（注19）

b. 旧約聖書における女性の役割

ヘブル社会において、女性たちは祭司職以外のすべての職務に就きました。女性のリーダーシップは、士師、女王、そして預言者の職務を通して表わされました。

士師：士師記 4:4~16

イスラエルが王制になる前、神は士師たちに社会を治めるようにお命じになりました。士師たちは「神の義を執行し、イスラエルの究極の救い主を指し示しました。」（注20）この箇所はデボラを士師としてだけでなく、女預言者としても描写し、彼女が「当時のイスラエル社会を指導していた」と主張しています。

神は彼女を通してバラクにお語りになりました。バラクはデボラが彼とともにいくなら戦いに出て行く用意ができていました。彼女の統治に関する最後の記述は「この国は四十年の間、穏やかであった」（士師記 5:31）でした。

女王：列王記第二 11:1~16

王であった息子の死後、未亡人であった女王アタルヤは、南王国の王座を確保する行動を起こし、7年間の治世を全うしました。たとえ彼女が他の男性の王たちと同様に、神を敬わず、権力に馴れていたという事実があったとしても、イスラエルが一人の女性によって統治されていたという事実を否定するものではありません。

預言者：列王記第二 22:8~20

大祭司ヒルキヤが律法の書を見つけ、ヨシユア王にその事を報告したとき、王は国に対する神のおことばについて伺うために、祭司たちを女預言者フルダの許に送りました。フルダは、神の裁きのお告げを使いの者たち、王、そして国に対して忠実に語りました。

預言者：ネヘミヤ 6:14

この箇所は、旧約聖書が、女預言者として認めたミリアム（出エジプト記 15:20）、デボラ（士師記 4:4）、そしてフルダ（第二列王記 22:14；歴代誌 34:22）の短いリストにノアデアを加えています。

c. 雅歌

この旧約の書物は、性の相互依存を明確に肯定しています。雅歌の中には男性の支配、女性の服従、そして性に対する固定観念（注²¹）は見られません。

d. 箴言 31:10~31

箴言31章で描写されている理想の妻は、翻訳者たちがそのように訳してきたので、しっかりした妻、あるいは「良い妻」として知られています。しかしフェイス・マーチンが指摘しているように、彼女はヘブル語で「勇敢な、強い、力強い」という意味のチャイールと呼ばれています。ヘブル語のテキストがチャイールを男性たちに適用するとき、英語のテキストは「勇気ある」または「勇敢な」と訳していますが、女性たちがチャイールと呼ばれているときは、同じ翻訳者たちが「良い」「高貴な」または「貞潔な」ということばを用いています。「これらのことばは、どれもその意味において、またその強さにおいても到底チャイールに匹敵しません。強い女性 —— 誰が見つけることができましょうか。」（注²²）

ここで描写されている女性は財産を持ち、夫と家族を養い、気前が良く、自分で生産した商品売り、知恵を用いて話し、教え、指導者たちの場である町の門で賞賛を受けています。

まとめ

一般の文化が、家庭という限られたスペース以外の所では女性を重んじることがなく、女性に公の場でリーダーシップを取る機会を与えなかったのに反して、旧約聖書の女性たちは神に召され、神から賜物が与えられ、特別な働きのために聖別され、彼女たちの権威は人々から認められたという証拠は十分にあります。確かに、彼女たちは例外的でした。しかし、神の命令が絶対なとき、神は例外をお作りになりません。

今日、旧約聖書の女性の役割についての反応は様々です。マーチンが指摘しているように、

男性の権威を奉じる多くのクリスチャンたちは、旧約聖書のライフ・スタイルを社会に対する神の理想的なご計画だとして引用します。家父長制度と神の父性は互換性のある理想であり、同意義なものとして見られます。その結果、旧約聖書の女性の位置が今日の家族の在り方に対する神の御心であると見られています。他方ノン・クリスチャンのフェミニストたちは、古代社会の女性の位置の不公平さを捉え、神もまた弱い者いじめをする男の一人だとして軽蔑します。彼らも神が家父長制度を計画されたと決めてかかっています。(注23)

しかし、家父長制度はヘブル文化特有のものではなく、当時知られていた異教社会の経済的、法的、そして社会的な仕組みであり(注24)、神の民に対する継続的な要求ではありません。

5. 新しい枠組み(パラダイム)の預言 — ヨエル 2:28~29

神はヨエルに、神の霊が老若男女すべての信じる者に注がれるときが来るであろうと啓示されました。すべての信じる者が神の霊の注ぎと、その結果である預言に預かるでしょう。これが贖いによる新しい秩序、新しい枠組み(パラダイム)の告知です。

話し合いと熟考のための質問項目 — 第3章 — 旧約聖書

1. 創造の記述を新鮮な角度から読んだ結果、どのような新しい考えを持つようになりましたか。
2. もし、聖書の参考箇所として創世記1章と2章しかなかったら、男女の役割と男女の関係についてどのような結論を出しますか。
3. 創世記の創造の記述は男女の上下関係を支持していますか。
4. 男と女の両方共神のかたちに造られたことには、どのような意義がありますか。
5. アダムがエバに名前を付けたのが墮落の後だったことを考慮に入れると、「名前を付ける行為は、上に立つ力を意味する」という考え方を、神は創造時に上下関係を意図しておられたことの証拠だと見ることが果たしてできるのでしょうか。
6. 神との関係において、男と女の間に区別が存在しうるのでしょうか。神に対する奉仕においてはどうか。
7. アダムが先に造られたという事実から、女に対する男の支配権はどのように導き出されるのでしょうか。
8. 罪が入る前の、最初の「共同体」をどのように描写しますか。罪が入ってからはどうでしょうか。
9. 私たちの言語の範疇で、神が女性であるかのように描写する異に陥ることなしに、神は「男性」ではな

いという考え方をどのように教えることができますか。神の男性的イメージは、私たちにとってどのような役目を果たすべきでしょうか。神の女性的イメージは、同様な役目を果たができるでしょうか。神には性がないということ、すなわち男でも女でもないこと、霊であること、そして性（と生殖）は被造物の特徴であって、神の特徴ではないという明快なメッセージをどのように維持することができるでしょうか。

10. 非常に性的な存在である異教の神々とヘブルの神は大いに異なります。この事実は神の啓示にどのような影響を与えたでしょうか。「父」ということばは男性を衰わすように意図されたのでしょうか。
11. あなたは神を男性として考えますか。そうであるなら、なぜですか。あるいは、なぜそうではないのですか。
12. 誰が、どのような特徴（例えば、養育、教育、力、感情、組織力、指導力、仕える姿勢、服従、優しさ、弱さ、殉教死など）が女性的か男性的かを決めるのですか。それらは聖書的に決められたのですか。それとも文化的に発達してきたのですか。
13. 神の男性的イメージを覆すために、さまざまな解決法が提案されて来ました。
ある人たちは、神を父と呼ぶだけでなく母と呼びます。
ある人たちは、王、主人、主、御子、父のような完全に男性を意味するすべての名詞を取り除きます。
ある人たちは、私たちの文化の中では女性的と見られる名刺 —— 養育者、慰め手、命を産み出す者を使います。
ある人たちは、「彼自身」という再帰代名詞を使う代わりに、名詞を繰り返したり、「神ご自身」ということばを使うことによってすべての男性代名詞を除きます。
ある人たちは、神は男性の言語で啓示されているので、それを変えることはできない、と言います。
ある人たちは、何も問題は存在しない、と言います。問題は問題があるという人の内に存在するのだと言います。今まででもこうであったし、これからもうこうあるべきだ、と言います。
ある人たちは、「それは自分にとっては問題ではないけれど、ある人たちにとっては確かに問題なので、無神経にならないように気をつけます」と言います。

あなたはどのように思いますか。

B. 贖いという新しい枠組み（パラダイム）

1. 文化的背景

新約聖書の時代に入っていくとき、イエスの生涯に登場する女性たちは、主に田舎の出身でユダヤ人であったことを覚えておくことが肝要です。この頃までにはローマとヘレニズムの影響が広まっていたとはいえ、彼女たちは主にユダヤの文化の中で社会生活を営んでいたことでしょう。彼女たちは「自らの場」を弁えていたはずで、女性たちは家庭という私的な領域で職務を果たすべきであり、公の場は男性たちのために確保されていました。

ユダヤ人女性の宗教的役割に関する文書によると、彼女たちが持っていた宗教上の

権利と働きの大半は家庭で参加できるものに限定されていたようです。レビ記¹⁵章に見られる聖書の規則と、それらの規則のラビによる解釈は、女性が神殿儀式に関わることを制限していました。さらに、礼典に関するある見解によると、イエスの時代においてさえ、会堂において女性が聖書を朗読するという、理論上は与えられていた権利を奪っていたように見えます。(注¹)

著書「聖書が肯定する女性」の中で、レオナード・スイドラーは「ユダヤ教の中心は、律法であるトーラーの学びと実践であり ---- 男性と女性の立場の違いはここでかなり明確に表わされています。なぜなら、女性は聖書(トーラー)を学ぶことを事実上禁じられていました」(注²)と指摘しています。彼はラビ・エリエーザー(ミシュナー³, 4)を引用しています。「トーラーのことばが女性に託されるくらいなら、それが焼かれたほうがまだましだ・・・娘にトーラーを教える者は誰でも彼女にわいせつを教えるようなものだ。」(注³) スイドラーは続けて言います。

女性たちは公の祈りにおいても、ひどく制限されていました。女性が公同の礼拝の会衆の定足数の数に入れられることはあり得ませんでした。女性たちは・・・同じように資格の無かった子どもや奴隷といっしょに分類され・・・(そして)声を出して読むことも、指導的な役割を演じることも許されませんでした。(注⁴)

ラビたちは公の場で女性たちに話しかけることも、あるいは自分の妻、娘、または母に挨拶することもしませんでした。(注⁵) 女性の役割は家事をきりもりし、子どもを産み、そして育てることでした。男性は妻を離縁することはできましたが、女性は極く僅かな例外を除いて夫を離縁することは許されませんでした。

女性の権利は非常に制限されていて、彼女たちには公の場は与えられていませんでしたが、彼女たちは家庭の中でかなりの責任と影響力を持っていました。(注⁶) しかし、家庭の中でさえ、女性がどれくらいトーラーを教えたか、あるいは教えられたかは定かではありません。なぜなら、彼女たちはトーラーを学ぶことを免除されただけでなく、「子どもや奴隷と同様にシエマ-朗唱、朝の祈り、または食事時の祈りをする義務はなかった(ミシュナー³, 3)」(注⁷)からです。

ラビたちの宣言に様々な違いが見られるという事実から、さらなる混乱が生じてきます。多くのラビたちが女性に対して輕蔑的な発言をする中で、ラビ・ベン・アザイは、男は娘に律法の知識を与えるべきだ、と言いました。(注⁸) ミシュナー・ナゲリム⁴. 3にはこのように書かれています。「彼は息子や娘たちに聖書を教えても良い。」(注⁹)

著書「教会の娘たち」の中で、タッカーとライフエルトが指摘しているように、女性たちは「会堂の教えを通して学んだように、非公式に多くのことを学んだかもしれません。しかし、女性はラビの弟子となるために、自らラビとの関係に入ることはしませんでした。」(注¹⁰)

イエスは、このように、女性に対して相反する態度を持っていたユダヤの社会に入って行かれ、新しい価値、新しい態度、そして新しい習慣を備えた新しい枠組み(パラダイム)を啓示なさいました。

2. 求められる態度

ルカ 22:24~30

教会の中における女性の位置づけに関するイエスの教えについての学びを始めるのに適切な箇所は、ルカ 22:24~30です。この箇所はキリスト者の真のリーダーシップの基準となるべき態度に対するイエスの命令の概要を示しています。

弟子たちの間の議論に回答する形で、イエスは新しい共同体は権威ではなく、僕（しもべ）の態度に基づいていると教えています。イエスの弟子たちは、「他の人を支配する」支援者であるという口実を用いる異邦人のようではなく、互いに真実に仕え合わなければなりません。

信仰の共同体は、周囲の人たちが守っていたのとは違う規則によって生きるべきでした。謙遜な僕（しもべ）の態度が彼らの特徴づけるべきでした。

それを主の働きの枠組みとして、私たちは特に女性に関するイエスの教えに目を向けることができます。

3. イエスの教えと模範

マタイ 19:29（マルコ 10:29~30）

イエスの価値体系によれば、姉妹を手放すのは兄弟を手放すのと同じ犠牲を伴いました。イエスの頭の中では、姉妹を捨てることにも言及する必要があるほど重要なことでした。「イエスは女性たちを、劣ったあるいは軽蔑された女としてではなく、価値のある、重要な人としてご覧になりました。」（注11）

マタイ 26:6~13（マルコ 14:3~9；ヨハネ 12:1~8）

この箇所については多くのことが書かれていますが、ここで観察すべき重要な点は、イエスは、弟子たちが自分たちの霊的な理解がマリヤの理解よりも優れていると決めてかかっていることを非難しておられるということです。（注12）多くの学者たちはマリヤを「イエスの死の意味を理解した最初の人」（注13）として位置づけ、「彼女がイエスに気前良く振りかけた高価な香油は、イエスの埋葬のための彼女流の備え方だった」（注14）としています。

（ヨハネ 12:1~8 に記載されているこの出来事に付け加えられている注釈を参照。）

マルコ 5:22~42

この箇所では、イエスは伝統的なユダヤの規則を破りました。「汚れた」女性がイエスに触れたとき、イエスは彼女に話しかけ、彼女を受け入れ、彼女を癒して送り返し、神殿に行ってお自分が清められなければならないという儀式を無視なさいました。その代わりに、イエスはもう一人の女性、ヤイロの娘を死から甦らせるために進んで行かれました。イエスは女性たちに対して全く違う評価をしていた文化の中で、女性に内在している価値だけでなく、尊厳、荣誉、そして尊敬をお与えになりました。

マルコ 10:11~12

イエスの時代においては、妻に対する姦淫など聞いたこともなかった上に、男は妻を離縁することができても、女は夫を離縁することができなかったのも、イエスのこの宣言は非常に過激だったことでしょう。離婚に関する規則は申命記24:1~4に述べられています。スイドラーは「イスラエルにおいては、男が女を所有し、その逆はなかったのも、男が女を手放す ---- すなわち離縁する ---- ことはできても、女は男を離縁することができませんでした」(注15)と述べています。

ルカ 10:38~42

女性の行動範囲は、主に家庭であり、彼女は「不貞から守られるべきでした。その結果、女性は会話において啓蒙するようなものは殆ど持っておらず、公の生活における誘惑に立ち向かう備えが殆どできていない人間であるかのように扱われました。」(注16)しかし、イエスのマリヤとの関わり方は、当時一般に見られた態度と真っ向から対立しました。当時の伝統は女性が律法を学ぶことを許さず、仕えることが彼女たちに期待されていました。「誰かの足元に座る」という表現は学徒の姿勢です。マルタは明らかにマリヤを必要としていたのに、マリヤがマルタの給仕の手伝いをしないでイエスの足元に座ったとき、イエスは優先順位を逆転させました。

家事における女性の立場と教育における女性の立場のどちらかを選ぶとき・・・イエスは女性の主婦の立場を第一のものではないと結論づけました。イエスは申命記31:12の「民を、男も、女も、子どもも・・・主を恐れ、このみおしえのすべてのことばを守り行なうためである」という最初の教えに立ち返られました。(注17)

ルカ 11:27~28

この箇所目的は、イエスの母が幸いであるということを否定することではなく、幸いであることの理由を母であることから信仰者であることに変えることにありました。

イエスによれば、真の幸いとは生物学的機能の結果ではなく、むしろ霊的選択の結果です。スペンサーが指摘しているように、

すべての教師の中で最も優れている教師を育てるよりも、神のことばを聞き、それを行なう者の方がより幸いです・・・そして(イエス)の全ての働きにおいて、イエスは家族への忠誠よりも、イエスの御名に対する忠誠を絶えず強調されました。(注18)

ルカ 13:10~17

イエスは、会堂管理人が腰の曲がった女性よりも伝統や動物を重んじたその無情さに対して怒り、彼を責められました。そして、彼女も彼と同じようにアブラハムの子孫であることを指摘されました。(注19)自分が目に留められ、触れられ、そして癒されたという事実は、彼女に信じがたいほどの喜びをもたらしたに違いありません。イエスが彼女を「アブラハムの娘」と呼ばれたことの大きな意義に関して、メアリー・エバンズは次のように述

べています。「アブラハムの息子」は、契約の共同体の一員として男の価値を特に強調したいときに用いられた呼び名でした。(しかし)「アブラハムの娘」という呼び名はユダヤの文献の中では実質的に知られていません。イエスはこの女に与えられている価値を明らかにするためにこの呼び名を意図的に選ばれたように見えます。」(注20)

ヨハネ 4:7~42

イエスと一個人との会話で、記録に残されている最も長いものは女性 ---- サマリヤ人 ---- とのものです。イエスは社会の底辺の人々 ---- ツアラートに冒された人々、足の養えた人々、盲目の人々、そして女たち ---- を一貫して尊厳と敬意をもって扱われました。そして、この箇所の場合、自分の夫でない男といっしょに住み、かつサマリヤ人である女に話しかけることによって、イエスはすべての禁止事項を破られました。イエスはこの女性を「霊的な洞察のできる」(注21)者としてご覧になりました。「(この女)をご自分の最初の伝道師としてお選びになることによって、この世が受け入れる基準は、キリスト教の働きにおいては決定的な要素ではないことを明らかになさいました。」(注22)

ヨハネ 11:2~45

この箇所では、マリヤが家事を手伝わなかったことで苛立った姉として一般に知られているマルタが、イエスがどういう御方であるかを理解していたという証拠を提示しています。彼女の告白はペテロの告白と殆ど同一です。私たちの多くの者は、ペテロが「あなたは神の子キリストです」(マタイ16:16)と告白し、イエスがその信仰を肯定されたことを知っています。しかし、マルタが同じ信仰告白をしたとして記録されていることを知っている人は殆どいません。

ヨハネ 12:1~8

イエスは逾越の祭りの六日前にベタニヤを訪れました。そこで私たちは、再びマリヤをイエスの足元に見出します。今回は、彼女はイエスの足に香油を塗り、自分の髪の毛で拭いています。(注23)「マリヤは、弟子たちがイエスの地上の全働きを通して得ることのできなかった神学的洞察、すなわちイエスのメシヤ性の本質を理解しました。」(注24) スイドラーは「女たちは来客があるときは、男たちといっしょに食事をするのではなく、食事の場に入ることすらありませんでした」と述べています。(注25) マリヤが社会通念を無視し、ふさわしくないとと思われるような振るまいをしたにもかかわらず、イエスは再び彼女の行為を擁護しました。

まとめ

イエスの教えとイエスの女性との関わり方は、教会内の男性と女性の役割が、賜物に基づき、僕(しもべ)の心によって動機づけられた、養育と成長の役割として見るべきであることを明らかにしています。イエスは新しい時代を導入されました。イエスの女性の扱い方は私たちの模範となるべきです。

イエスは、女が男と同様に完全に神のかたちに造られた人間であると書かれた看板を持って通りの角に立つようなことはなさいませんでした。イエスをご自分の行為 ---- その行為自体がショッキングであり、重要であったので記録され、残されました ---- を通して伝統的な視点を率直に、そして静かにひっくり返されました。

イエスのすべての行為：マリヤとマルタとの関わり、月のもので汚れていた女に触れられたこと、井戸辺でマリヤの女と会話をされたこと、彼女が証しをした人々を受け入れられたこと、墓でマリヤに兄弟たちの所に行つて語るように命じられたこと（ヨハネ 20:17）、姦淫の現場で捕らえられた女を責めることを拒み、彼女を石打ちにしようとした男たちに罪を投げ返されたこと、その結果として彼らに自らの罪深さと赦しの必要性を気付かせられたこと、譬え話の中に女性を用いられたこと（マタイ 25:1~13；ルカ 15:8~10；ルカ 18:1~8）---- を総合すると、イエスが女性を高く評価なさり、女性の尊厳、人間性、そして霊性を肯定するために当時の社会通念を進んで無視されようとなさったことを意味します。

イエスは女性たちに、溢れる感謝をもってイエスご自身とイエスの恵みと憐れみのメッセージに応答する自由、その感謝をイエスと人々に仕えることによって表わす自由、そして、その奉仕に賜物を用いる自由をお与えになりました。

4. ヨエルの預言の成就

ヨエル 2:16~18

ヨエルの預言の一部だけが「教会時代」に成就したのであって、女が男と共に預言するのは「御国時代」、あるいは終りの日まで保留されるであろうと教える人たちもいますが、その立場に反対する人たちもいます。タッカーとライフエルトが述べているように、「神の霊の賜物とそれに伴う預言の業が、今や男の上にだけでなく、女の上にも完全に、そして平等に注がれたと、これ以上明確に言明する文を考え出すのは困難です。」（注26）

ペテロ自身が ---- ペンテコステの日に聖霊が男と女の両方の上に注がれた ---- 男女が共に主のことばを語る、すなわち「預言する」 ---- というヨエルの預言が成就したと明確に断言しています。

女性も預言ができることには同意するが、女性ができる預言と男性ができる預言の種類には違いがあると主張する人たちがいます。彼らはヨエルとペテロが意味した預言は、男性だけができる「説教」とは幾分異なると言います。なぜなら「説教」には女性には許されていない「権威をもって語る」ことが含まれているからです。このように議論することは、主からのことばを語るという、聖書における通常の預言の意味を排除することになります。預言者は神の代弁者です。（注27）

5. パウロの教え

イエスと関わりを持った女性たちとは対照的に、パウロの書簡に出て来る女性たちは主に都会人でした。ある者たちは明らかに裕福であり、多くの者たちは異邦人で、彼女たちの宗教的な礼拝や体験は異教のものでした。

会堂はキリスト教徒というよりユダヤ教徒の礼拝所であり、多くのキリスト教徒はそこで礼拝を捧げ続けましたが、彼らにとって礼拝の中心となる場所は家庭でした。それゆえ、今日、多く文化の中で私たちが経験するような教会と家との明確な分離はなかったことでしょう。その結果として、パウロが書簡の中で語りかけの対象を礼拝の共同体から家族・親戚に移行するのは極めて自然なことです。

著書「パウロは女について実際何を語ったのか」の中でプリストウが述べているのは、

パウロは意識的にある種のギリシャ語を使うのを避けて、注意深くことばを選びました。もし彼がそのギリシャ語のことばを使ったなら、私たちの英語訳が今日私たちに暗に伝えている、まさにそのことを彼の読者に伝えたことでしょうか・・・そこにキリスト教史の最も大きな皮肉のひとつが存在します。(翻訳された)パウロのことばは性の平等性を要求する明確なメッセージを伝える代わりに、女性蔑視を裏付ける権威の主な根拠になってしまいました。(注²⁸)

プリストウは、パウロが書いたものの伝統的な理解は、二重基準(ダブルスタンダード)につながったと言います。彼は次のように議論します。

私たちは、パウロが女について語ったことの伝統的な解釈の継承者となってしまいました。私たちはまた伝統的な性の二重基準(ダブルスタンダード)の継承者ともなりました・・・私たちは、我らが使徒パウロによって、女は男よりも誘惑に負けやすいと教えられてきました。何と言ってもエバの例を見るとよいのです。その二重基準(ダブルスタンダード)によれば、私たちは他方では、女は貞操を保つ責任があると教えられてきました。結局、男の子はいつまでたっても男の子であり、女の子は女性に成長して、男の子たちにいつ適切に振る舞うべきかを教えなければならないのです。さて、もし、女の方が誘惑に対して弱いのであれば、なぜ彼女たちが男たちに対して、もういい加減にしなさい、と言わなければならないのが不思議に思うかもしれません。またパウロによれば、私たちは、女は夫に従い、男のリーダーシップに服さなければいけないと教えられてきました。他方、二重基準(ダブルスタンダード)によれば、女はリーダーシップの究極の地位を占めていると教えられてきました。何しろ、「ゆりかごを揺らす手が世界を支配する」のですから。もし、女が男ほど指導者に適していないのなら、母たちはどのようにして息子たちに良い指導者になることを教えることができるのでしょうか。(注²⁹)

この伝統的な教えには様々な説明が加えられてきました。パウロは一貫性が無かった、パウロは混乱していた、パウロは当時の社会構造を崩さないように福音を妥協した、パウロは公の場では堅い線を出したが、私生活においては、パウロ自身の女性に対する嫌悪をあらわにした、というものです。(注³⁰)

これらの説明のどれも満足のいくものではありません。パウロは女性が奉仕することの価値を目撃した一世紀のユダヤ人パリサイ人であり(ローマ 16:1~2, 7; ピリピ 4:1~3)、それが福音を危険に晒す特殊な状況においてのみ(Ⅰ テモテ 2:8~15) 反対をしました。

パウロの書簡を見直すことは明らかに必須です。

学者たちは、パウロが書いたとされている書簡の日付について、あるいは著者の信ぴょう性についても一致していません。この本における研究の目的のためには、以下の書簡は、文句なしに、パウロのものであるとし、それらが以下の日付に書かれたとしてを受け入れ、その順番に従って見ていきます。

旅の間の書簡

ガラテヤ人への手紙 ---- AD 48にアンテオケで書かれる。
テサロニケ人への手紙 第一 ---- AD 50にコリントで書かれる。
テサロニケ人への手紙 第二 ---- AD 50にコリントで書かれる。
コリントへの手紙 第一 ---- AD 54~55にエベソで書かれる。
コリントへの手紙 第二 ---- AD 54~55にエベソで書かれる。
ローマへの手紙 --- AD 57初頭にコリントで書かれる。

獄中書簡

コロサイ人への手紙 ---- AD 60~61にローマで書かれる。
エベソ人への手紙 ---- AD 60~61にローマで書かれる。
ピレモンへの手紙 ---- AD 60~61にローマで書かれる。
ピリピ人への手紙 ---- AD 60~61にローマで書かれる。

牧会書簡

テトスへの手紙 ---- AD 62以降にエベソで書かれる。
テモテへの手紙 第一 ---- AD 62以降にマケドニアで書かれる。
テモテへの手紙 第二 ---- AD 64~65にローマで書かれる。

ガラテヤ 3:27~29

これは、人種、性別、階級の垣根はキリストに在ってすべて壊されたという、自身の主張を例証するためにパウロが用いた、初代教会で使われていたバプテスマ信条であったと考えられています。パウロは、大方の人が結論づけたのとは全く対照的に、男と女の一体性の具体的な広がりを見ていました。ガラテヤ 3:28における彼の主張は、キリストに対する信仰は「すべての人類を包括する・・・ユダヤ人と異邦人、奴隷と自由人、男と女・・・信者同志の互いの新しい関係を伴う神との新しい関係」（注³¹）をもたらしたということです。

パウロはここで霊的な真理についてのみ言及しているのであって、彼の声明には目に見える現実に影響を与える意図はなく、私たちは地上でこの声明の成就を期待してはならないと言う人たちもいます。しかし、この箇所
の文脈はその立場に反対します。ロバート・ヘステネスは次のように指摘しています。

ベテロがユダヤ教化した人たちと食事を共にすることを拒むのは、「相続人」を分裂させるという非常に実際の含みを持っていたので、パウロはベテロに面と向かって反対します。パウロはベテロが差別を続けることに対して怒っています。パウロはこの声明が実生活の中で、今、この場で実践されることを期待しています。彼の主な攻撃はユダヤ人と異邦人の分裂に向けられており、彼はこれらの障壁を崩すことに自分のエネルギーを使いました。彼は、違いはもはや範囲を限定もしなければ、制限もしないと明確に語りました。（注³²）

私たちのアイデンティティーの中心は性別、人種、または社会的階級によるのではなく、私たちがキリストに在るところにあります。キリストに対する信仰は、私たちが何者であるかを定義し、私たちが祝福と責任の両方を同じ比率で楽しむべきであるとしています。それ以前の区別はもはや重要ではありません。人種、社会、そして性別による障壁はもはや存在しません。

F. F. ブルースはこのように言っています。「もし、異邦人がユダヤ人と同じくらい、そして奴隷が一般市民と同じくらい自由に教会の中で霊的な指導力を行使してよいなら、女性が男性と同じくらい自由に行使して何か不都合があるでしょうか。」(注³³)

クジエスポとグレンツが説明しているように、

パウロは割礼についての議論の文脈の中で、キリスト者の平等について過激な主張をしています。旧約聖書の中で、特に男性の儀式であるこの割礼の儀は、イスラエルの民を神の契約の民として位置づけました。しかし、新約聖書の時代においては、洗礼が割礼に取って代わりました。そこでは ---- 男であっても女であっても ---- すべての信者が、かつては社会階級を制定するために使われていた区分を（滅ぼして）参与することができます。(注³⁴)

キリストに在って、隔たりの壁は崩されました。ガラテヤ人への手紙は私たちの霊的な生活についてのみ語っているのではなく、すべての仕切りは取り除かれたと高らかに宣言して、私たちがいかにクリスチャン生活を実践すべきかについて語っています。

コリント人への手紙第一 7:4

この箇所には、夫と妻が自分たちふたりに関わる決断を一緒にする例が挙げられています。この箇所は結婚生活における権威についての革新的な教えから始まります。妻のからだは夫に属するという教えには何も新しいことはありません。しかし、「同様に夫のからだは妻に属する」というのは、全く新しい教えを導入することになります。その後、もし性的関係を保留したいのなら、それは両者の合意に基づいてなされなければならないという適用が極めて明確になされます。

これは、行き詰まったとき、必然的にひとりの人が決断しなければならないという考え方を否定するものです。もしパウロが男女の最も親密な関係において同意が存在しないと教えたのであれば、決断はパートナーシップによるのであって、上下関係によるのではないという考え方を強調していることになります。

グレッチェン・ゲイブレイン・ハルは、結婚生活における決断に困難を感じるなら、「私たちの結婚はどれくらいクリスチャン的か」という問いがなされるべきであると述べています。彼女は「一つの肉になった」結合という考え方は、決断すべき一人の人というのは「二人が一つになった一人を意味する」と提案しています。

コリント人への手紙第一 11:2~16

この箇所はしばしば女性を制約するために用いられますが、実は、性の役割についてではなく、礼拝儀式についての箇所であることを覚えておくことは重要です。「パウロは秩序の問題を取り扱っていたのであって・・・世の終わりまで教会が守るべき基準を制定していたのではありません。」(注³⁶)

この箇所は男女が共に賜物を用いていることを前提にしています ----- ここで問題にされているのはどのようにしてそれをすべきか、ということです。この箇所の文脈は、霊の賜物は愛をもって、一致のために用いられるべきである、ということです。

しかし、この箇所で女性の役割を見ると、三つの論点が明確にされるべきです。

1. 「かしら」の意味とは何でしょうか。
2. 誰が、何に対して、あるいは誰に対して権威を持っているのでしょうか。
3. 「栄光」とは何を表わすでしょうか。

天使についての言及は興味深いのですが、それを解釈しようとする試みは単なる推測に終わります。

「頭」の意味とは何でしょうか。

「頭」を意味するギリシャ語 *ケファレー* は、この箇所に13回出て来ます。釈義の問題は「頭」が権威を示唆するのが、それとも源を指すのかに関わって来ます。

西洋の生理学では、脳が体を支配するという事実から、「頭」は「支配者」を意味すると提唱します。しかし、マーティンは、ギリシャ人の生理学の理解は違っていたと主張します。「彼らは心が知性の所在する場所で、頭は命と命の液だと信じていました・・・それでゼウスが(アテナに) 生を授けたとき、(彼女) は彼の頭から飛び出して来ました。父は彼の子どもの頭と呼ばれました。それは父が子どもの命の源であることを意味します。」(注³⁷)

ギルバート・ピレズィキアンは、*ケファレー* はいつも「創造する、養育する、そして代表するという次元で体に仕えるという意図で」(注³⁸) 使われていると主張しています。

エペソ 1:22~33では、キリストは教会のかしらとしてからだを満ち満ちたものとし、
・・・論点は共有する命です。キリストはからだを満ちます。彼は命の源、すなわち
からだを満ち満ちたもの、あるいは完成に導く御方です。それに対して、からだは
その満ち満ちたものの現われです。」(注³⁹)

ケファレー を命と養育の源として明確に定義している他の箇所は、エペソ人への手紙 5:21~33とコロサイ人への手紙 1:15~20です。「キリストの教会に対するかしら性は、彼の教会に対する愛、ケア、そして養育と並列しています・・・教会はその始まりをかしらであるキリストの内に見出します。それは長子であるキリストと共に始まりました。キリストがその存在の源であり、発端です。」(注⁴⁰)

「聖書的視点に立った男と女」の著者ジェームス・ハーレイに代表されるような伝統主義者たちは、頭（ケファレー）は当然権威を意味する（注41）という正反対の主張をします。しかし、聖書解釈学の原則は一つのことばに一つ以上の意味があるときは、正しい意味は外から持ち込まれるべきではなく、文脈の中で決められるべきである、ということです。この場合、文脈は明らかに源または起源という意味を指し示しています。「男は女をもとにして造られたのではなく、女が男をもとにして造られたのです。」パウロは9節（男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです）において、そしてまた12節（女が男をもとにして造られたように）において、創造について語っています。しかし、彼はその同じ節において、男と女の相互依存（同様に、男も女によって生れるのだからです）を指摘することによって、全体のバランスを取ります。それから彼は、すべてのものは神に由来する（すべては神から発しています）ということによって彼の議論を完成させます。

ケファレーを「源」として理解するのに有利なもう一つの議論は、ヘブル語の「頭」ということばが支配または権威を意味したとき、七十人訳の翻訳者たちは、ケファレーではなく、ギリシャ語のアルコンを用いたということです。それはギリシャ語のケファレーは「権威」に用いられた通常のことばではなかったことを示します。

それゆえ、パウロの比喩の理解（コリントの人たちが理解した唯一のものだと思われませんが）は、「源」としての、特に「命の源」としての「頭」です（注42）。

誰が何に対して権威を持っているのか？

ジェームス・ハーレイは、女は権威に欠けるという持論を支持するためにコリント人への手紙第一11:7を用います。彼は「（この）権威を伴う関係において・・・男は神の似姿であるが、女はそうではない、というのは極めて適切です」と言っています。（注43）

多くの伝統主義者たちはハーレイの論に同意し、この箇所は女性に対する男性の権威を肯定すると主張します。しかし、権威ということばは一度用いられているだけで、この一度の言及は「女は頭に権威のしるしをかぶるべきです」（注44）というものです。10節におけるエクスーシアということばは権威を持つ（訳者注：日本語では「かぶる」と訳されている）という意味で、権威の下にあるということの意味しません。この文の構造上、女がかぶりものをつけていれば話す権利があると読むこともできますし、また女はかぶりものをつけるかどうかを決める権利があると読むこともできます。」（注45）

多くの翻訳で「～のしるし」ということばが付け加えられたのは、その箇所が実際は述べていること、すなわち女が自分の頭の上に権威を持つべきである、ということとはありえないと決めてがかっていた翻訳者たちが理解しやすいようにしたものと思われます。

いくつかの翻訳を見てみましょう。NIV 女は頭に権威のしるしを持つべきです。

RSV 女は頭にかぶりものをつけるべきです。

KJV 女は頭に力を持つべきです。

下線を引いたことばはすべてエクスーシアという同じことばの翻訳です。それは、権威、権限、自由、能力、力、そして強さを意味します。原典のギリシャ語では、パウロは、女は自分の頭に関して力または権威があると書きました。「語られている唯一の権威は、女の権威です。」（注46）それが厳密に何を意味するかについては議論の余地がありますが、男が女の上に権威を持つということの意味することはありえません。

（エペソ人への手紙 1:10, 1:22~23, 4:15~16, 5:21~33の注釈参照。）

どのような点で女は男の栄光なのか？

アン・アトウキンズは「裂かれた神のかたち」という本の中でこの主題を扱って、パウロは9節と10節において創世記の2章に言及していると指摘しています。この箇所では、

人ということばは全人類を意味します。彼の名前そのものが「人類」を意味します。
この意味において彼は神の栄光です。（人類）は地上における神の代理であり、被造物の冠です。（注47）

人間は神がどのようなお方であるかという真理を、神に対して反映しているという点で「神の栄光」であると彼女は説明しています。同様に女が造られたとき、男の真のかたち、男がどのような者であるかという栄光を男に対して反映する鏡でした。

私の骨の骨、肉の肉である、もう一人の人間にのみそれができるのです。女は男と同質のものでできており、神のかたちに造られ、関係を築くことができる存在としてのアイデンティティを彼に反映することによって、彼に栄誉と名声をもたらしたのです。女を男より低い存在とするのは、「栄光」の意味を歪めることです。

コリント人への手紙第一 12:1~31

聖霊が与える賜物について語っているすべての箇所は、賜物は教会を建て上げるためであり、性差に基づいていないということを明らかにしています。グレンツは、女の男に対する權威の地位を否定しようとする人たちは、「賜物」と「役割」という便宜上の区別をしていると説明しています。彼らは女性に賜物が与えられているということは喜んで認めますが、彼女たちの役割は性別によって制限されていると主張します。この性の差別の基盤は、創造時に神が確立されたと彼らが主張するところの女の従属性という原則への訴えです。

それに対してグレンツは次のように議論しています。

たとえ神が創造にこの原則を組み込まれておられたとしても（神はそうなさらなかったのですが）、それによって、教会が男性のリーダーシップと女性の服従を実行し続けることは必ずしも要求されていません。キリストは教会を最初の創造の単純な反映としてではなく、神の新しい創造に沿って生き、それゆえに三位一体の神のご性質を反映する終末的な新しい共同体として設立されました。（注48）

コリント人への手紙第一 14:26~40

この箇所は、実際は預言をする時の規則、あるいは規制について取り扱っているのですが、しばしば文脈を無視して引用されるので、教会内の実践において矛盾が生じます。

もし、「教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません」ということばを字義通りに取るなら、女たちは賛美することも、報告をすることも、会衆の祈りや交誦に加わることも、祈りの課題を出すことも、教会学校で教えることもできないはずです。他の箇所については字義的な解釈を主張する人たちでさえ、多くの人はこの箇所をそれほど字義的には取りません。むしろ、パウロのことばは、礼拝、教育、礼拝の司会、あるいはことばを発する必要のない聖餐式においてさえ、女性がいろいろな形で関わるのを阻止するために用いられてきました。

この箇所における問題は性差に基づく役割の問題以上のものです。それは「聖書の完全性に関わる釈義の問題です。」(注49) 主要な問題は、ここで見られる制約が、コリント人への手紙第一 11章でパウロが女性に与えている、公の場で祈ったり預言したりする特権と矛盾しないかどうかということです。三つの選択肢があり、私たちはその中から自分が何を信じるかを選ばなければなりません。

1. 使徒の働き 2:17~18とコリント人への手紙第一 11:2~16が、女性が教会で預言するのを許可したというのは間違った理解です。
2. コリント人への手紙第一 14:34~35が、女性が教会の中で声を出したり、耳に聞こえる形で参加することを一切禁止したというのは間違った理解です。
3. パウロは自己矛盾に陥っています。

コリント人への手紙第一11章は女性の預言の「方法」について語っているので、コリント人への手紙第一14章のこの箇所が女性の預言を禁じているはずはありません。なぜなら、パウロが同じ書簡の中で後に禁止するつもりである行為について多くの頁を割くのは奇妙なことです。

もしパウロがある状況では話すことを許可し、別の状況では禁止するのであれば、話の内容、もしくは状況にその違いを産み出す何かがあったに違いありません。その違いが何であるかということをコリントの教会は理解していましたが、今日の私たちにとっては明らかではありません。

この一見矛盾しているものを解明する第一歩は、この箇所の文脈を見ることです。

文脈は何でしょうか？

パウロは公の礼拝の無秩序について語っています。異言を語っている者たち、預言をしている者たち、おしゃべりをしている女たち、この三つのグループが無秩序を産み出していました。パウロはこれら三つのグループを黙らせましたが、自発的な沈黙を求めました。礼拝に何らかの秩序を与えるためにパウロは三つの命令を与えました。

1. 二人だけ、多くても三人、が異言を語ることが出来ます。しかし、もし、異言を解き明かす人が誰もいない場合は語る人は黙る（シガオ）べきです（27~28節）；
2. 二人、もしくは三人、が預言をし、順番に預言すべきです。もし、二番目の人に啓示が与えられたら、最初の人話しを止める（シガオ）べきです（30節）
3. 女は礼拝において黙って（シガオ）いるべきで、家で質問すべきです（34節）。

順番が主要なテーマであることは、この箇所を囲んでいる31~33節と39~40節によって明らかにされています。

(31~33節) あなたがたは、みながかわるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができるのです。(預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。) それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです。

聖徒たちのすべての教会で行われているように、教会では妻たちは黙って（シガオ）いなさい。彼らは語ることを許されていません。律法も言うように、服従しなさい。もし何かを学びたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語る（ラレオ）ことは、妻にとってはふさわしくないことです。

神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいはまた、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。自分を預言者、あるいは、御霊の人と思う者は、私が、あなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。もしそれを認めないなら、その人は認められません。

(39~40節) それゆえ、預言することを熱心に求めなさい。異言を話す（ラレオ）ことも禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行いなさい。

テーマは礼拝においてすべての人が参加することと秩序を守ることです。

沈黙の意味とは何でしょうか？

プリストゥが注意深く解説しているように、パウロがこの箇所で行ったことばは意義深いものです。

フィモオということばは強制された沈黙を指します。例えば、イエスが荒れる海を静めたとき、汚れた霊を静かにさせたとき、そしてパリサイ人たちを黙らせたとき・・・もう一つのことば、ヘスキア、は女が静かでよく従う心をもって（テモテへの手紙第一 2:11~12）静けさのうちに学ぶべきであるというときに用いられる沈黙を指します・・・しかし、この箇所では、パウロはシガオ —— 自発的な沈黙を用います。それは、弟子たちがイエスの山上の変貌について沈黙を守ることを決めたときに用いられたことば（ルカの福音書 9:36）、そして、イエスが、もし弟子たちが黙る（シガオ）なら、石が叫び出すであろうと言われたときのことばです。それ裁判の最中のイエスの沈黙に対して用いられたことば（マルコの福音書 14:61）であり、使徒たちや長老たちがパウロとバルナバによる報告を聞いたときの彼らの沈黙に対して用いられたことばです（使徒の働き 15:12）。それは意図的に選んだ応答のかたちです。または、他の人が話すことができるように静かにしてください、と

頼むときのお願いにもなりえます（使徒の働き 12:17）。それは、無秩序と騒動の最中に要求されるたぐいの静けさです。（注50）

パウロが言及している律法とは何でしょうか？

女性の服従を要求している旧約聖書の箇所はありませんので、パウロはここで女性の公の参加を禁じた伝統としての律法を用いているのかもしれませんが。(注⁵¹)

なぜ女は話すことができなかったのでしょうか？

ブリストウによるとギリシャ語には「話す」と訳すことのできることは30個あります ----- あるものは宣言する、言う、語る、教えるを意味します。しかし、もしあなたが「お祈りの間は話さないでください」と言いたいのなら、その動詞は *ラレオ* (注⁵²) でなければならず、それがまさにパウロが用いたことばです。パウロの教えは礼拝の中の秩序と関係しているので、パウロが彼らに会話をしないように ----- 礼拝中に話し続けないように ----- と言っているのは明らかです。

女は誰に対して服従すべきなのでしょう？

コリント人への手紙第一 14:34~35を扱うに当たって、アトゥキンズは、女は誰に服従すべきなのかを問うことによって、興味深い観察をしています。服従は当然男に対してであると想定されていますが、アトゥキンズは、本文はそう言っていないことを明らかにしています。むしろ神が混乱の神ではなく、平和の神であるので、教会の秩序に対して服従するように言っていると思われます。(注⁵³)

パウロは実際は何を語っているのでしょうか？

パウロが「あなたがた女の人たちはいつも黙っているべきなので、質問をすることを止めるべきである」と言っているはずはありません。なぜなら、それは同じ教会の中での祈りや預言に対する前述の規定と矛盾するからです。しかし、彼が次のように言っている可能性はあります。「あなたがた女の人たちはうるさくなり過ぎているので、静かにしているべきです。」これは誰であっても礼拝を混乱させてはいけないという一般原則が破られているときに、特殊な状況に対して語られているのです。その特殊な状況というのは、コリントの教会の女性たちが質問することによって礼拝を妨げていたということです。

そして、パウロはそのようなことが起っていなかった他の教会の例を出すことができました。コリントの教会の女性たちは賑やかな宗教表現で知られるカルトの背景を持っていて、この背景が最近の改宗者たちに影響を与えなかったとは考え難いことです。(注⁵⁴)

おそらく、ここコリントの教会では、女性たちが教育を受けていなかったもので、彼女たちの質問は初歩的なレベルであり、礼拝を中断する必要はなく、教師たちに従い、家で学びの過程を始めるべきでした。彼女たちの学びが進むにつれて、彼女たちの質問は歓迎されるものになったでしょう。

書簡の全体は礼拝の秩序に関わるものであり、その文脈の中で、まだ礼拝を混乱させるようなかたちでしか質問することができなかった女性たちに対して、パウロが「話すことを止めなさい」と言ったと取る方がより適切だと思われます。

しかし、パウロはすべての女性たちをいつも黙らせているわけではありません。テモテへの手紙第一 2:15にお

けるパウロの命令は「女は教えを受けなさい」です。質問をすることは学習の基本的な方法です。ここでパウロは、不適切な質問に見られる妻たちの聖書教育の欠けに対して、夫たちは積極的な役割を果たすべきであると助言しています。(注55)

この箇所における教えは、礼拝における自制と適切な行為に関してです。それは、キリスト者の共同体が、もともと改宗者たちが属していた異教のカルトのように見えて、結果的に福音の伝達の妨げになることを避けるためです。

パウロは女性の沈黙ではなく、礼拝における秩序の原則を打ち出しているのです。

p. 36

コリント人への手紙第一 15:22

パウロのこの声明は、テモテへの手紙第一 2:14の教えと上手にバランスを取っています。多くの人がこのテキストをエバが「だまされた」ので罪がこの世に入ってきた、とエバを責めるのに用いています。別の箇所 ----- ローマ人への手紙 5:12 ----- では、ひとりの人を通して罪が入って来たと述べていますが、ギリシャ語で「男」を意味する *アネール*ではなく、「人」を意味する *アンスロポス*を用いています。

ローマ人への手紙 16:1~16

この箇所は、パウロがガラテヤ人への手紙 3:28に記した理論を自ら実践していたことを明確に示しています。

ここでパウロは、様々な分野で主のために労した人たちの名前を挙げています。28人中10人は女性です。ここでパウロが用いている「同労者」という意味の *シュネルゴス*ということばは、テモテ（テサロニケ人への手紙第一 3:2）とテトス（コリント人への手紙第二 8:23）に対して用いていることと同じです。パウロが用いている同労者ということばは「同業者、同僚」を意味します。(注56) これは、パウロが女性たちと共に労したということ、そして、福音が女性たちに賜物を用いて男性たちと共に労する自由を与えていたという事実に対する十分な証拠です。これらの女性たちの一人は、教会の女性執事フィーベでした。スイドゥラーによると、初代教会の教父たちは女性が執事になることができると信じていました。

アレキサンドリアのクレメントは・・・明らかに女性執事に言及しています（そして）オリゲンはパウロのローマ人への手紙とそこでのフィーベについての記事に触れて、「このテキストは女性でさえ教会の中で任職された執事であると使徒の權威をもって教えている」と述べています。(注57)

フィーベはまた多くのプロスタティスの一人でした。ナイトは、このことばの男性形は「前に立つ人、上位の人・・・指導者、支配者を意味するが、ここでフィーベに対して用いられている女性形は「保護者、後援者、援助者」を意味すると主張しています。(注58) しかし、スイドゥラーは、その言葉は新約聖書の他のどの箇所にもなく、他のギリシャ文学の中ではいつも支配者、指導者または保護者を意味することに注目しています。(注59) 彼は、また、パウロがテサロニケ人への手紙第一 5:12においてそのことばの動詞形を用いるとき、それは「～を

支配する」と訳され、テモテへの手紙第一 3:4~5 ; 5:17では監督、祭司、そして執事を指しているということも指摘しています。(注⁶⁰) 今日では「指導者的長老」ということばを好む教会もあります。

p. 37

エペソ人への手紙 1:10

この「頭」(アナケファラオー)の用法は「支配者」ではなく「源」として用いられているもう一つの例です。パウロはキリストがすべてのものの究極的な到達点であると語っています。キリストは初めであり、終わりであり、アルファであり、オメガです。キリストにおけるすべてのものの集約は、キリストのかしら性の再確保、あるいは最終的な再起として描かれています。キリストのかしら性において、キリストはご自身が源であるところのすべてのものを再びご自身の内に納めるでしょう。(注⁶¹)

(コリント人への手紙第一 11:2~16参照。)

エペソ人への手紙 1:22~23

ギリシャ語のことばは「~の上方にある頭」を意味するケファレー・ヒュペルであって「~に対する頭」を意味するケファレー・エピではありません。これは、元のことばが実際は全く違うことを言っているにもかかわらず、そのことばに対して翻訳者が持っている先入観をテキストに持ち込む格好の例です。もし、頭が権威を意味すると思っているならケファレー・ヒュペル(~の上方にある頭)はいともたやすく「~を支配する」と翻訳されます。しかし、翻訳者が先入観を持たないで聖書に臨み、最も適切な意味を発見しようと努力するなら、「~の上方にある頭」という概念には他の可能性が出てきます。

ビレズイキアンは次のように主張しています。

エペソ人への手紙 1:22の前後の文脈は、「天上」のはるかに離れた輝きの中で、敵対する者を「はるかに越えた」キリストの優れた優越性を取り扱っています。その結果、「すべてのもの」はキリストの下に、あるいはキリストの足の下にあります。この高く掲げられた地位において、キリストは何物に対しても権威の関係を築く必要はありません。キリストはすべてのものの上に存在します。神の定めとして、この栄化された状態でキリストは唯一の関係を保ち続けます。キリストは「教会のかしら」であり、教会に対して計画されている「完成」の成就に導きます。

(より詳しい議論はコリント人への手紙第一 11:2~16参照。)

エペソ人への手紙 4:15~16

一つのことばが二つ以上の意味の可能性を持つとき、その定義をするためには文脈を見ることは、どんなときでも大切です。そして、この場合、文脈がケファレーの意味を明確に定義しています。かしらの働きは「からだのつながりと結びに必要とされているものを提供することです。キリストはからだの成長の源です。この個所によると、かしらの機能はいのち、一貫性、そして成長を提供することです」(注⁶³)

（ケファレーの使用法と意味に関する発展した議論は、コリント人への手紙第一 11:2~16を参照。）

エペソ人への手紙 5:21~33

この箇所の文脈は、妻の服従と夫の支配ではなく、相互の服従です。ギリシャ語では、21節で使われている服従ということばの動詞形は22節では繰り返されてはいません。字義的な翻訳は次のようになります。「キリストに対する畏れをもって互いに従いなさい。妻たちは主に対するように夫たちに対して。」妻の服従は ---- 互いの ---- 相互の服従から切り離すことはできません。

パウロは、夫が妻に示すべき愛は、キリストが教会のためにご自身をお与えになったように、自分のいのちを差し出すまでの、夫の側の服従を含むところの愛であると述べて、相互の服従の概念を続けます。

「従う」ということばは、妻に関しては用いられてはいなく、むしろ、子どもや奴隷に対する上下関係に用いられています。夫に対する命令のどれ一つ取っても支配について語っていません。命令はすべて、妻を気遣い、妻を建て上げることを課しています。

この箇所の中心的な議論は「かしら、服従」そして「愛」ということばの意味です。

かしらの意味は何ですか？

ビレズイキアンはパウロがこの箇所で、キリストご自身がキリストのからだの救い主でいらっしゃるという説明を付け加えて、「かしら」ということばの意味を説明していると指摘しています。彼は次のように述べています。

ここで用いられている「ご自身」という強調語は、パウロがキリストの救い主としての在り方が、キリストのかしら性に関係しているという事実をはっきりさせていることを示しています。救い主のしもべとしての働きは、25節「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた」と29節「だれも自分の身を憎んだものはいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたと同じ」の二箇所でさらに展開されています。養育の源としてのキリストのモチーフはこの箇所で再度現われます。（注64）

（コリント人への手紙第一 11:2~16参照。）

服従の意味は何ですか？

アトウキンズは服従を次のように定義しています。服従は決して、沈黙、または経済的あるいは情緒的な依存、家庭的であること、または操縦ではないと言います。それは、むしろ「自分自身の益のためのすべての策略を捨て、自分の人生のすべてを他の人の手に明け渡すことです。」（注65）

ビレズイキアンは、服従の一般的な意味は「自分自身を上の權威に従わせることであり、地位的にあるいは立場的に上の人の願いに沿って方向性が定められることに頼り、（または）支配に委ねることです」（注66）が、こ

の箇所では意味は全く違うものに変えられていると論じています。「互いに服従する」ということは「他の人に服従する」ということとは全く違う関係です。(注67) ビレズイキアンは続けて言います。

互いに服従するということは、同等の立場の人たちの間のみで可能です。それは、互いという代名詞を含まない服従の概念の中で暗黙のうちに語られている一方的（一方通行）な服従を排除する相互（二方向）の関係です。相互の服従は、下の者に対する支配者の上からの優越性ではなく、（むしろ）同等な立場の人たちの間の水平線的な人間関係を示唆します。(注68)

もしパウロが伝えたかった概念が通常の従順であったなら、彼が使うことのできたことばがいくつかあります。彼は奴隷に関してはギリシャ語の *ヒュパクオー*（エペソ人への手紙 6:5）を用い、子どもに関しては *ペイサルケオー*（エペソ人への手紙 6:1）を用いています。(注69) プリストウは、パウロがこれらのことばのどちらも使わなかったことは、子どもや奴隷と同じように妻を男の權威の下に置くギリシャの哲学者たちとは違って、パウロにはそのようにする意図が全く無かったことを示すと指摘しています。

パウロは *ヒュポタッソー* というもう一つのことばも使うことができました。そのことばは能動態では、「支配する」という意味になります。パウロはそれを

神がなさることについて語る時にのみ用いています。パウロは夫が妻を *ヒュポタッソー* するようには命じていません。その代わり、*ヒュポタッソマイ* という中性形を用いることによって、パウロは妻たちが自発的に夫たちに従うようにと訴えています。その性質上、自発的に行なうものを求めているので、*ヒュポタッソマイ* は「忠誠を尽くす」「必要に答える」「支える」または「応答する」という意味になります。同様に、パウロは教会員たちに互いに *ヒュポタッソマイ* するように訴えました。これは支配者と被支配者というランク付けをするのではなく、教会に対してその構成メンバーが「キリストのからだ」としての召しを具体的に生きようという端的な訴えです。教会にとって真実なことは、結婚においても真実であるとパウロは付け加えました。(注70)

愛の意味は何ですか？

プリストウが検証する第三の重要なことばは *アガパオー* です。パウロはこのことばを夫が妻を「愛する」という教えの中で用いています。このことばは *ヒュポタッソマイ* とほぼ同義語です。どちらも自己追及を止めて、他の人に仕え、それに応答することを含みます。そして、どちらも夫と妻だけでなく、すべてのクリスチャンに勧められています。プリストウは、ユダヤ文学において、好んで使われた文体は、同義語を平行して用いることであると詳しく説明しています。妻たちは夫たちに *ヒュポタッソマイ* すべきであり、夫たちは妻たちを *アガパオー* すべきです。(注71) プリストウは、さらに、これはクリスチャンの結婚に新しい型を作り出したと指摘しています。夫は妻を支配すべきではなく、むしろ「妻を養い、清め、彼女のために喜んで死ぬべきです。」(注72)

「夫が妻の感情や必要を殆どかえりみることなく、妻も夫の関心事に対して殆ど知らない文化において、パウロの夫と妻に対する助言は、聴衆にショックを与えたに違いありません。」(注73)

これは「家庭内の規則」が詳細に書かれている箇所の一つです。パウロが妻たちに夫たちに従うようにと言っていることは明らかです。しかし、彼女たちに対して、子どもたちや奴隷たちのように従うようにと命令していないことも明らかです。鍵は服従の意味を理解し、聖書全体の光の中で見ることです。聖書の中では、相互の服

従が要求されています。クレイグ・キーナーが著書「パウロ、女たちと妻たち」の中で指摘しているように、パウロは、家庭の中で大抵の場合男が主導権を取っている文化に向かって書いているのであり、「もし、パウロが奴隷制度を支持することなしに、奴隷たちに服従するようと言うことができるなら、男性優位を支持することなしに、妻たちに夫たちに従うように命じることもありうるという余地を残さなければなりません。」(注⁷⁴)

テモテへの手紙第一 2:8~15

これは女性の劣等性を信じる人たちが、男性に対して「権威を振るう」ように見える地位を占めるような女性たちを黙らせるために用いてきました。コリント人への手紙第一¹⁴章における女性に対する特別な教えが、そこだけ取り出されるのではなく、文脈の中で見られる必要があるのと同様に、この箇所の文脈も注意深く見なければなりません。この書簡の目的は、教会の中で異端の教えに関わっている人たちに対する実際的な助言をテモテに与えることでした。テモテは間違った教え、神話、そして果てしのない系図を教える人たちを黙らせて、教会を異端から守らなければなりません(3節)。

上下関係を保つことを主張する人たちは、パウロが女性はどこにあっても、教えることも、男性に対して権威を行使することも完全に禁止していると主張します。しかし、用語を注意深く研究し、ギリシャ語で、文脈の中で読むなら、ある人たちが考えるほどそれは明瞭ではありません。

初めに何が明瞭にされているかを見ることにしましょう。

女性が何をすべきかは明らかです：学ぶこと

この箇所の中心ポイントは、女性は教えを受けるべきであるということです。ここにおける唯一の命令は、「女に教えを受けさせなさい」ということであり、創造への言及はエバが惑わされたということです。惑わされることは、「無知から生れる避けがたい結果であり・・・解決法は明白です。女に教えを受けさせなさい。そうすれば彼女たちはそれほどたやすく惑わされないでしょう。」(注⁷⁵)

ナイトはエバが惑わされたことへのパウロの言及は、立場の逆転に関係していると言っています。しかし、実際は、惑わされたことへの言及は、この箇所全体の文脈に関係しています。命令(ナイトが言っているような「提案」ではない)は、女は学ぶべきであるということです。「女に教えを受けさせなさい」は、この文章において命令形です。学びの不足は惑わしにつながるので、女性は学ぶ必要があるというのが趣旨です。教えられてこなかった人は惑わされ、簡単に惑わされる人は確かに教えるべきではありません。

「女性たちに教育を提供するのは・・・ノン・クリスチャンから倫理的に非難を受ける危険性がありますが・・・(なぜなら教師)は初めは男性でなければならなかったからです。なぜなら男性だけが宗教教育を受けていて、

ユダヤ教の習慣は女性が夫以外の男性と会話することを禁じていたからです」(注76)という事実にもかかわらず、パウロは女は教えを受けるべきである、と命令しました。プリストウは次のように主張します。

女性たちが宗教教育を受けるようにというパウロの願いは、思想においても急進的なものであり、実践に移すのは困難でした・・・女性たちは講義を受けることも、神学的思想を考えることにも、あるいは勉強することにも全く馴れていませんでした。それゆえパウロは彼女たちに「静かに、よく従うところをもって」(テモテへの手紙第一 2:11) 学ぶように命じました。他の人たちの必要に喜んで応答するという意味のヒュボタツソマイです。礼拝においてそうであるように(コリント人への手紙第一 14章)、女性たちは学びにおいても他の人たちに配慮すべきです。しかし、静かにということばはヘスキアです。それは単に話をしないように、という意味ではありません。それは瞑想や学びにおけるように安息のある静けさを意味します。数行前でパウロはこの同じことばを、すべての信者に望んでいる平安で静かな生活を描写するのに用いました。(注77)

そこで、誤った教えに対抗する文脈の中で、パウロの教会に対する命令は女性が学ぶことであり、「静かに」という表現は学ぶときの態度のことです。教えに対する禁止命令は、明らかに女性がまず学ぶ必要があったからです。(注78)

女性が何をすべきではないか、ということも明らかです：支配すること

このテモテの箇所におけるもう一つの問題は、「支配する」と訳されている アウセンティンということばの用法です。アウセンティンの意味について統一見解はありません。しかし、一つのことは確かです。それは、もし、パウロが、女性がこのことばの一般的な意味における権威を持つことを抑制するつもりであったら、彼が一般的なことば エクスーシアが使ったであろうと推理するのは妥当です。パウロが全く違う ----- 新約聖書で他には使われていない ----- ことばを用いることによって、ここでは全く別のことについて語っていることを示しています。歴史家ヨセフスは、ヘロデの息子で、自分の二人の兄弟を殺害し、父親も殺そうとしたことを告発されたアンティパスを描写するのに アウセンティンを用いています・・・このように アウセンティンは「独裁的に支配する」または「人々を滅ぼすような形で彼らの上に絶対的な権力を持つ」ことを示します。(注79)

プリストウは、アウセンテオは、パウロがすべてのクリスチャンに奨励している愛と尊敬のスピリットの逆である、と言っています。(注80)

パウロが、女性が男性を独裁的に支配するのを許さないというのは、男性が女性を独裁的に支配する許可を与えるものでは決してないことに注意するのは重要です。相手を打ち負かし、破壊するようなリーダーシップは、男性に対しても、女性に対しても、キリストが承認するものでは決してありません。

明らかでないのは、禁止に対するパウロの理由です

パウロが、女性が教えることを許可しないのは、文化的なものではなく、創造の秩序に基づいているので、今日の私たちにも制約を与えるものである、という伝統主義者たちもいます。ナイトは次のように言っています。

禁止されているのは教えること（ディダスケイン）と支配すること（アウセンティン）です。禁止の範囲は女性が誰にも教えるはいけないというのではなく、教会の中で男性（アンドロス）に対して教えることも、支配することもいけないのです。（注81）

彼は、「そのような厳しい禁止の理由は、すぐ次の13節と14節にあります。『なぜならアダムが最初に創造され、それからエバが創造されたのだから』」（注82）と続けて言います。

ナイトは創造に関していくつかの仮定をします。そして、それらが事実として取られ、彼の信念の土台となります。一つは「神が男と女を創造した順序は、神が意図しておられた関係と権威の秩序を表し、また決定づけているということです。先に造られた者が支配すべきであり、彼より後から、そして彼から造られた者が従うべきです。」（注83）それは文脈の中から、というより、文脈に持ち込まれた解釈です。男性が支配し、女性が支配されるというナイトの先入観が明らかに彼の聖書解釈に影響を与えています。彼の枠組みは、創造の物語ではなく、彼が基準とするところの「人間の墮落」です。創世記の創造の記述の中には、創造の順序が支配と被支配に関係していると示唆するものは何もありません（III 章Aを参照）。どのような形の服従や「支配」でも、罪の結果としてもたらされたものであって、神が意図された創造の秩序に読み込むことはできません。

パウロはこの個所で上下関係に関心を払っているというよりも、グノーシスの教えに対抗しているという可能性があります。アダムとエバの二人に分けられ、二人の別々の人間になるまでは、最初の人間は男女両性だった、と教えたグノーシス主義者たちがいました。また、エバがアダムを生んだと教えた者たちもいました。（注84）（アウセンティンのもう一つの意味の可能性は、一の「創設者」または「創始者」です）。パウロはアダムが最初に造られて、次にエバが造られたと宣言することによって、この教えを訂正します。

もう一つのグノーシスの教えは、エバは真理を知らされていたが、アダムは無知だったというものです。しかし、パウロはエバは完全にだまされたが、アダムはだまされなかったということによって、その教えに反論しています。パウロがこれらの事実に基づいて男性のリーダーシップを支持している、とこの個所の意味を取る人がいたら、それは馬鹿げています。キャサリン・クローガーが断言しているように、「そのような議論は意図的に罪を犯す人の方が、だまされて罪を犯す人よりも良いと言っているようなものです。このような議論は愚漢が愚か者を支配するような教会をもたらします。」（注85）

エバは「知識（グノーシス）の木の実を通して真理を知らされた」（注86）ので、エバは責められるべきではないというグノーシス主義者たちもいます。他の個所（コリント人への手紙第一 15:21）では、パウロは罪がこの世に入ってきたことの責任はアダムにあるとしています。この個所ではパウロはエバは「罪を犯した」（すなわち、神の律法を破った）ので、彼女が真理をもたらしたはずがない、と宣言しています。（注87）

それから、パウロは理解が難しい声明をします。「しかし、彼女は子を産むことによって救われます。」これに関していくつかの解釈が可能です。しかし、どれも完全に明白ではありません。

ありえない解釈は、女性が子どもを産むことによって救われるということです。その考え方は聖書の他のどの個所とも対立します。聖書は12節で言っていることをそのまま意味する（私は、女が教えたり、男を支配したりすることを許しません）と言う人たちも、15節（女は子を産むことによって救われます）に至ってはそのままを意味しえないということに同意するでしょう。

一つの可能な意味は、子を産むということが、幼子キリストという特別な誕生に言及しているというものです。それゆえ、プリストウが示唆しているように、パウロは次のように言っているのかもしれませんが。

エバの例のゆえに、女が霊的に劣っていると思っているあなたがたは、神が私たちのすべてのために救いの方法を備えてくださったとき、神はマリヤという女性の協力を通して、それをなさいました。肉体を悪と見なすグノーシス主義者たちよ、私の理解する福音によると、贖い主は女からお生れになり、肉と血から生まれた肉と血であり、この方法を通して救いの良き知らせは、信仰と愛と聖さを持つすべての人に提供されるのです。(注⁸⁸)

もう一つの可能性は、これは結婚して、母親になった女性たちを尊重しなかった異端の教えの訂正である、というものです。結婚を軽視し、独身を高く見るカルトの教えもあります。パウロは、妻たちや母親たちが呪いの下にではなく、祝福の下にあることを知って欲しかったのです。霊的であることは独身であることを要求していません。

「私は女を止めません」という本の中で、キャサリン&リチャード・クローガーが書いている第三の可能な解釈は、女は救われるためには男にならなければならなかったというグノーシスの教えに関連しています。パウロはそれに対して、女性は男性が救われるのと同じ方法で（子どもを産む）女性として、信仰、愛、聖さに留まることによって救われると反論しています。

四番目に提唱されている解釈は、女性は出産において守られるというものです。さらに、もう一つの解釈は、出産は神が女性に課された召しの成就の例えである、というものです。

私たちは、文脈を理解していたコリントの人々は混乱しなかったと確信できますが、この節が様々な憶測を呼ぶことは明らかです。

要約

沈黙させられなければいけない誤った教えが存在していたという文脈の中で、パウロは女性たちに健全な教えに服するようにと諭しています。

書簡全体の文脈から見ると、この箇所への目的は女性たちを教会の働き場から排除することではありません。この箇所を他のすべての箇所を支配する中心思想だとする人々は、すでに決まっていた立場を正当化しようとしているに過ぎません。この種の解釈の方法は聖書全体に対して公平ではありません。

パウロは、このテモテへの書簡を、グノーシス的思考によってキリスト教の真理を歪めていた、異教からの改心者の影響を扱う手助けをする目的で書きました。女性に関するすべての箇所は、グノーシスの教えを論破するか、あるいは、異教の文化の中でのクリスチャン生活のための適切な行動を扱ったものの分類に当てはまります。この箇所の教えは、上下関係についての声明ではなく、一連の異端的なグノーシスの教えに対する反論として理解されると意味が通ります。

グノーシスの教え：エバは惑わされておらず、真理をもたらした者でした。

パウロは反論します：「否、惑わされたのはエバです。彼女は真理の源ではあり得ません。」

グノーシスの教え：エバはアダムを産みました ---- 彼女が創始者でした。

パウロは反論します：「否、私は女性が、自分たちが男たちの創始者だったと教えることは許しません。アダムが先に造られて、次にエバが造られました。」

グノーシスの教え：女性たちは救われるためには、男にならなければなりませんでした。

パウロは反論します：「否、女性は男性が救われるのと同じ方法で（子どもを産む）女性として、信仰、愛、聖さに留まることによって救われます。」

エバが惑わされたことへのパウロの言及には、女性に対してだけでなく、教会全体に対する警告という意図がありました。エバが惑わされたので、女性たちは永遠に惑わされ、それゆえ女性は教えることができると信頼されない、と主張するのはパウロの神学の他の部分と一致しません。アダムの不従順の罪は、男性たちは永遠に不従順で、神の任命を全うできない、ということの意味しません。パウロはキリストの血は私たちをすべての不義から清めると主張します。それでは、エバが惑わされたことも、キリストの血によって贖われないなどということがあるでしょうか。

テモテへの第一の手紙 3:1~13

パウロからテモテに宛てられたこの書簡は、この箇所が、監督が一人の妻の夫であることを要求しているので、女性を霊的指導者の立場から排斥するのにしばしば用いられています。その意図するところは、女性の排斥ではなく、霊的指導者にとって一夫一妻の重要性を強調するところにあるようです。男性が教育的、そして文化的な役割を担っているので、通常は、霊的指導者は明らかに男性だったからです。男性だけが一人以上の妻を持つ可能性があったので、この点に関しては男性に対して書かれています。女性は一人以上の夫を持つことが許されていませんでした。それに加えて、パウロは「誰でも」ということばを用いることによって（もし、「誰でも」監督職を望むなら）女性を排斥することを特別に避けています。そして、英語の訳ではしばしば「男」ということばを用いますが、それはギリシャ語の本文にはありません。また、フィーベがそうであったように（ローマ人への手紙 16:1~3）「彼らの妻たち」（太字）は、女性執事を指す「女たち」と訳されてもよいのです。これは、女性が男性と「同じように」呼びかけられていたことを意味します。

p. 44

テモテへの第一の手紙 5:1~2

ここでもパウロは続けてテモテに実地的な指示 ---- 今回はテモテといろいろな人たちとの関係について ---- を与えています。パウロは指導的な長老を指すことば（テモテへの手紙第一 5:17）を年上の男性（プレフビテロス）だけにではなく、年上の女性（プレフビテラ）に対しても使っています。

テトスへの手紙 1:5~16

この個所で、黙っているべきだとされている人々の中には、男性もきっと含まれていたに違いありません。なぜなら、教えの大半は男性によってなされていたからです。このことは、沈黙がいつも適用されるのではなく、ある状況において、ある人々に要求されていたという考えに信ぴょう性を与えます。パウロは真理が正しく教えらるることに注意を払っていたので、彼が教えた真理の歪曲が起りそうになるどのような状況に対しても、厳しく、そして明確に語る必要があったのです。

テトスへの手紙 2:1~10

この個所のねらいは、キリスト者の行動についての教えは、健全な教理の教えに従ってなされるべきである、ということです。信仰と行動は一致しなければなりません。未信者はキリスト者の行動を注視しています。もし、キリスト者の行動が教えと一致すれば、神のことばは敬われ、そうでなければ、神のことばはそしられます。これがどのように実践されるべきかは、奴隷たちにとってそうであったように、女性たちにとって、文化的な問題でした。パウロが奴隷たちに対して、キリストの品性を表わすように生きることが求めたとき、奴隷制が神によって定められた制度だと示唆したわけではありませんでした。また、パウロが女性たちに対して、彼女たちの文化の期待の中で、キリストの品性を表わして生きようと教えたとき、彼女たちが家に居て、若い女性たちを教えるだけに留まるようにという原則を打ち出したわけではありませんでした。彼女たちはその時代の文化的標準の中で、キリストにある命と矛盾のない生活をすべきでした。

6. 教会が実践する新しい模範（モデル）

パウロの挑戦的なことばだけでなく、男女が一緒に礼拝するようにという実践は、同世代のユダヤ人や異邦人に多くの疑問の声を湧き上がらせたことでしょう。

使徒たちは、初期の段階で「私たちの仲間の女性たち」（ルカの福音書 24:22）について語り始めました。使徒たちが祈りに専念していたとき、彼らは「女性たちと一緒に」（使徒の働き 1:14）祈っていました。ペンテコステの日の後、「群衆は男も女も」信者たちの交わりに迎え入れられ（使徒の働き 5:14）、男も女も洗礼を受けました（使徒の働き 8:12）。（注89）

教会の中における女性の地位の重要性は、サウロが男と女の両方の信者を捕らえたという事実（使徒の働き 8:3,

使徒の働き 9:1~2, 使徒の働き 22:4~5）によってさらに示されています。

パウロが教会を迫害したとき、男女間の接触に対する社会的制限を無視し、女性に対する保護的な態度を捨てていましたが、その同じ情熱が、彼が教会の使徒となったときも同じようにパウロの特徴になりました。（注90）

女性が教会の中で十分に働いていたことを裏付ける最も強力な議論は、ペンテコステの日のペテロのヨエル書 2:28~32の引用です。プリストウが指摘しているように、

もし、教会が使徒たちの下に、これをキリストにある新しい時代のしるしとして捕ら

えながらも、女性たちが靈感されたメッセージを教会に対して語る権利を拒むなら、非常に奇妙なことになるでしょう。(注⁹¹)

ペテロの説教が記録されているだけでなく、ペテロの書簡は、男女間の新しい関係を実践に移すようにと初期のクリスチャンたちがある程度教えられていたことを示しています。

ペテロの第一の手紙 3:1~8

この箇所の文脈は、互いに対する服従、互いに対する奉仕、そして互いに対する愛というキリスト者の人間関係の在り方です。そして、狭い文脈は救われていない人たちをキリストに勝ち取ることです。

サラがアブラハムに従った箇所への言及は、アブラハムの高齢と臆病さにも関わらず、神に信頼し、「恐れなかった」という彼女の力と意志を私たちに思い出させます。(彼は自分の命を守るために、彼女を自分の妹だと偽って彼女を危険にさらしました。) この箇所でペテロは、夫たちがまだキリスト者になっていない妻たちに向かって、もし彼女たちがサラの模範に従って、「恐れゆえに従うのではなく・・・(むしろ) 神に信頼するなら」(注⁹²) 彼女たちはサラの娘たちになるであろう、と言っています。結果的に、夫たちは彼女たちの美しさと敬虔さによって救われるかもしれません。

この箇所に先立つ数節は、主人に服従すべき奴隷たちのことを扱っています。奴隷たちから妻たちに語が変わるとき、「同じように」と訳されている重要なことばが用いられています。キリストによって模範が示され、また奴隷たちにも要求されているしもべの態度は妻たちにとっても模範です。(注⁹³)

ペテロは、それから男性のキリスト者に向けて、もし、彼らが妻たちに対して彼女たちが当然受けるべき敬意を払わないなら、祈りは妨げられるであろうと呼びかけています。

そして、驚くべきことは、妻たちから夫たちへの語の移行も「同じように」という全く同じことばでされていることです。キリストによって模範が示され、奴隷たちと妻たちに要求されているところのしもべの態度は夫たちにとっても模範です。ピレズキアンが議論しているように、

使徒パウロは夫たちを劇的な立場の逆転に服させます。族長制度の下では、夫に思いやりを持って生活し、彼らに「敬意を払い」・・・彼らを人生の祝福の最高の相続人と見なすことが妻の義務でした。それが今では、しもべが主人に対するように妻に思いやりを示し、敬意を払わなければならないのは夫でした。女性たちは・・・新しい創造の中で・・・夫と共に「共同相続人」になります。夫と妻の両者が、彼らの新しい命の源である恵みの平等な受取人となりました。そして、もし、夫が肉体的、自己主張的はやり方に逆戻りして、これらのどこかの分野を怠るなら、彼らは祈ることを止めた方が良いでしょう。しもべに対してではなく、妻に対して、主人のように振る舞うなら、彼らは霊的障害物を作り出し、自分自身を、そして、自らの祈りを神に受け入れられないものにします。(注⁹⁴)

マーチンは、初代クリスチャンたちが「幼児殺し、一夫多妻制、そして離婚に反対し、結婚している男女両方に性的節操の原則を適用し始めた」(注⁹⁵)と書いています。これはクリスチャンの原則が女性の状況に良い影響

を与えていたことを表わしています。このように、初代教会は女性にとっては、今まで経験したことのないような自由のメッセージである福音を、その豊かさにおいて実践に移し始めました。

話し合いと熟考のための質問項目 ― 第3章 ― 新約聖書

1. 権威ある立場にいる人が、他の人に「威張り散らす」状況を見たことがあるなら、それについて話してください。
2. 聖書に出てくるできごとを当事者たちの視点を通して見るのは難しいことですが、イエスの時代の文化の中に自分を置いてみてください。そして、その文化の中で、最もショッキングだと思われる、イエスと一人の女性の出会いを描写してください。なぜそれはショッキングだったのですか。そこに関わっている女性の反応はどのようなものだったと思いますか。そばで見ていた女性たちの反応はどのようなものだったと思いますか。今日の文化の中で、似たような状況を考えることができますか。
3. これらの箇所におけるイエスの行動やおことばの結果として、あなたはクリスチャンの働きに対する決定的な要因は何だと思いますか。
4. 「贖罪の秩序は、今ここにおける生活のすべてに影響を与えますか、あるいは霊的実体のみでしょうか」という問いにどのように答えますか。
5. コリント人への手紙第一 14章における三つのグループに対するパウロの訓戒は、信者の共同体に益をもたらすでしょうか。
6. もし、教会員たちが「私は」互いに「自分自身を服従させる」(ヒュボタツソマイ)と言うなら、教会はどのようになるでしょうか。
7. 結婚の秩序の中での性の関係は夫婦の同意の下で為されるべきである、というパウロの明快な指示は、彼がそれを書いたとき、過激な宣言だったでしょうか。今日もそうでしょうか。
8. もし「一つの肉」としての一体が共同の決断をすることを求めるとすれば、それはキリストの「一つの」からだとして存在する会衆内の決断にも適用されるでしょうか。
9. 贖罪の枠組みが一貫して用いられるとき、ガラテヤ人への手紙 3:28, エペソ人への手紙 5:21~33またはテモテへの手紙第一 1:1~13のような箇所を実践に移す際に、それはどのように影響を与えるでしょうか。
10. パウロの文書の中で、ケファレ(カシラ)の用い方に関するいろいろな箇所の教えを要約しなさい。
11. テモテへの手紙第一 2:15は難しい箇所です。今までその箇所が何と言っていると教えられてきましたか。他にどのような解釈の選択肢がありますか。その内のどれが聖書の他の箇所と最も一貫性があると思われますか。

12. 福音のメッセージはイエスの時代の女性たちにどのような意味があったか、想像できますか。パウロの時代の女性たちには？今日ではどうでしょうか。

13. パウロによる「テトスへの手紙」の中で、聖書で教えられている教理と一貫している生活を実践することに関して、あなた個人にとって何か課題がありますか。何か変えなければいけないことがありますか。もし、そうであるなら、それはキリストにある兄弟姉妹のクリスチャン共同体にどのようなインパクトを与えるでしょうか。あなたを觀察しているノン・クリスチャンたちにはどうでしょうか。

14. コリント人への手紙第一 14:26~35から、合同の礼拝についてどのような原則を引き出しますか。

IV. 文化的影響の解明

この章における課題は、
私たちの神学を形成する
影響を認めることです。

A. 個人的な信念の存在を認めること

聖書を完全に客観的に読むなどということはありえません。なぜなら、私たちはすでに持っている信念をそこに持ち込むからです。個人的な思惑や深いところに潜んでいる信念というのは常に存在するものです。しかし、私たちの信念の形成に影響を与えてきたものの存在に気づかされるとき、私たちはより客観的になることができます。時代を通じて教えられてきたことを手短に見直すことによって、女性に関する聖書個所の解釈に影響を与えてきたものに光を当てることができるでしょう。私たち自身の偏見を理解することも重要ですが、私たちの解釈や、その結果としての私たちの信念体系に影響を与えてきた人々の偏見を理解することが重要です

偏見の全く無い人は一人もいません。
プライドから逃れられる人は一人もいません。
自己欺瞞から逃れられる人は一人もいません。

B. 信念の形成

聖書の本文は、それが書かれた時以来変わっていませんが、私たちの解釈は確かに変わってきています。私たちがどのように聖書を解釈するかにおいて、個人の思考法は大きな要因ですが、教えられてきた伝統的な説教が、私たちの聖書解釈に大きな影響を与えていることも事実です。ユダヤ教とキリスト教会の中における女性の位置づけを手短に見直すことによって、女性の位置づけに対する私たちの理解がどのように影響を受けてきたかが明らかになるでしょう。

1. ユダヤ教における女性に対する見方

旧約聖書のユダヤ教の世界において、女性はかなり重要な指導的立場を持っていましたが、大多数の人の女性に対する態度は否定的なものでした。スィドラーは著書「聖書が肯定する女性」の中で、女性についてのラビの教えを詳しく書いています（詳細はIII章B参照）。

スィドラーの記述によると、女性は公の場で祈りに参加することは許されず、会議の定足数には入れられず、子どもや奴隷と同類視され、神殿で入ることができたのは異邦人の庭と婦人の庭に限られ、通りでは男性の挨拶を受けることができず、法廷では証言することができず、出産時における死は、アダム之死をもたらしただけの罰だというラビの教えに耐えなければならませんでした。(注1)

2. 初代教会における女性に対する見方

女性の位置づけは、イエスの到来とイエスの十字架処刑後に神殿の幕が裂けたことにより劇的に変化しました。

裂けた幕は、神の御霊はもはや一個所に臨在するのではなく、人々の中に住まわれることを意味します。神の民は移動式天幕、すなわち神の聖所になりました。御霊が至聖所から出て来られたとき、至聖所と聖所の間の隔てが大きく後退しました。それから、神は、特別に選ばれた祭司を排除して、聖所から祭司の庭に出て来られます。それから、神がイスラエルの庭に出て行かれることによって、祭司と一般の人の間の境は完全に取り去られました。神が婦人の庭に出て行かれたとき、男と女の壁は取り払われました。そして最後に、異邦人の庭に到達されたとき、最後の門はついに倒れます。聖霊が神殿の一番奥の聖所から周辺の庭へと外に向かって移動されたことは、イエスが地上において、異なる種類の人々と関われた時に持っておられた優先順位を象徴しています。(注2)

教会はその揺籃期に、女性が神からの召しに応答して主の働きに参加するように与えられた自由に関して、大きな前進を遂げました。(詳細な学びはIII章の新約聖書を参照。)

3. 二、三世紀の教会における女性に対する見方

歴史は一般的に次のように定義されます。

人間社会において記憶に留めるに値する出来事の組織的な記述と批判的な解釈・・・
・そこで、歴史の記述は・・・客観的な行為ではありませんでした。むしろ、歴史の記述が光を当てる出来事というのは、歴史家の個人的、社会的、そして政治的な見解から、取り上げるのに興味く、記憶されるに”ふさわしい”と考え、選択したものの結果です。(注3)

ですから、初期の教父たち(特に、テルトゥリアヌス、アウグスティヌス、アンブルシウス、エピファニウス、アフィナス)に女性の位置づけの理解に関する方向付けを仰ぐとき、彼らの歴史記述は、彼ら自身の思考の枠組みに影響されていることを認識しなければなりません。

初期の教父たちは、女は霊的に劣っていると本気で信じていたので、女に権威を与えるということはほとんどしませんでした。(注4) 彼らは、女が神のかたちに造られたということを真剣に疑っていました。この信念はある人々の思いの中にその後も存在していましたが、反対者たちはそのような区別をしませんでしたので、女も男と同じように殉教死を遂げました。紀元203年、21歳だったベルベチュアは、北アフリカのカルタゴで殉教しました。彼女は投獄されているときに日記をつけていました。その日記は、女性によって書かれた最初のラテン語の

文だとされています。彼女の人生と著作は、後の説教者たちに感動を与えましたが、彼らは死に直面したときの彼女の忠実さを彼女の「男らしい」特質のゆえだとしています。(注5)

テルトゥリアヌス(紀元160-225)は、女は欺き、誘惑する者であり、エバの娘たちは悔い改めの衣をまとうべきであると教え、また人類の苦しみは女の責任だと責めました。彼は言いました。

あなたは(それぞれ)エバだということを知らないのですか。女に対する神の裁きは今日も有効なので、罪責感も当然あって然るべきです・・・あなた方は悪魔への門です。あなたはあの(禁断の)木に手を付けた者です。あなたは神の律法を最初に放棄した者です。(注6)

エピファニウス(紀元315-403)は「女はだまされやすく、弱く、理解力があまり無い」と言いました。・・・アンブルシウス(紀元339-397)は、女が信仰を持つ時は、女の性質は消え、男の性の徳を帯びると教えました。・・・アウグスティヌス(紀元354-430)はペルベチュアについて説教をし、彼女の魂の男らしさは、彼女の肉体の性を覆い隠すと述べました。彼はまた、「女は肉なるものを、男は霊なるものを象徴する」とも言いました。(注7)

アウグスティヌスは結婚している女性には少し有利な立場を与えました。

女は夫と共にあるときに、神のかたちです。ゆえに、夫婦合わせてひとつのかたちです。彼女に女にだけ属する助け手という立場が与えられるとき、彼女は神のかたちではありません。しかし、男に関して言うなら、彼は女と夫婦であるときと同様に、ひとりでも完全に神のかたちです。(注8)

紀元584年、フランスのリヨンにおいて、63人の司教と代表者たちが、「女は人間か」という問いに対して投票し、32対31の一票差で、女は人間であると宣言されました。(注9)

女に対して否定的な声が多い中で、女の側に立ったのはアレクサンドリアのクレメンスでした。彼はテルトゥリアヌスと同時代の人で、紀元203年に迫害で追放されるまで、アレクサンドリアのクリスチャン・スクールの校長でした。彼は男も女も同じように「哲学的考察をすることができる」と主張しました。(注10)

ブリストゥは、初代教会の教父たち、特に、アウグスティヌスの書いたものが、後代の人たちの考え方に影響を与えたと主張しています。なぜなら、彼らが教育を受けたギリシャの哲学的思考法に影響を受け、男性の指導者たちは「性的な偏見を持っており、その結果、当然ながら、パウロの書いたものを同様な発想で解釈するようになりました。」ついに、

「教会の中で支持を得たのは、パウロが説いた模範(モデル)ではなく、パウロより5世紀後の異邦人の哲学者[アリストテレス]がキリスト教の聖所や寺院でパウロのことばを引用して説いた模範(モデル)でした。パウロのことばは文脈を無視して翻訳され、その結果、パウロが教会のために熱心に求めたもの、すなわち、キリスト者の間の性の平等性というパウロが掲げた理想には何の言及もありませんでした。(注11)

パウロが提唱し、次第に初代教会で実践され始めた模範（モデル）は、周囲の文化の哲学によって組織的に破壊されました。その後、パウロが抱いた教会の中の性の平等という理想は致命的な一撃を受けました。

コンスタンチヌスはキリスト教信仰に好意的でした。キリスト教は流行りのものとなりました。・・・皇帝の好意を得ようとする者は教会に所属し始めました。・・・多くの者はキリストの教えには（殆ど）関心がありませんでした。教会がますます世的になっていくにつれ、教会の生活はヘレニズムの影響を受けたローマ社会の特徴を帯びようになっていきました。・・・ギリシャ哲学の教えは次第にキリスト教の神学と交じり合い、彼らの理解ではしばしば異教的な一連の信条を生み出しました。
（注12）

女性に関するこの異教的な見方は、ローマの文化を通してキリスト教に影響を与えました。遂には「教会の大黒柱である教会の正典が女の立場を男の権威の下に置くことを制度化しました。」（注13）

4. 中世における女性に対する見方

性の平等というパウロの理想の敗北は、トマス・アキナス（紀元1225～1274）の文書において最高潮に達しました。彼はアリストテレスが提唱していた、女は「欠けがあり、間違っで生れた」（注14）という考えに同意していました。この頃までに女性の軽視は、アキナスによる使徒パウロのことばの解釈に基づいて、完全にキリスト教の神学に取り込まれてしまいました。（注15）

聖ボナベントゥーラ（1217-1274）は、アリストテレスの害に満ちた意見（注16）に同意して女性を非難しました。また、ドンス・スコトゥス（1226-1308）「女性を聖職に任命することには益もあるが、キリストはそうにお考えにならなかったので、それらの益は論外だと結論づけました。」（注17）

マルチンは、中世において、女性に対する二つの相反する考え方があったと指摘しています。

女は誘惑者エバの娘として軽蔑されると同時に、処女マリヤの伝統の中で崇拝されていました。・・・大多数が修道僧でしたが、著作家たちの残した書き物によると、彼らは女性の性の真の模範としてエバまたはマリヤ礼賛しました。礼賛することは女性の真の性質を理解することだと主張しています。（注18）

5. 現代における女性に対する見方

マルチン・ルター（1483-1546）は「女は家に置まり、静かに座り、家事をし、子どもを産み、育てるべきです・・・もし女が弱り、ついに出産時に死ぬようなことがあるなら、それはがまいません。そのまま死なせなさい。彼女はその務めのためにいるのですから。」と宣言しました。（注19）彼は、女は神の素晴らしい作品であるが、（女は）「男に比べて名誉と尊厳の両者において劣って造られた」と主張しています。（注20）しかし、彼は男性がいない場合に、女性に公の働きの可能性を開きました。「そのような場合、女性が説教をするのも必要がもしれません。」（注21）

チャールズ・ホッジ（1797-1878）は女性を「知識、藝そして聖化」において、男性と平等であると見ましたが、「神の權威」においてはそうではありませんでした。女性は支配する者としてではなく、男性に服従する者として神の栄光を現わすように造られています。（注22）

ジョン・カルバン（1509-1564）が、それは「第二等」ではあるが、女も、事実、神のかたちに造られたと宣言したとき、平等に向けて大きな一歩が踏み出されました。（注23）

宗教改革は、修道院に対する否定的な見方とともに、女性に対して伝統的な妻と母の立場しか与えませんでした。・・・そして、信徒の奉仕は厳しく制限されました。（注24）このことは、「男性には意味深いフルタイムの働きという機会が提供されましたが」（注25）、独身女性は「結婚という、彼女の人生に靈的な意味を与えうる唯一の関係を欠いている」ということを意味しました。（注26）

女性たちは、1800年代の初期から中期にかけて、信仰復興と奴隷制度廃止運動における指導者でした。彼女たちは、女性による説教を含めて、教会と社会における女性のより大きな機会と権利を主張し始めました。チャールス・フィニー（1792-1874）は「女性を沈黙させる教会はその力の半分を奪われている」（注27）として、女性が公の集会で祈ることとあかしをすることを許し、大騒ぎを引き起こしました。

6. 現代における女性の位置づけ

マーティンが述べているように、「（女が）神のかたちに造られていることが否定されるのは、人間に対する神のご計画から除去されることを意味します。」（注28）今日、女は神のかたちを帯びていないという異端は排除されていますが、彼女たちの教会内における立場には大きな変化はありません。マーティンは次のようにも述べています。

女性は、ようやく、男性と靈的平等という神学的立場を与えました。（しかし）
実際の平等を与えられるべきではありません。・・・神の目にはあなたがたは
平等ですが、人の目には不平等でなければなりません。（注29）

多くの教会において、女性の立場に大きな変化がないばかりでなく、しばしば、女性が男性より下の立場に置かれるように、意識的な努力さえ見られます。ビレスキアンは、ある人々は男性が女性に対して權威を持たなければならないという先入観を支持するために、神のご性質に関して異端的な見方さえすると主張しています。下記の情報は彼の「三位一体の神の位格における上下関係：再登場する異端」というテーマの講義の中から抽出されたものです。（注30）

初代教会の教父の著作物には、三位一体の神の位格における永遠の上下関係を主張する異端の教えに対して正統的な三位一体の神学を確立しようとする努力が見られます。

この異端は、AD325年に世界司教会議で明確に排斥されました。彼らはキリストの完全な神性・・・三位一体の神の一体性を肯定するニケア信条を展開しました。父、子、聖霊は同じ本質を持っています。これが三位一体の中の位格の関係についての問題を解決し、イエスの神性と人間性に関する論争に歴史的な前進を与えまし

た。この信条は、イエスがご自身を低くし（だれもイエスを下位に言いたのではない）、ご自身の謙卑は一時的なものであり、永遠のものではない（それはイエスの働きに関連してのことであり、人格に関連しているわけではない）ということを確立しました。会議は神の位格の中に上下関係があることを否定し、そのような従属関係は異教の潜入であるとして拒絶しました。

しかし、アレクサンドリアのアリウスは、司教たちに公然と反論し、父なる神だけが永遠であると教えました。子なる神は被造物なので、子なる神が存在しなかった時期があったと教えました。父なる神と子なる神は本質において違うので、子なる神は父なる神と同等であるという教えを否定しました。

この従属性は、初代教会で扱われたにもかかわらず、ときおり表面化してきます。そして、これは物見の搭（エホバの証人）が築かれている土台になっています。この教えが、今日、女性の位置づけと関連して再登場してきたのは重大なことです。なぜなら、それは被造物の世界における従属性だけでなく、神のご性質そのものにおける上下関係の土台となるからです。

父なる神と子なる神の間に、永遠にわたる権威と従順の関係があるという考えは、男性と女性の間にもそのような永遠にわたる権威と従順の関係があるという考えに至ります。なぜなら、人は神のかたちに創造されたからです。上下関係は神の中に基盤を持つことになります。人間同士の間に神に似たものを達成するためには、結婚関係や教会の中だけでなく、ほかの人類の営みの中にも、すなわち、すべての生活の中に、権威と従属が行使されなければならなくなります。

この考えによると、女性は地上における生活のすべての分野においてだけでなく、来るべき世においても男性に従わなければならないということになります。なぜなら、人は永遠に神のかたちだからです。

この非聖書的な立場とは対称的に、マーティンは「男性の権威は真のキリスト教の教理ではありません。それは社会の影響によって始まりました」（注³¹）と強く主張しています。彼女は、女性に対する見下すような態度は女性の服従を擁護する伝統的な議論の核心にあると主張します。

男性優位に固執する人達に対する応答として、W. ワード・ギアスクーは「女性の位置づけについて伝統的な立場を取る人たちが当然だと思っているほど聖書の証言は明確ではありません」（注³²）と書いています。彼はさらに、世の中にはいろいろな役割や機能がありますが、「聖書を用いて女性を・・・男性より低い・・・とするのは、神のことばの最も歪んだ用い方です」と言っています。（注³³）

C. 偏見に対する異議

この章の最初の部分で表明された「偏見の無い人は一人もいません」という宣言は、私たちには真理を見ることは期待できないということを衰わしているかもしれません。幸い、私たちは偏見の正当性を疑うことができます。

私たちの大半は、聖書の中の女性たちの物語を聞きながら成長してきました。話し手や翻訳者の偏見が、これらの話がどのように私達に伝わってきたかに影響を与えてきました。そして、それがまた私たちの女性の位置づけに対する理解に影響を与えてきました。このようにして偏見が真理として不朽になるのです。たとえば、

- エバは人間の墮落の原因として責められています。しかし、聖書は明らかに罪は一人の人から入ったと言っています。
- バテシバはダビデの罪のために責められています。しかし、神はナタンを通してダビデに責任があると言っています。
- エバは「助け手」すなわち召使いとして見られています。しかし旧約聖書の中ではエゼルは大抵神を指します。
- フィービーはギリシャ語では「執事」であるのに召使いと呼ばれています。

偏見の正当性を疑う方法は、質問を投げ掛け始め、物語を別の視点から読む努力をし、私たちの思い込みは真理に基づいているというよりも、だれかの偏見に基づいているかもしれないという可能性を残すことです。

今日、扱われるべき課題には次のことです。伝統の役割と何ですか。過去において、文化に対してどのような譲歩がなされてきたのでしょうか。今日、私たちは文化に対してどのような譲歩をしているのでしょうか。文化が教会に情報を与えるのでしょうか、それともその逆でしょうか。

歴史を通じて、その時の状況が、キリスト者がどのようなライフ・スタイルを通して自分の霊性を現わすかという考え方に影響を与えてきました。初代教会においては、キリスト者は信仰の故に殉教死したとき、殉教死は霊性の最高の模範であると見られました。コンスタンチヌスがキリスト教を合法にして、キリスト者がもはや殉教死を遂げなくなったとき、女性にとって、修道院が神に献身していることを現わすための選択肢になり始めました。教会が祭司に結婚を許すことにしたとき、牧師夫人になることが多くの女性が求める理想となりました。宣教活動が始まると、女性たちが自分の愛と情熱を現わすための別の扉が開かれました。そして、それが理想の霊的な模範となりました。

新約聖書の真理は、一部の人々に対しては社会を形成するように動機づけをしてきましたが、いつも文化が教会を形成してきたように見えます。いろいろな影響が、霊性の模範を肉体の殉教死から霊的な死と独身主義へと変え、そして家族生活へと変えてきたことを思うとき、女性に関していくつかの疑問が生れます。「今日における最も望ましい霊性のかたちとは何でしょうか。特定の働きのかたちを選ぶための聖書的根拠は何でしょうか。女性が働きを選ぶとき、どこまでがその時代の文化に影響されていて、どの程度が個人の召命の受け止め方でしょうか。」

これはさらに他の疑問を生じさせます。女性たちは大宣教命令を全うするように召されているのでしょうか。彼女たちは「行って・・・弟子を作り・・・教えて・・・洗礼を授け・・・」るように召されているのでしょうか。それとも彼女たちは男性の指導の下で働きをするために、いっしょに宣教地に行ってくれる夫を見つけなければならないのでしょうか。あるいは彼女たちは、出て行ってこれらのことをするように命令されているけれども、父権階級が存在する組織のしっかりした教会の中で奉仕してはいけないと言われているのでしょうか。それとも女性たちは「サマリヤ」には派遣されても、「エルサレム」ではこの大宣教命令を実践してはいけないのでしょうか。

これらの問いに対する答えは、どの程度文化によって決定され、どの程度聖書によって決定されているのでしょうか。

話し合いと熟考のための質問項目 ― 第4章

1. 主の働きは性別によって決められるべきでしょうか、それとも霊性によって決められるべきでしょうか。女性のからだを持っていることは、あなたを霊的に違う者にしますか。
2. 「神のかたちに造られた」という箇所において、焦点は性別にあるのでしょうか。それとも、人間性にあるのでしょうか。
3. もし、アブラハムの不従順の罪がキリストの血によって完全に贖われることができるとするなら、欺かれたというエバの罪も贖われることができるのではないのでしょうか。そうでなければ、女性たちは、霊的な自由に入ることもできず、「神の子ども」とされた祝福と責任のどちらも十分に味わうことなく、永遠に墮落の淵に沈むことになるのでしょうか。あなたはこの一貫性のなさにとどのように対処するつもりですか。
4. もし妻が夫に従わなければ、それは罪になり、夫が妻に従わなければ、それは罪にならないのでしょうか。
5. なぜ女性たちは宣教師では、しばしば何をしてでも許されるのでしょうか。たとえば、教会を建て、だれでも教え導くことができます。しかし、母教会では女性と子どもにしか教えることができません。
6. 聖書のある箇所は今日のための命令だと考えられていますが、別の箇所は当時の文化的なものであると見られています。一貫性のないかたちで適用されている箇所さえあります。あなたは下記の主張に対してどのように応答しますか。
 - i. 第一テモテ 3章は女性が執事になることを禁じていると言う人々でも、独身男性や結婚している男性で子どものいない人が執事になることができると言います。ところが、女性を排斥する解釈法を適応するなら、そのような男性たちも排斥すべきです。
 - ii. 第一コリント 14章は女性が教会の中で話をするのを禁じていると言う人でも、第一コリント 11章は女性が頭にかぶりものをしているという条件で預言をすることを許します。もし、話すことが許されていないなら、どのようにして預言をすることができるのでしょうか。
 - iii. 女性は権威を持つことができないという人でも、女性には預言の賜物が与えられているということに同意します。預言は最も望まれている、権威のある賜物ですから、女性が預言の賜物を権威を持って用いる力を持っていないということがありえるのでしょうか。
 - iv. 第一テモテ 2:12は字義通りのことを意味すると言う人も、15節に進むと、「この節は字義通りのことを意味するはずがない」と言うのです。
7. 権威は主の働きに関する聖書観とどのように調和するのでしょうか。

8. 初代教会はどのような根拠で責任を与えたのでしょうか。
9. イエスは力に関して何を語られましたか。キリストのからだである教会内での働きについてはどうですか。また、階級組織についてはどうですか。
10. 神は女性も男性と同じように特定の働きにお召しになるのでしょうか。
11. 女性たちのための機会はしばしばキリスト教教育、牧師の補助、バラチャーチにおけるリーダーシップ、伝道、教育と執筆を含みます。しかし、主任牧師、説教、聖餐式の配餐、そしてしばしばアッシャーは除外されます。どのような根拠に拠って様々な働きに区別をするのでしょうか。
12. バウロは女性たちの服装や振舞いがつますきを与えないようにと氣遣っていました。私たちが女性たちの受けて来た教育や賜物をフル活用することを許さなかったとしてら、私たちはどれほど世につますきを与えているのでしょうか。
13. 教会の女性の見方によって、教会の信ぴょう性はどのように影響を受けるのでしょうか。

IV章 応答の実行

この章における課題は、聖書的な真実を持って応答することです。

クリスチャン女性たちは、非常に明確な召しを経験しているにもかかわらず、キリスト教会の中では、女性の賜物や教育、そして主の働きの中で行使されるリーダーシップの技術に対して、信用も評価も与えられないことの意味を探ろうとして、動揺、チャレンジ、フラストレーションの入り混じった感情を経験しています。これは女性たちに対してだけでなく、この世に対する教会のあかしに大きな影響を与えます。教会は女性たちに自由を与えるというよりも、制限を加えていると見られています。この考え方は私たちが宣べ伝えていると公言している福音と正反対です。

教会がこの世からどのように見られているかは別としても、神がどのように教会をご覧になるかを考えなければなりません。私たちは、キリストがそれを築き上げるために地上に来られた、顧われた男性と女性が助け合い、育て合う共同体の模範をどのように見習っているのでしょうか。クリスチャンの共同体は、罪深い構造を不朽なものにするような共同体を模範にするのではなく、「御国」の現実 —— 私たちがいつか経験するその終末の共同体 —— の模範を示すべきです。

クリスチャンであることのチャレンジはこの世にキリストを示すことです。それはキリストの価値観、キリストの態度、キリストの真理を意味します。

歴史を研究するなら、私たちが自分たちの思いつきでしばしば脱線してきたことが分かります。私たちは、聖書が男女のお互いの関係、そして神に対する関係における男性の役割と女性の役割について、何を啓示しているかについて正直にならなければなりません。この世にあってクリスチャンであることのチャレンジを真剣に受け止め

る男性たちや女性たちが、先入観を脇に置き、神の真実の声を新鮮に聞くためにみことばに取り組む姿を見るのは嬉しいことです。それまで信じてきたことがさらに強められる人もいることでしょう。別の考え方をすることのチャレンジを受ける人もいることでしょう。私たちの最終目標は、様々な解釈がある中でも、教会の中で最高命令である一致を実践する方法を発見することです。

神に応答して生きるために、型にはまった男女像からどのように人々を解放することができるでしょうか。

私たちはどのようにして態度、規則、そして習慣を変えることができるでしょうか。変化をもたらす人になるためのステップは次のとおりです。(注1)

- A. 幻（ビジョン）を展開する。
- B. その幻（ビジョン）に関連する信条を定義する。
- C. 現実を直視する。
- D. 現実から幻（ビジョン）に移行するための目標を設定する。
- E. 入手可能な資源を決定する。
- F. 行動を決定する。
- G. それを実行し、評価する。

A. 幻（ビジョン）を展開する

しばしば「パラダイム（枠組み）開拓者」と呼ばれる、明確な幻（ビジョン）を描く人は、物事を別の視点から見ます。

新しいパラダイム（枠組み）を進んで見ようとする態度は、一般に、現状に対するある種の窮屈さ、不均衡感、そして不満感の結果です。何らかの理由で、現状は居心地が悪くなります。女性たちはまさにこの時点にあります。

最初の一步を踏み出すことと、パラダイム（枠組み）・シフト（移行）をすることとの間の過程は、長く、ゆっくりしたものかもしれません。あるいはあっという間に起るかもしれません。しかし実際にパラダイム（枠組み）を変えるためには、新しい幻（ビジョン）が現状に勝ると信じなければなりません。

女性が教会の中でどのような役割を果たすべきかという幻（ビジョン）を描き始める場所は、「教会が賜物を中心に築き上げられたら、どのようになるだろうか」という問いを発することです。聖霊が、信者の共同体の中で生きようと男女を招き出し、かしらであるキリストに在って互いを建て上げるために、男性と女性に賜物をお与えになったというメッセージに一番ふさわしい構造とはどのようなものでしょうか。

教会が賜物を中心にして形成されたら、このようなものになるでしょう。

男女が教会の営みを運営し、決定機関に平等に参加する共同体。

男女共に教会会議の委員として、賜物を行使している共同体。

男女共に、しばしば分裂をもたらす人間の指導者の知恵に頼るのではなく、一致をもたらす聖霊の知恵を求める共同体。

すべての人が、教育、説教、異言、預言、運営、奉仕、牧会などを通して建て上げられるために、男女の機能、立場、そして奉仕が性別に基づくのではなく、賜物と人格に基づいている共同体。

男女共に、キリストのからだである教会のかしらはキリストであることを理解している共同体。

互いに従うことが実践されている共同体。

B. その幻（ビジョン）に関連する信条を定義する。

パラダイム（枠組み）・シフト（移行）の最中にある時には、私たちの内に緊張感が生れます。そもそも新しいパラダイム（枠組み）を考えようとするときに生れる不安感は、私たちが間違った方向に進んでいるのではないかという恐れによって強化されます。視点が新しいということ自体は、自動的にそれが正しいということにはなりません。しかし、現在の視点に異議を唱えることが間違っているということでもありません。そこで葛藤が存在しうるのである。私たちは現状を維持することにも問題を感じますが、人々が指導者に盲従することによって間違った方向に進むときに何が起るかも知っています。幻（ビジョン）を描く人に従って行って、とんでもない間違いを犯す人が多くいます。

ですから、誰かの幻（ビジョン）を単純に信頼するだけでは十分ではありません。どのような基準を用いて過去を追放するかを決定し、新しいパラダイム（枠組み）の土台となる前提を見極めることが重要です。それらは本当に正しいのでしょうか。

信条が明確にされて初めて他の人の立場を批評することができます。信条が明確にされて初めてあなたの幻（ビジョン）が聖書的かどうかを知ることができます。（二つの対称的な考え方の要約が記されている付録 A を参照。）

カナダのワールド・ビジョンのドン・ポテレスキーは次のように述べています。（注2）

- 私たちには自分の信条を明らかにし、その信条を守る権利と責任があります。
- 私たちは自分の構造が主観的であることを告白しなければなりません。
- 私たちはより聖書的な構造とそうでないものがあることを告白しなければなりません。

未熟さと破れには、ある程度の制限付きの構造が必要になります。しかし、それが律法主義のように制度化されると、それは未熟さに留まり、幼稚で人々を拘束することになります。(注3) 支配に特徴付けられる型(モデル)、力を強調する立場、自己を増大させる型(モデル)、互いに支配する型(モデル) ---- どれも、ご自身の羊のためにいのちを捨ててくださった御方にふさわしくありません。

それが何についての幻(ビジョン)かにかかわらず、より聖書的な幻(ビジョン)に移行する過程は、幻(ビジョン)に関連する信条を箇条書きにして、それらが聖書の教えと一貫性があり、両立するか否かを決定することです。教会の中における奉仕とリーダーシップの基盤に関してこの研究の中で提示されている幻(ビジョン)が、実際、今私たちが経験しているものより聖書的であるかどうかを決定するためには、この幻(ビジョン)に関連する信条を特定しなければなりません。

1. 異論の多い諸定義に関する考え方

解釈学は確かに論点ではありますが、これらの解釈の原則の根底にあるのは定義の問題です。主の働き、リーダーシップ、指導的地位、権威、そして服従のようなことばで描写される考えはすべて明確にされる必要があります。

異論の多い諸定義は、聖書を検分するに当たっての廣いの枠組みと、イエスが教えられた、顧われた人が生きる場として共同体の模範(モデル)を用いることによってすべて解決することができます。

リーダーシップの神学が、階級制度や権威ではなく、キリストのサーバント・リーダーシップの模範(モデル)に基づいて展開されるなら、女性が神の召しに応じ、どのような働きにつくかに関して、神学的な問題は生じません。もし主の働きが力ではなく奉仕として理解され、そして権威が人にではなく、みことばにあると認められるなら、解釈学的な問題は起らないでしょう。なぜなら矛盾は広い文脈の中で説明可能だからです。

かしら性の問題は「頭」の一般的な意味をすべての聖書箇所押し付けるのではなく、聖書箇所の文脈を見ることによって解決することができます。権威の問題は「アウテンティン」を「エクスーシア」ではないものとして理解するときに解決することができます。服従の問題は、みことばの中で教えられている相互の服従という理解と、賜物はすべての人によって用いられる共同体の模範(モデル)の理解によって解決します。

2. 聖書的権威に関連する考え方

マーティンによると、権威は服従を命じることのできる権威と解釈されてきました。過去2000年のキリスト教文化の中で、妻は夫に従うことを約束し、この世の法律も夫が権威を行使するために暴力と用いること許しました。

マーティンによると、

女性の服従の神学のどこかに潜んでいるのは、男性と神の間には特別な関係があるという考えです。神学者たちがその関係を権威に限定することは、痛みを軽減することにはなりません。実際、それはその関係を最悪の場所に限定することになります。なぜなら、それは男性がこの「権威」を用いて、女性は男性が考える女性の行

勤の在り方に以外の方法で神に仕えてはいけなと支配してきたからです。(注4)

今日この立場の力は弱まっています。そしてクリスチャンたちは「男性に究極の責任を与えることによって……権威の与える衝撃を和らげています。……この解釈によると、男性の権威は権利ではなく、奉仕になります。」(注6) ですから、男の権威を現代のクリスチャン女性にとって飲み込みやすいようにするために、教会によって用いられていることばは「ヘッドシップ」です。(注7) C. S. ルイスはこの態度を次のようなことばで表わしています。

男として、キリスト教が我が同性の上に置いた、権威、むしろ重荷、を主張するのには痛みが伴います。人は制服を着用している者にではなく、制服に敬礼する、というのは古くから言われていることです。男性という制服を着ている者だけが、……教会に対して主の代理となることが出来ます。我々男性はしばしば非常におそまつな祭司になります。それは我々が十分に男性的ではないからです。(注8)

マーティンは男性の権威の原則について厳しく語っています。「それは権威を心から愛している男性優位社会によってキリスト教の神学に挿入されている誤った教えです。」(注9)

それでは、聖書的に正当な権威の行使とは何でしょうか。権威の乱用はどのような時に起きるのでしょうか。

あるグループに属しているゆえに権威を与えられるような組織には、潜在的に権威の乱用があります。それに対する解決法は相互服従という聖書的な教えと、共同体の中における職務を決定するための賜物の使用です。

真にクリスチャンの共同体においては男であれ、女であれ、究極の権威を持つべきではありません。なぜなら共同体の役割は神の御心を見極めることであり、神こそが究極の権威だからです。

3. 共同体に関連する考え方

共同体に関連して二段階の考え方があります。第一に、神は私たちが共同体の中で生きようとしてくださったことを認めることが大切です。それから、その共同体がどのようなものであるべきかを発見することが大切です。

神は共同体を意図しておられました

グレンツとクジエスボはギルベルト・ヒレスキアン(一章参照)と同じ考えで、神の民は共同体の中で生き、共同体を発展させ、共同体を作ることを意図しておられます。彼らはこのように言っています。

共同体を設置するという神の目標が、教会の聖書的理解のための文脈を設定します。……神の新しい共同体に全力で参加することは、神の国における人間の生活の終末的変貌を待たなければなりません。しかし、……私たちは、今、その終末的な交わりに預かることができます。……この壊れた世界のただ中で、主はご自身のご性質を反映する理想的な愛の共同体をできる限り映し出すように私たちを召しておられます。……教会は(人間)的な違いがアイデンティティと行動の基盤を構成

することのないような共同体であるべきです。・・・古い秩序の中では、人々は性別のゆえに容易に差別していました。しかし、キリストの贖いの御業は、男女の関係の基本的な原則としての階級制度の役割から私たちを解放します。・・・新約聖書は新しい創造の幻（ビジョン）に沿って生きるように命じています。この幻（ビジョン）はすべての人種、社会的立場、そして男女の性の間に、完全な和解の日が来るのを待ち望みます。教会の役目は、この幻（ビジョン）が現状の姿を可能にすることであり・・・神の終末的な統治を特徴づけるような神と人の完全な交わりを指すことを可能にすることです。・・・私たちは共同体と相互依存を推進するような構造を通して、今日の共同体の中で、この幻（ビジョン）を反映するように努力しなければなりません。・・・終末的な幻（ビジョン）の待望は、私たちが新しい創造を古い創造に対立させるということの意味しません。むしろ逆で、キリストの来臨のときにお始めになり、キリストの再臨のときに完成させようとしておられるものは、神が創造のときにお始めになられたことと同じものです。教会において男性と女性が全面的に参加するようという招きは、創世記の創造の物語に記述されているように、初めから神が意図しておられた完全な平等の成就です。

この共同体の特徴

この共同体が健康的なものであるためには、そこには一致と主の働きがなければなりません。クリスチャンの集まりは一致を強調するあまり、何のために彼らが一致を保つのかという目的を忘れることがしばしばあります。他方、主の働きに集中するあまり、一致を保つことをおろそかにする人たちがいます。両者が必要なのです。一致と主の働きの両方を推進するのに必要な一つの要因は、責任を果たすことです。

- a. 一致とは一つであること ---- 互いを完全に受け入れること ---- を意味します。そこには第二級の市民はいません。私たちの周囲に存在する社会の構造は、教会の中で通用するものではありません。私たちは性別、人種、そして階級に関して、世的な見方を乗り越えるように命じられています。
- b. 主の働きとは福音の伝達のために手を取りあって努力することです。私たちは祭司の王国になったのです。一致と主の働きをする義務との間には直接的な関係があります。その共同体の生活と主の働きにすべてのメンバーが完全に参加しないようなものは、本物の共同体とは言えません。

神の召しと、その召しを教会が承認することとの間には常に緊張があるでしょう。しかし、立場というのは主の働きを承認し、その働きの正当性を立証するだけであることを心に留めておくなら、その緊張の幾分かは和らぐことでしょう。神は、まず、第一に、そして何にも勝って、私たちをご自身に召されます。その関係から主の働きへの召しが生まれてきます。次に、教会はそれにふさわしい肩書きや立場を与えることによって、その働きの性質や賜物を承認します。しばしば、より大きな重きが、召された働き、その人の賜物、あるいは、最も大切な、キリストの関係というものよりも、その人に与えられた立場というものに置かれています。

- c. 責任を果たすとは、共同体の中で責任を受け入れ、互いに従うことを意味します。共同体に対して責任を取ることなく自分の賜物を用いる自由を要求する人は、キリスト者として振る舞っていません。男性

もそうですが、女性は自らが仕えている共同体に配慮しなければなりません。女性は主の働きへの神の召しに応答する自由がありますが、その召しは、彼女が属している共同体の承認を得なければなりません。―― それ彼女が女性だからという理由ではなく、男性もそうであるように、属しているキリストの共同体に対して責任があり、責任を果たさなければならないからです。

4. フェミニズムに関連する考え方

フェミニズムは、階級制度や、教会の中における女性の位置づけ、神の性質と教会の性質についての教えに関して疑問を投げ掛けています。その疑問は注意深い応答を必要としています。決まり文句の答えでは十分ではありません。フェミニストの中にはアンチ教会の人もいますが、真剣に真理を求めている人もいます。自らをフェミニストと呼ぶ人たちをひと括りにまとめ、みな同じことを信じていると思いついては間違っています。自らをフェミニストと呼ぶ人たちが聖書に向かうとき、様々なアプローチを取りますが、その人たちと意味のある対話をするためには、その違いを理解する必要があります。

フェミニズム：男性優位の社会において、男性と女性の平等な権利、平等な地位、平等な機会の確保に向かう運動。

フェミニスト：男性であれ、女性であれ、社会、家庭、教会において、性別に基づいた役割を排除することに賛成している人。この枠の中にはいろいろな信仰の人がいます。

女の神や女神崇拝に関わっている異教の人たちもいます。フェミニズムについて議論する際に、神、啓示、宗教を排除するヒューマニストもいます。キリスト教の枠組みの中で考え、聖書記者たちは視野が限られていた、時代の子であったと信じる人たちもいます。彼らは女性につきまつきとなるようなものはすべて変える解釈学を用いるかもしれませんが、聖書には権威があり、そのように理解されなければいけないと信じていても、同時に、社会、教会、そして家庭における性別に基づいた役割を排除するというフェミニスト的な考え方を取り込む人たちもいます。一般的に言って、聖書的な視点から女性の役割を理解しようとするフェミニストたちは、次のように議論します。

男女平等は聖書の中で肯定されています。

イエスはフェミニストでした。

女性の劣等性は罪の結果でした。

ガラテヤ人への手紙3:28は神の前における霊的な立場に限定されず、社会におけるその立場の実践に言及しています。

男女の相互服従はエペソ人への手紙 5:21~24で教えられています。

頭は「一に対する権威」ではなく「一の源」を意味します。

パウロは一つのことを教え、別のことを実行しているわけではありません。

聖書は、役割は性別ではなく、賜物に基づいている、と教えています。

5. 賜物に関連する考え方

大宣教命令は、女性も男性も含む教会全体に与えられました。聖霊は「弟子を作り、教え、洗礼を授ける」ために必要な賜物を男性にも女性にも与えて彼らを働きに備えます。その備えには、リーダーシップ、教育、また

は主の働きの中の分野であっても、権威が含まれています。しかし、その権威は誰かの上に振るう権威ではなく、みことばと聖霊の権威です。その結果として、

賜物は性別に関係ありません。

特定の召しは性別によって決定されません。

生物学は最終目的ではありません。霊的な献身こそ大切なのです。真の祝福は既婚の

女性や男性と同じように、独身の女性や子供のいない女性にも与えられます。

神が男と女を創造したとき、一致を望んでおられました。

真の一致は 階層性を否定します。

神に従う者の尺度は、律法ではなく、愛です。

6. リーダーシップに関連する考え方

私たちはリーダーシップに関して何を信じているでしょうか。どのように定義するでしょうか。

リーダーシップの役割は以下のことです：

- 幻（ビジョン）を打ち出すこと
- その（幻）ビジョンを達成するために人々を動員すること
- リーダーを開拓すること
- リーダーを増やすこと
- 男性も女性も賜物に応じて有効に働けるようにすること
- それぞれの働きに就けるように助け合うこと

協力型リーダーシップは聖書の模範（モデル）です：そのリーダーシップは助けを与え、志気を挙げ、力を与えます。そのリーダーシップは支配的ではありません。

霊的なリーダーシップは

「キリストの性質を体現し、

キリストの幻（ビジョン）を自分のものとし、

キリストの民に力を与える」（注12）

人々を必要としています。

女性たちはこれらのことができます。女性は神のかたちに造られているので、男性と同じように神の愛を反映することができます。力や権威ではなく、神の愛を反映することこそが霊的なリーダーシップの本質です。新約聖書の形態は、リーダーシップの共有、すなわち数人の長老たちが責任を取るのが普通だったようです。

女性たちはどのような状況にも異なった視点を持ち込むことができ、実際にそのようにするので、リーダーシップ・チームに加わるべきです。女性が異なった視点を持ち込むことができるのは、その性の故ではなく、女性としての男性と異なる人生経験によります。「もし、共有されたリーダーシップをもっと体験するなら、女性がそのチームを指導するか否かにかわらず、そのチームに女性が全くいないのは不十分である、と言いたくなるでしょう。」（注13）

教会は女性がリーダーシップに持ち込むユニークな資質を必要としています。そして、このユニークな資質を活用するためには、教会のリーダーシップのスタイルが変わる必要があるかもしれません。また、女性が女性であるという理由でリーダーシップから排除するということは、教会を貧弱にすることに他なりません。女性は神が教会に与えようとしている賜物の少なくとも半分を持っています。

リーダーシップは権威や力に関することではありません。それはキリストの弟子であること、キリストの弟子になるようにと人々を引きつけることです。それは、また、責任に関することです。それは「わたしの羊を飼いなさい」という教えに関することです。

7. 解釈の原則に関連する考え方

多くの文化的信条と歴史的な習慣が、私たちの聖書の読み方に影響を与えることは明らかです。たとえば、ヨハネによる洗足の儀式の記録（ヨハネの福音書 13:5~17）は、人々はサンダルを履いていたという事実に関連する文化的な習慣として解釈されるのが一般的です。イエスの「互いに足を洗いなさい」という明白な命令を守っている人が今日どれだけいるのでしょうか。イエスご自身がそのようにすべきだと命令しておられるのに、なぜそのようにしないのでしょうか。その命令は弟子たちにだけ向けられたものだったのでしょうか。または、その日だけのものだったのでしょうか。私たちはどのようにしてそれを知ることができるのでしょうか。どのような基盤に立って私たちは決断するのでしょうか。私たちが聖書を解釈するときに用いる枠組み（パラダイム）と原則をよく知らなければなりません。

聖書のある箇所は特別な状況にのみ関係していますが、それだからと言って、特定の箇所を排除するのは受け入れられることではありません。

今まで聖書を間違って読んできた可能性はあります。

例えば奴隷制、環境問題などの文化が突きつけるチャレンジを考慮して、聖書を読み直す必要があります。

8. 文化的制約に関する考え方

男性と女性はお互いに関係を持つ存在として造られました。どちらも地を支配し、どちらも働き、繁殖するように命令を与えられています。メアリー・スチュワート・ヴァン・リューエンはその関係がどのように実践されるかを描写しています：彼らは互いを補うように造られ、その補い合いをどのように形成するかという自由が与えられています。どのように構成するかが私たちの文化になります。（注¹⁴）

私たちは文化というものを、人間が神の命令を創造的に実践するものとしてではなく、神の命令そのものとして受け入れるという間違いを犯す傾向があります。私たちは、神の創造の秩序を人間の創造と取り換えます。罪が私たちの生活のすべての分野に入り込むように、それは明らかに私たちの文化の形成にも入り込みます。間違った文化の形成が横行していますが、それは神の秩序ではありません。それは与えられた自由を人間が歪めた結果です。男性も女性も、性の役割を相手に優位に立つ力、または、

律法的で柔軟性のないのものにし、結果的に男性と女性の両者をあらかじめ決められた職務に限定して、相互の補い合いの実践を誤って運用しています。(注¹⁵)

パウロが「キリストにあっては男子も女子もない」と言うとき、彼は私たちが実践することを期待されている原則を述べているのです。その原則とは、文化の中で発展してきた区別と罪の結果をキリストがすべて取り払うために地上に来られたというものです。これは創造の秩序に私たちを連れ戻す宣言です。階層を作り上げるのではなく、排除する宣言です。

文化が神学を左右することを拒否するのと、福音のために文化に敏感であるのには違いがあります。

特定の文化の中で、キリストにある自由がどのように実践されるかという問題は非常に重要です。ここで、パウロの勧告を適用することができます。キリストにあって与えられている自由のゆえにすべてのことがゆるされていますが、すべてのことが有益ではないのです。女性がどんなかたちであれ、主の働きから除外されるべき神学的根拠はないのですが、彼女たちに自由や権利が与えられても、彼女たちには、他の人たちがつまづかないようにという配慮から、その権利を行使しないことを選ぶ自由があるのです。この時点で、女性が生きているその文化を考えなければなりません。(コリントの教会ではこれが問題だったのです。)文化には人種、性別、言語、経済力に加えて、宗派の文化が含まれます。

ここが、真の謙遜とサーバント・リーダーシップが顕著になるところです。もし、女性が信仰の共同体だけでなく、広域の共同体に仕えようとするなら、彼女たちは個人的な自由と共同体への服従、伝統に挑戦することと互いを尊重することの間で微妙なバランスを取らなければなりません。境界線を越えることなく、新しい地を開拓し、戦闘的に攻撃することなく現状に抵抗する必要があります。彼女たちの奉仕の実践が、「権威」を振りかざそうとする人たちによって制約されるのではなく、神によって導かれていると感じるなら、そして、主の働きが性の故に排除されるのではなく、自らの選択によって制約されていると意識しているなら、女性も男性と同じようにこのような文化的な問題に関して柔軟になることができます。

C. 現状を洞察しなさい。

変化をもたらす最適な場所はあなたの足元です。人々が変化をもたらそうと動機づけられるのは、そこに何らかの不満があるときと、その変化に益があると感じるときです。

現状はどのようなものですか。変わるように迫られている共同体について知ることが重要です。彼らの動機と変化に対する抵抗の原因、そして、もしそのようなものが存在するならば、隠れた意図を発見することが重要です。

その共同体は、女性の役割という問題に関してどのような立場を取っていますか。その共同体の構成メンバーは全員が同じ基盤に立っていますか。その共同体のために、私はどのような制約を自分に課さなければいけませんか。その共同体のために、私はどれだけ自分を変える覚悟があるでしょうか。

私が敏感でなければならない文化的な標準とは何でしょうか。

D. 現状から幻（ビジョン）に達するための目標を立てなさい。

私たちは何を達成しようと願っているのでしょうか。それぞれの文化にはそれぞれの目標があります。

資格のある女性の任職を許可するために、教会内規を変えたいと願っている人たちがいます。

女性の視点が決定に反映されるために、教会の役員会において女性の数を増やすべきだと言う人たちもいます。

若い女性が成長し、より多くの責任を引き受けることを励ますような霊的指導者（メンター）の組織を作り出したいと願う人たちもいます。

傷つけ合い、相手を軽んじるのではなく、助け合い、育て合うような共同体を立ち上げたいと願う人たちもいます。

女性のリーダーシップの良い模範を発見したいと願う人たちもいます。

女性たちに読み書きを教えたいと願う人たちもいます。

教会の中における女性の経済的奴隷の立場を廃止したいと願う人たちもいます。

女性たちの土地の保有権を擁護したいと願う人たちもいます。

女性たちの相続権、経済的権利、法的権利のために戦いたいと願う人たちもいます。

他に・・・を願う人たちがいます。

E. 可能な手段を決定しなさい。

下記のものは利用することのできる人材、物、できごと、行動です。

どのような賜物がありますか。

私たちの共同体の中にはどのような人たちがいますか。

私たちの共同体の外にはどのような人たちがいますか。

どのような資料がありますか ---- 文書、テープ、ビデオ、学びの手引き。

どのような機会がありますか。

どのような場所がありますか。

どのような資金がありますか。

女性の状況を変えるために、女性の力を最大限使うにはどうしたらよいのでしょうか。女性の力には下記のようなものが含まれます。（注¹⁷）

弱さ- 成長と養育の機会につながります。

関係性 - 強いネットワークを発展させる能力につながります。

養育 - リーダーシップの本質である、他の人たちを養育し、力づける能力につながります。

感情 - 真実であることにつながります。

協力 - 共同体の中にある力や資源を発見することにつながります。

創造性 - 解決を見つけることにつながります。

F. 実践を執行しなさい。

1. アイデアを見つけなさい。ブレインストーミングをし、他の人からアイデアを得、リサーチをし、戦略のリストをチェックし、専門家に相談しなさい。頭に浮かぶことは何でも書き記しなさい。

2. アイデアを評価しなさい。

これは私たちにふさわしいことでしょうか。

これはこの特定な場合にふさわしいことでしょうか。

私たちには手段があるでしょうか。

私たちには時間があるでしょうか。

この方法でやることのリスクを取る用意があるでしょうか。

3. 最善の方法 ----- アイデアの中で最も丸印がついたもの ----- を選びなさい

4. 決定された基準に従って優先順位を決めなさい。

5. 企画を実践しなさい：何を、なぜ、いつ、誰が、どこで、どのようにして、という問いをしなさい。

G. まず実践し・・・それから評価し、そして目標の改善をしなさい。

話し合いと熟考のための質問項目 ― 第5章

1. 性別が主の働きを決定しているでしょうか、それとも、召しと賜物によって決定されているでしょうか。どのような基準の下にこの決定をするでしょうか。

2. この学びを通して、女性に関してどのような一貫性のない教えを受けてきたかに気づきましたか。その問題は満足いくかたちで解消しましたか。

3. キリストのからだとして生きるために、どのような幻（ビジョン）を展開させましたか。

4. 指導者はどのような資質と資格を持っていなければならないと思いますか。もしあるとすれば、それらの中でどれが性別に関係していますか。

5. 現状から幻（ビジョン）に移行する目標設定をするために、誰の協力を必要としていますか。

6. どのような手段が手元にありますか。

7. この学びを始めたとき、後で振り返るために問題点を書き出すようにお願いしました。その問題点とは何でしたか。どのような光がその問題点に投げ掛けられましたか。まだ解決していないものは何ですか。その問題点の理解または解決のためにどのような段階を踏んだらよいか分かりましたか。

8. スタンレー・グレンツとデニス・ミュイヤー・クジエスビー（pp. 60~61参照）が描いている共同体をより良く反映するために、あなたは、信仰の共同体をどのように個人的に援助することができますか。

エピローグ

私たちは共同体を分解するような世界に住んでいます。しかし、人種、階級、そして性の差別を無くすための唯一の希望は共同体の中にあります。もし、真の共同体があるとすれば、そこには、すべての人種と階級の男女に平等が与えられています。

だれがこの模範的な共同体を作るのでしょうか。政府でしょうか。学校でしょうか。それとも会社でしょうか。いいえ、教会だけがそれを行うことができます。しかし、教会は共同体の聖書的な模範に立ち返り、それを実践しなければなりません。

この共同体においては、過去に対する怒りをもてあそばさる余地はありません。新約聖書の時代の女性たちが、自分たちが制約されてきた何年もの過去について男性たちと激しく議論している怒りの声は聞こえてきません。女性たちを「いるべき場所」に押し込もうとする男性の怒りの声も聞こえてきません。実際、怒りの声は全く聞こえてきません。私たちが目にするのは、男性も女性も福音のチャレンジを受け止め、御霊の力をいただき、彼らの文化の中でできることは何でも、キリストの御名によって行なうために出て行く姿です。その性質上、その共同体では男性と女性による相互の服従と相互の尊敬が必要です。その上で、私たちは男性も女性も神の召しに自由に応答することができるように、協力して当たらなければなりません。私たちは、キリストが教え、キリストが確立することを願っておられた共同体にできるだけ近いものを作り出すために、協力しなければなりません。

男性と女性の役割に関して言うなら、それが私の幻（ビジョン）です。この学びが皆さんの幻（ビジョン）を形成し、その幻（ビジョン）を実践するのに必要な手段を提供できたと信じます。

下記の類似例は、女性たちが、イエスが召しておられる豊かな人生に応答する自由を未だに許さない伝統と、教えによって縛られている実態を絵画的に描写するのに用いることができます。キリストは命をお与えになります —— キリストは命の与え主です —— しかし、キリストは、私たちがお互いを自由にすることに参加することを望んでおられます。

これは聖書のこの個所の釈義を目指しているのではなく、劇的な説明のためのものです。

さて、ラザロという人が病気であった・・・そこで姉妹たちはイエスのところに使いを送って、言った・・・イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終るだけのものではない。（そして）イエスは、そのおられ

た所になお二日間とどまられた・・・イエスが到着すると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた・・・
「その石を取りのけなさい」とイエスは言われた。

「しかし、主よ、」死んだ人の姉妹のマルタは言った。「もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」

それから、イエスは言われた。「もし、あなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」そこで、彼らは石を取りのけた。

イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

女よ、自由になりなさい。

ヨハネの福音書11：1～44

ラザロの復活は女性のためのふさわしい類似例として役に立ちます。私たちは声を、イエスの大きな声を聞いています。「女よ、出て来なさい。墓 ---- 死の場所 ---- あなたを閉じこめておいた場所 ---- から出て来なさい。命と自由、そして私があなたを召している豊かな命へと出て来なさい。女よ、出て来なさい！」

イエスのことばに従って、私たちは今出て来ます ---- 墓の暗闇から命の光へ出て来ています ---- しかし、私たちはまだ墓布で手足と顔包まれている状態にあります。私たちの社会の習慣や態度が私たちを固定観念に押し込むので、話したり行動したりすることができません ---- その固定観念というのは、神によってではなく、他の人たちによって決定された役割です。そして、私たちは再び声を聞きます ---- イエスが大声で言っておられるのを。「墓布をほどいてやって、彼女を行かせなさい。」

イエスの声だけが、私たちを墓から出すことができます。イエスこそが命をお与えになることができるお方です。しかし、イエスは、私たちに墓の石を取りのぞき、私たちがその新しい命に生きる自由を制限する墓布を互いに取り除くようにお命じになります。それをするために私たちはお互いを必要としています。個々の女性として、私たちが主の声に従うために、共同体は従順である必要があります。

石は何を指すのでしょうか？

石は私たちが墓に閉じこめるものです ---- 死の象徴、無の象徴です。それは、私たちが死んでいると決めつけるもの、私たちの生を邪魔するもの、私たちの存在価値を奪うものです。

女性たちが神から与えられた存在価値を取り戻すために、私たちはその石を取り除くように命じられています。

このように応答する方が楽です。「ひどい臭いがします。----- 彼女は墓の中に長く居すぎました。」事態は長い間このようでしたから、彼女を呼び出すのは心地よいことではないでしょう。

確かに楽しいことではないでしょう。また、たやすいことでもないでしょう。なぜなら、女性に存在価値 ----- 神から与えられた存在価値 ----- を返すためには、社会の価値観や歴史的な伝統が女性を二級市民のおとしめ、彼女の自尊心を低くして、聖書の教えを歪めてきたやり方に挑戦しなければならないからです。たやすいはありません。

しかし、イエスは言われます。

イエスが「出て来なさい」と呼びかけるとき、出て来るこの女性はだれでしょうか。

彼女は、男性と同じように、神のかたちに造られています。彼女はキリストのからだを建て上げるために、男性と同じように、小羊の血で贖われ、王国の祭司に召され、聖霊によって賜物を与えられています。彼女は ----- 清められ、栄光が与えられ ----- キリストの似姿に変えられ、キリストの花嫁として男性と一体になっています。彼女は、男性と同じように、傷ついたこの世にキリストを示すために、神のかたちに造られています。ですから、イエスの第一の命令に従い、神に与えられた存在価値を妨げる石を取り除き、彼女に「出て来る」ようにさせましょう。

第二の命令はもっと難しいと感じるかもしれません。すなわち、彼女の墓衣を取りのぞき、彼女を解放する ----- 彼女の存在価値の最終目標を成就するために解放する ----- ことです。

墓衣とは何でしょうか。

墓衣とは彼女の自由を制限し、彼女の手足を縛り、顔を覆い、彼女が主から召されたことを話したり、行動したりすることを妨げるものです。

それは、愛なる神によって用意された豊かな人生を妨げる文化的習慣によって彼女の上に強いられたものです。

それは、自分自身の目にも他の人の目にも、女性の価値を低めるものです。

それは、次のことを引き起こす態度や律法、そして慣習です。

- 搾取
- 暴力
- 性的差別
- 沈黙

神のかたちに造られ、神によって召し出され、神に任命された女性は威厳と価値をもって生きるために解放される必要があります。

もし、それが女性を解放するために取り除く必要のある墓衣であるなら、どのようにすればよいのでしょうか。

態度を変えなさい —— 法律を変えなさい —— 行動を変えなさい

教会が墓衣を取り除かなければなりません！

まず初めに、それを見ることによって：

教会は私たちの共同体の中にある搾取、不公平、暴力、貧困の実態を認める必要があります。

教会は、社会において暴力が美化され、社会が暴力を容認している範囲を認める必要があります。一つのグループが別のグループに服従を要求するような組織では、「権威を振るう」グループは相手の服従を確実にするために必要なものは何でも合法的であると信じるようになります。その組織はまた、「権威」を持つ側が、その服従がどのようながたちを取るべきか、すなわち、服従のための規則を作り、違反に対する罰を決めることを許可します。

性の差別が女性に向けられる暴力の根本原因です。

それから、行動することによって：

向上への道筋は、その力を持っている者たちによって備えられなければなりません。ラザロはイエスの声によって復活しましたが、イエスは周囲の人たちがその状況に関わることを期待しておられました。彼らこそがラザロを縛りつけていた墓衣から解き放つ力を持っていた者たちです。

女性たちを向上させることの目標は、彼女たちが神の召しに応答できるように解放することです。この学びの目標は、彼女の墓衣を脱がせる手助けをすることです。墓衣とは彼女の声、彼女の賜物、彼女の慈愛に満ちた行為を渴望している世界の中で、彼女を抑制し、沈黙させるものです。

私たちの目標は励まし、教育、そして模範を通して障壁を取り壊すことです。

障壁の中には、聖書に誠実に向き合い、自分たちが聖書に期待することではなく、聖書が語っていることを見出そうとしている学者たちによって壊されつつある神学的信念があります。

あるものは、女性たちを下位の階層に属するとみなす文化の中から生れた態度によるものです。それらは、力を持っているものが、進んでその力を放棄しようとするときにのみ崩されます。

キリストは教会 —— 男性と女性の両者 —— をキリストのからだである教会として召しておられます。私たちは傍観者になって、何もしないなどということはあってはなりません。

教会は、共同体として生きることを始めなければなりません。多くの文化の中で、教会によって認められている生活様式は、たとえそれが感情面や体の面での暴力を含んでいても、個人の家の中で起こることに対する説明責任を排除する、私的な、個人主義的な型（モデル）です。教会はそのような型（モデル）を排斥して、キリストが建て上げるためにこの世に來られた共同体で生活を始めるべきです。

クリスチャンの共同体は互いに従い、互いに尊敬し、互いに建て上げ、互いにチャレンジし、互いに配慮し、互いに分かち合う中で機能するのです。真にクリスチャンの共同体では、暴力もなく、虐げもなく、不公平もなく、性別、社会的地位、そして人種に基づいた排斥もないでしょう。

私たちは契約と相互依存の神学に基づいて生きることを学ぶことができます。教会の委員会や運営の決断方法を変え、指導的地位において男性も女性も共に機能することができます。

クリスチャンの共同体では、女性が全面的に参画することを阻むものを取り除くために、男女が協力して働くでしょう。私たちの社会の底辺で生きている者たちの尊厳を取り戻すために、男女は資源を出し合い、創造的になり、互いから学び、互いを助けることができます。もし、これが達成されるなら、教会はキリストの御名を崇める、情熱的な、人道的な共同体として自らを確立することができますでしょう。

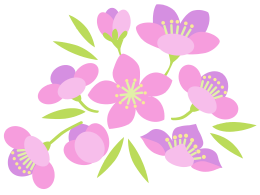
そのようにする中で、教会は女性たちが甘んじている恐れの実態 ---- 恐れは悪臭です！ ---- に取り組むことができます。これは多くの男性たちが理解することのできない女性たちの実態です。恐れを感じている女性たちは多くの場合、神経症的で、被害妄想的で、現実社会に生きていないように見られています。しかし、残念なことに、それがまさに彼女たちの実態なのです。恐れには絶望が伴います。この恐怖と絶望と戦うために女性が用いることのできる唯一の手段は、しばしば怒りです。しかし、女性が怒りを用いようとすると、それはまた、彼女たちが体験する暴力や、彼女たちの関心を無視することを正当化するものとして逆に用いられます。むしろ、私たちは人類の半数が二流の市民として生きることを余儀なくされる社会の不平等に対して、男性の怒りの協力を得たいのです。男性には女性たちに平等をもたらし ---- 彼女たちを自由にし ---- 神のかたちに造られたものとして元々持っている到達点に達することができるように、女性が創造された当初の正しい関係に招く力を持っているのです。

神は男性と女性の両方に世界を変える力を与えてくださいました。その力を分かち合うために励まし合い、共に労するために持っているエネルギーを用いようではありませんか。

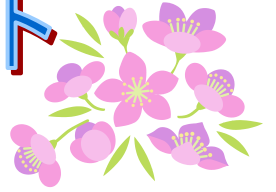
女性たちが不平等の存在を指摘する機会を与えるように、一緒に教会にチャレンジしようではありませんか。それから、彼女たちの押し殺された叫び声や痛みの悲鳴に注意深く耳を傾けましょう。たとえ、それが怒りの叫びに押し殺されているとしても。

教会はイエスのことばに従順であるようにと招かれています。私たちはそのようになることができます。私たちはイエスの大きな声を聞くことができます。わたしたちは墓衣を取り除き、女性たちの存在価値の最終目標に到達できるように助けることができます。

「御国を来らせたまえ。みこころが天でなるとく、地にもなさせたまえ」の実現に向けて一步を踏み出しましょう。



参考資料① ディスカッションのためのノート



性差によるのか賜物によるのか

--- キリスト教界におけるリーダーシップの根拠の再考察 ---

女性の聖書的位置づけに関する研究資料

マリリン・B.・(リン)・スミス著

〔出版の背景〕

1992年にマニラで開かれた世界福音同盟女性委員会（アフリカ代表3名、アジア代表3名、カリブ諸国代表1名、ヨーロッパ代表1名、中南米代表2名、中東代表1名、北米代表1名、南太平洋代表1名）の会議の場で、クリスチャン女性の家庭、教会、社会における聖書的な位置づけに関する共同研究の資料作成への要望が打ち出されました。カナダ女性委員会のマリリン・B.・(リン)・スミスによるこの本は、その要望に対する応えとして、1997年5月に世界福音同盟女性委員会から出版されました。その後、版が重ねられ、最新版は2009年5月に出版されています。

〔特徴〕

著者は性差に関する諸議論の歴史的背景を客観的に提示し、この問題に関して解釈の難しい聖書箇所は様々な立場を研究の対象とします。急進的なフェミニズムを拒否しながらも、女性の賜物についての伝統的な見方を超えた立場を取っています。

「性差が働きを決定するのか、それとも、働きは召しと賜物から生じるものなのか」また「何を根拠にこの決断をするのか」という問いかけがされています。個人またはグループで研究資料の学びをし、各章の最後に設けられた質問事項に答えながら、この二つの問いに対する答えを見出していきます。

〔目的〕

この書の目的は、男性と女性が一致をもって、信仰の共同体である教会を生き生きとしたキリストのからだとして建て上げて行くことです。女性たちが、神の召しに応えて、教えることや管理の分野で賜物を用いるためには、それが神の御旨にかなっていることを知る必要があります。クリスチャンの男性たちも、女性たちをこのように新しい奉仕の分野に向けて励ますことが、聖書的であることを知る必要があります。そのために、神の召し、賜物、奉仕に関しての伝統的な教えを再考察し、聖書の教えを吟味します。

いくつかのポイントにフォーカスを当て、検討していきます。*の部分は女性委員会によるコメントです。

ポイント1．聖書解釈の適切な枠組み、または「窓」

この研究資料の目的は、信仰の共同体の一致と聖書の一貫性を共に保ちつつ、この共同体における女性の位置づけの論議に取り組むために、教会が実践的枠組み（パラダイム）を発展させるのを助けることにあります。

大方のクリスチャンは神のことばに従いたいと真剣に考えており、神のみこころを

見出したいという純粋な願いを持って、教会内における女性の適切な役割について論議します。しかし、私たちの多くは、そう願いながらも、神の真理の発見を阻むものを二つ持ち込んでいることに気づいていません。

その第一番目は、解釈の枠組み ---- そこを通して聖書のメッセージを眺め、そして理解するところの「窓」 ---- です。この枠組みは、多くの場合、自覚的に選んだものではありませんが、事実そこに存在しています。私たちは、聖書全体を創造、堕落、贖い、天国、自分の体験、または経済といった「窓」を通して眺めているかもしれません。しかし、どのような「窓」であつたにしても、その「窓」を検証してみるまでは、私たちがどのように聖書のメッセージを読み、解釈するのに、それがどれくらい影響を与えているかに気づかないでしょう。

間違つた「窓」であれば、それは私たちを真理に対して盲目にすることがあります。教会は、神の真理として教えていたことを、新しい証拠がもたらす光の中で、しばしば考え直さなければならませんでした。奴隷制の問題は、教会がいつも正しかったわけではないことを示す明らかな例です。W. ワード・ガスクは、論説文「教会、社会、家庭における女性の位置づけ」の中で以下のように述べています。

「・・・19世紀の半ばまで、殆どのクリスチャンは、奴隷制度は神の定めた制度であると信じていました。なぜなら、パウロが奴隷は主人に従うべきであると、大変強調しているからです。奴隷制という考え方は、神のかたちに造られた人間の尊厳と価値に対する侮辱であると感じていた、当時の一握りの先見の明のあるクリスチャンと他のノン・クリスチャンたちに対して、パウロとペテロの書簡の数箇所が反論の根拠として用いられました。」

経済という「窓」から聖書を眺めることによって、多くのクリスチャンたちは、奴隷制の実践に対する支持を見出したばかりでなく、奴隷制が神によって定められたとさえ主張しました。

* 奴隷制度を支持するために聖書が用いられ、それが改められるまでに数百年かかったという事実は、解釈の枠組み、または「窓」の検証の重要性を如実に物語っています。

ポイント2. 伝統についての見方

神の真理を見出すことを阻む第二番目のものは、伝統です。伝統的な文化は強大な影響力を持ち、それは地域により、時代により様々です。教会の持つ伝統的な文化が、周囲の社会の伝統的な文化と食い違うとき、当然、そこに衝突が起きてきます。衝突が起きるとき、教会はしばしば、自らの実践に対するチャレンジとして受けとめるのではなく、自らの立場を縮小させ、後退させ、そして強化させます。

科学的証拠があっても、教会が、すでに確立した教えを疑うことを拒否した明らかな

例は、地球は、教会が伝統的に信じていたように平らではなく、丸いと教えたかどで、ガリレオを破門した件です。教会が誤りを認め、彼を赦すのに350年という年月を要しました。教会が自らの神学や伝統的習慣を再考するようというチャレンジを受けるべき時というものがあります。そのようなチャレンジは真理を発見する機会になりうるのです。

＊今日では地球が丸いということを疑うクリスチャンはいませんが、教会がガリレオを破門し、その誤りを認め、彼を赦すのに350年という年月を要したという驚きの事実が厳然としてあります。

教会における女性の位置づけが単に文化の問題として見られるとき、教会によって許容される慣習の変更は、文化に自らの神学を決定させているという議論を起こしかねません。しかし、もし、女性の位置づけを、文化が教会に対して考え直すことを強いてい
る神学的問題として受け止めるならば、真理が伝統に対して勝利する機会にもなります。

＊現代においては、ほとんどすべての社会において女性の位置づけに変化が生じています。その変化を何の疑問も持たずに教会の中に取り入れるなら、文化が神学を決定させることになります。一方伝統に固執し、自らの立場を吟味しないなら、過ちを犯し兼ねません。しかし、その変化を教会に対するチャレンジとして受け止め、聖書から再考するなら、真理と伝統の関係を吟味する良い機会になるでしょう。

聖書が女性について何を教えているかを明らかにしようとして、多くの著者たちが直ちに関連のある聖書個所に目を留めます。そこには二つの危険があります。ひとつは、関連があるとして選ばれる個所は、その著者がすでに持っている立場によって決定されるということです。もうひとつは、聖書がそのように語っていると私たちがすでに信じていることを、聖書が言っているように思えてしまうということです。新しい事柄を発見するために、少なくとも、すでに持っている視点を単に補強しないために、先入観によって曇らされていない目を持って臨むのは、困難なことです。

＊聖書が女性について何を教えているかを明らかにしようとして、直ちに関連のある聖書個所に目を留めがちですが、その危険性が的確に指摘されています。

この研究の目的は、議論を伝統的な習慣から切り離し、キリストのからだにおける奉仕の根拠に焦点を合わせるために、聖書解釈の適切な「窓」を見つけることです。そのためには異論の多い用語（例：かぶりも

の、沈黙、または権威など)の定義や、男女間の力のバランス、あるいは階層対平等というような特殊な議論は、検討のための明確な聖書的枠組みが確立されるまで脇に置いておかなければなりません。

ポイント3. 枠組み（パラダイム）の検証

(1) 聖書的枠組み（パラダイム）を求めて

最初に手がけるべきことは、聖書の最も重要な主題を理解し、その主題と整合性のある枠組みを選ぶことです。

創世記から黙示録に至るまでの中心テーマは、神が、ご自身を霊とまことをもって礼拝する人々、神を愛し、互いに愛し合う人々をお造りになり、彼らを、ご自身との交わり、そして互いの交わりに絶えず招き入れておられるということです。神とご自身の民との交わりの図（下）を参照してください。

創世記1章、2章は天地万物の創造を描写しています。

神が、異なってはいるが一体であるところの男と女を創造されたとき、神は統一体と共同体の両者を創造されたのです。彼らの多様性は明らかです。彼らは男と女とに造られました。しかし、彼らの一体性もまた明らかです。一つの肉が二つの被造物になったのです。この一体性のゆえに、彼らは交わりと共同体を喜ぶのです。創造の御業の前にも後にも存在している彼らの一体性、彼らの「一つの肉」性が創世記1章と2章において、上下関係を排除しているのです。

創世記3章は罪の支配をもたらした人間の墮落について語っています。

罪が入り込んだとき、最初に無くなったものは一体性でした。アダムとエバは神から、そして互いから隠れ、自らの行為の責任を取ることを拒み、一人が支配者になり、もう一人が被支配者になりました。それは、共同体の歪んだ形でした。一体性の中に存在していた平等性は失われました。

旧約聖書の残りの部分は、神がご自身の反抗的な民とどのように関わられたか、また、クリスチャンたちが総称して「古い契約」と呼んでいるところの様々な契約を、神がご自身の民とどのように結ばれたか、という物語を描いています。

バベルの塔は、共同体にさらなる歪みをもたらしました。やがて、アブラハムが一つの家族（共同体）の父となることが定められましたが、その共同体は奴隷に成り下がりました。その後、一つの国民、ヤーウェを神とする共同体、神に忠誠を尽くし、互いに仕える祭司の王国を作るために、神はモーセを召して、民を連れ出されました。神は民をご自身の元に連れ戻すために士師を立てましたが、彼らは

王を欲しました。その結果は分裂王国であり、彼らは崩壊しました。
共同体は再び消え去りました。

しかし、神はご自身の民をご自身との交わりに引き戻そうと招き続けました。預言者たちは、神がご自身の民のために何か新しいことをなさると予言しました。ヨエルの預言は、聖霊が注がれるとき、女性も新しい形でその中に含まれると宣言しました。

新約聖書において、キリストは「贖罪」と新しい契約の導入と共に登場なさいました。

キリストは新しい共同体、ご自身のからだを確立されました。キリストの死を通してこの共同体は産み出されました。キリストは、死を遂げられる前に、私たちが営むべき成熟した共同体の模範を示されました。キリストは一致のために祈られました。キリストは一つの群れ、一つのからだについて語られました。

創造	墮落	預言	・	成就	終末的 共同体
創世記1, 2章	創世記3章	ヨエル書2:28	・	使徒の働き2:17	△
	・		・		・
	・	古い契約の	・		・
	・	共同体	・		・
	・		▽		・
	・		贖罪		・
	・		・		・
	・		・		・
	・		・		・
	・		・		・
	・		△	新しい契約の	
	・			共同体	
	▽				

新約聖書は、キリストの再臨の時に私たちが享受する永遠の共同体をより忠実に反映しながら、今の世において、キリスト者が聖霊の助けによって、信仰、態度、そして関係における成熟に至る道を示しています。

キリストによる贖いは古い契約の中で予兆され、新しい契約の中で成就されました。贖いこそが神のご計画の全容を表わし、贖いこそが聖書を解釈する際に全体像を心に留めることを可能にし、それゆえ、贖いこそが聖書全体を理解するための論理的な枠組みとなるのです。しかし、教会における女性の位置づけに注目するとき、別の枠組みを用いて特定の個所を解釈してしまいがちです。今まで、そのように教えられてきたので、気がつかないうちに不十分な枠組みを用いてしまうのです。この研究の中で、私たちは一貫性を追求します。その結果、異なる枠組みが、異なる解釈をもたらすことが明らかになるでしょう。

＊ここに、この本の重要な命題があります。すなわち、「贖い」こそが聖書全体を理解するための論理的な枠組みであり、教会における女性の位置づけに注目するときにも、この枠組みを一貫して用いることが大切であるという主張です。

（２）伝統的な枠組み（パラダイム）の検証

教会の中で育ったクリスチャンの大半は、男性と女性の関係について、また教会の中における女性の位置づけについて、家父長的、階層的な型（モデル）を教えられてきています。この伝統的な型（モデル）の中では、女性の働きは性別によって制限されていますが、男性は能力、賜物、そして召しによって働くように励まされています。キリストが入って来られた社会の秩序、すなわち、家父長制度は伝統主義者たちによって、すべての時代における決定的な形として見なされています。

＊このような伝統的な見方は、日本の多くの教会の中にも根強くあると思われます。意識的にそのような見方をするようになったというよりも、いつの間にかそのように教えられてきたということでしょう。

また、罪のもたらした結果の一つが、アダムがエバを支配することだったので、この裁きの余波がいつの時代においても男性と女性の基準を決定するものと見なされています。墮落という枠組みが聖書を解釈するときに用いられるようになると、罪のもたらした支配が説明（＝descriptive；神は罪のもたらすものが何であるかを説明しておられるという示唆）ではなく、定め（＝prescriptive；神は私たちが罪のもたらすものに苦しみ続けなければならないと定めておられる、あるいは決定しておられるという示唆）になります。当然の帰結は、罪の結果は神によって確立されたと見ることです。

＊興味深い見方です。罪のもたらした、男女間の支配と被支配の関係を神の説明と取るか、神の定めと取るかによって、決定的な違いが出てきます。そして、その違いは聖書を「贖い」を枠組みとして解釈するか、「墮落」を枠組みとするかによるのです。

この伝統的な見解の主な特徴の一つは、男性には権威が与えられているが、女性には与えられていない、ということです。その結果、権威は神のことばや共同体の中にあるのではなく、男性の指導者の中にあると見なされ、服従とは女性（あるいは妻）から男性（あるいは夫）への服従として教えられます。

この考え方は、男性と女性の伝統的な位置づけの受容か、あるいは一方に男性の支配、他方に女性の支配を置く天秤によって表わされる力の闘争のどちらかを引き起こします。今日、どちらの極端も支持する人は殆どいないので、理想はどちらかということと中心に近い所にあると考えられます。平等は両極端の中心点にあると見なされます。（下図参照）

男性の支配

女性の支配

X

男女の平等

(3) イエスの枠組み（パラダイム）の採用

キリストのからだにおける、男性と女性の働きにふさわしい聖書的な模範（モデル）を確立するために、私たちは支配の天秤から完全に離れて、全く違う領域に移行しなければなりません。神の国の中での働きは、男性の支配と女性に支配のバランスによってではなく、キリストによって導入された新しい秩序によって決定されるべきです。その新しい秩序とは、いのちを育むことと賜物を磨くことが、支配というものを一切締め出す新しい共同体です。

罪の結果ではなく、キリストの贖罪の御業がこの新しい枠組みを確立したのですから、私たちはこの贖罪という「窓」を通して聖書全体を見るべきです。これが、私たちが教会内における女性に関する問題を見るのに用いる枠組みとなります。

＊教会内における女性に関する問題を見るのに用いる枠組みを確立したこの段階で、「神の国の中での働きは、男性の支配と女性に支配のバランスによってではなく、キリストによって導入された新しい秩序によって決定されるべきです。その新しい秩序とは、いのちを育むことと賜物を磨くことが、支配というものを一切締め出す新しい共同体です」という結論めいたことばが出てくるのは少し気になります。

ポイント4．贖罪の枠組み（パラダイム）による女性の位置づけの分析

(1) 創造 - 創世記1:26~28

多くの人々は（男が女より先に造られたという）創造の順序を教会及び家庭の中における女性の働きを決定づける模範あるいは基準と見なします。

まず初めに、アダムということばの用法は、混乱を招きやすいという問題があります。神は、「われわれに似るように、われわれのかたちにアダム（＝人、ヘブル語の土という意味のアダマーに発音が似ている）を造ろう。・・・そして彼らに・・・を支配させよう」と仰せになりました。ここでアダムは明らかに複数形であり、人類 ---- 男と女 ---- に言及しているはずですが。

＊ここでのアダムは固有名詞ではなく、複数形で男と女を指しているという指摘は大切なポイントです。

次に、土地を支配するようにという命令が**彼ら** ---- 男と女 ---- に与えられているということは明らかです。その命令は、女を助手、召使い、奴隷、または部下とする男に与えられているわけではありません。また、この命令は、女が造られる以前に男に与えられたのでもありません。ですから、女は、男が地を支配するための部下としての「助手」として造られたという考え方はこの個所からは出てきません。

＊「女は、男が地を支配するための部下としての『助手』として造られたという考え方はこの個所からは出てきません」ということばは新鮮に、そして説得力を持って響いてきます。

それ故、創世記 1 章は男も女も同様に神のかたちに造られたという根拠の基に、女の劣等性または従属性に反対する議論を展開しています。神は男と女を共に祝福し、彼らが地を満たし、それを従え、すべての被造物を支配するように命じられました。彼らは同じ人間であり、祝福と責任に共に預かるべきです。

＊聖書の最初の章から、男と女は同じ人間であり、祝福と責任に共に預かるべきである、という結論を引き出しています。

（２）創造の詳細記述 - 創世記2:4~25

創世記 2 章には、男と女の創造についての詳細な記述があります。この個所から男の優越性と女の劣等性の議論を導き出す人たちがいます。この立場を支持する主な議論は、長子には卓越性と権威があり、助け手は従属的であり、名前を付けることは権威を示唆するという考え方を含んでいます。しかし、これらの議論を注意深く分析すると、それらが決定的でないことがわかります。

最初に造られた者に権威が与えられるのでしょうか？

最初に造られることがすなわち権威という考え方は、やはり本文に読み込みをしている考え方です。

この個所には上下関係ではなく、不完全さのみが示唆されています。男が最初に造られたのだから、男に優越性があるという考え方は、この個所に押し付けられたものです。

＊最初に造られることがすなわち権威、という考え方は一般的かもしれません。

「助け手」は「劣等性」を意味するのでしょうか？

この個所から男の優越性を論議するもう一つの理由は、彼に「ふさわしい助け手」と訳されている **エゼルクネグド** ということばの使い方によります。

神が上下関係を意図されたという議論を展開するために「助け手」または「助力者」ということばの用い方に伝統的に大きな強調点が置かれてきました。しかしヘブル語のエゼル クネグドということばを注意深く研究すると、そのような考え方は排除されます。

英語の「助け手」ということばは従属性または劣等性を示唆しますが、ヘブル語のエゼルには、そのような言外の意味はありません。この個所で女を指すことばとして用いられているエゼル（助け手）は、旧約聖書で使われている21回のうち15回は神を指しています。その意味は「守り手」（詩篇33:20）と「救出者」（出エジプト記18:4）です。これはエゼルということばの内に潜在的に低い立場という意味が含まれているという考え方を明らかに排除します。実際、イスラエルを生み出し、守り、救い出す、上に立つ御方としての神を描写することによって、エゼルは「劣等性」よりもむしろ「優越性」を示唆するとさえ言えます。但し、それが女を指すときは、「顔と顔を合わせて」、「同等の」、「・・・の前に」あるいは「目に見える」という意味のクネグドということばによって修飾されています。フィリス・トゥリブルが著書「神と性の修辞学」の中で説明しているように、この修飾語こそが、「優越性」という言外の意味を和らげ、アイデンティティー、相互関係、そして平等性という意味を持たせるのです。ヤーウエの神によると、ちりで造られた被造物が必要としているものは、自分の下に来るものでもなく、上に来るものでもない伴侶、すなわち同一化によって孤独を緩和する存在です。」

そこで、この個所で提示されているのは、権威も従属性も排除する、鏡のイメージです。重要なのは、類似性です。不幸なことに、多くの人々によってこの個所に読み込まれている考え方は、「助け手」は従属性を意味するという考え方です。

論説文「女性の働きを支持する」の中で、J. I. パッカーは女性が助け手であるという考え方を、男性が常に事を始める人であり、リーダーであって、女性は常に寄り添う者であり、決して率先して事を始めないということを示唆するものとして用いています。女性は男性に対して責任を取ることも、権威を持つこともできません。しかしこれは、原語のヘブル語エゼルことばの一般的な用い方に基づいていない見方に起因する考え方です。

*J. I. パッカーほどの神学者でも、ましてや「女性の働きを支持する」という題の論説文の中でこのような結論を下しているのは残念です。

男は動物に名前を付けることによって動物に対する権威を実証し、また女に名前を付けることによって女に対する権威を実証したという考え方は、聖書全体を支配する枠組みとして「墮落」を用いる例です。なぜなら、エバは、実際には、墮落の後に名前を付けられたからです（創世記3:20）。ですから、エバの命名を、神が創造において男に権威をお与えになったという根拠として用いることはできません。

*エバは、実際には、墮落の後に名前を付けられたので、エバの命名を、神が創造において男に権威をお与えになったという根拠として用いることはできないというのは、大切なポイントだと思われます。

男がちりから造られたからといって、ちりに劣るわけではないのと同じように、女が男から造られたという事実によって、男に劣るわけではありません。むしろ、この個所が指摘しているのは、彼女のアイデンティティーの本質は、男と「違う」というよりも、男と「同じ」というところにあります。この個所は、女は「私（男）の肉からの肉、私の骨からの骨」と明確に宣言しています。男と女は ---- 動物とは違って ---- 同じ種類の「ひとつの肉」です。

＊「男がちりから造られたからといって、ちりに劣るわけではないのと同じように、女が男から造られたという事実によって、女が男に劣るわけではありません」というのは、「目からうろこ」の指摘です。

ひとつひとつの動物が彼のところに連れて来られたとき、彼は自分の名前と関連していない名前を付けました。動物の本質は彼と異なっていたからです。しかし、女が彼のところに連れて来られたとき、彼は彼女が自分から出たことを認識しました。彼女は同じ質からできていて、人は今や男と女、すなわちイシュとイシャとして認識されました。強調点は、動物とは違って、---- 同じ本質 ---- 一致という点にあります。一方は他方から派生したものです。

この個所を注意深く読むと、アダムがエバに名前を付けたことを、男が女に対して権威を持っていることの裏付けとして用いることができないとわかります。権威という考え方は、前もって決定された意味をその個所に読み込むときにのみ出て来ます。

＊「すでに決定づけられた解釈をテキストに読み込む」ことの危険性が、指摘されています。

（３）罪によって損なわれた関係 - 創世記3:1~24

フェミニストたちは、創世記3:16は女性の従属性の基盤になっているので斥けなければならないと主張します。伝統主義者たちは、この個所が男の権威と女の従属性の基礎であり、それは恒久的かつ規範的であると主張します。

罪が入り込んだとき、人間のレベルでは二つのことが起こりました。彼らがそれまで経験していた一体性は壊されました。---- 彼らはいちじくの葉で自分たちの裸を隠し、神から、そしてお互いから隠れました。そして、与えられていた共同の責任体制が消え、責め合いが取って代わりました。その結果、一人が支配者になり、もう一人が非支配者になりました。罪の結果は、神が人類のために計画しておられた共同体の分裂でした。

＊男の権威と女の従属性は神のご計画ではなく、人間の墮落の結果であるという指摘です。

家父長制度は、必ずしも女性に敵対する社会組織ではありませんが、女性を支配し、搾取するような男性優位の制度を正当化する可能性があります。家父長的なヘブル社会では、神はご自身の民が自らの支配下にある者たち誰に対しても、公平かつ憐れみ深く振る舞うことによって、神の贖いの力を証しするようにお命じにられました。

男も女も呪われてはいなく、ただ蛇と土地だけが呪われている（創世記3:14、15、17b）ことに注目することは重要です。女にとって罪の結果とは、産みの苦しみと、夫を恋い慕うが、夫が彼女を支配することになります。男にとって罪の結果とは、苦しんで食を得ることと、エデンの園から追放されることです。しかし、それらは永久に続くようにと意図されたものではありません。すべての罪の結果がそうであるように、科学、医学、そして人間の憐れみ深い行為に見られる神の一般恩寵と、イエス・キリストの贖いの血潮によって贖われることができます。イエスは墮落の結果を取り除くために来られ、人類も食糧生産と出産の苦しみを軽減するために、確実に協力してきました。女も男の「支配」を取り除くという益を受け、むしろ、「平等の関係と・・・キリストの贖いの恩恵を被る〔生き方〕を楽しむべきではないでしょうか。」

＊罪の結果が科学、医学、そして人間の憐れみ深い行為に見られる神の一般恩寵と、イエス・キリストの贖いの血潮によって贖われることができるということ、女も男の「支配」を取り除くという益を受け、むしろ、「平等の関係と・・・キリストの贖いの恩恵を被る〔生き方〕を楽しむべきではないでしょうか」という発想は新鮮であり、納得のいくものです。

ポイント5．旧約聖書における女性

（1）神の女性的イメージ

神は食糧、水、衣服を用意するというような、ヘブル文化では女性によって担われていた働きをする者として描かれています。神はまた産みの苦しみを経験し、子供の世話をし、母親のように慰め、一般に母親のものとされている感情を経験する者として描かれています。神はまたすべての涙を拭い去る御方です。（詩篇123:1~21; イザヤ63:1, 創世記3:21, イザヤ42:14, ヨブ38:8~9, イザヤ49:13~15）

ヘブル人には女神崇拝は厳しく禁じられていたので、神に対して女性的イメージが記されていることは驚きです。しかし、神に対する女性的イメージは、神が女性であることを意味しません。同様に、神の男性的イメージも神が男性であることを意味しません。男あるいは女として神に言及するのは、ヤーウエに対するヘブル的理解と一致しません。男であれ女であれ、すべてのイメージは形而上学的なものであり、神を性別化する働きはしません。それらは、むしろ、神を人格化し、神が被造物との関係において、どのように行動されるかを表現するものです。性は被造世界の特質であり、「男性的であること」も被造世界の特質です。

＊神を「父なる神」と呼び、イエス・キリストも男性の形を取ってこの世に来られたので、神を男性のイメージとして捕らえがちですが、神はこのように女性的イメージでも描かれています。男女どちらのイメージにしても、神を性別化するものではないというのは大切な指摘です。

（２）旧約聖書における女性の役割

ヘブル社会において、女性たちは祭司職以外のすべての職務に就きました。女性のリーダーシップは、士師（士師記4:4~16）、女王（列王記第二11:1~16）、そして預言者（列王記第二22:8~20、ネヘミヤ6:14）の職務を通して表わされました。

雅歌は、性の同等性を明確に肯定しています。雅歌の中には男性の支配、女性の服従、そして性に対する固定観念は見られません。

箴言31章で描写されている理想の妻は、翻訳者たちがそのように訳してきたので、しっかりした妻、あるいは「良い妻」として知られています。しかしフェイス・マーチンが指摘しているように、彼女はヘブル語で「勇敢な、強い、力強い」という意味のチャイールと呼ばれています。ヘブル語のテキストがチャイールを男性たちに適用するとき、英語のテキストは「勇気ある」または「勇敢な」と訳していますが、女性たちがチャイールと呼ばれているときは、同じ翻訳者たちが「良い」「高貴な」または「貞潔な」ということばを用いています。「これらのことばはどれもその意味においても、その強さにおいても到底チャイールに匹敵しません。強い女性 ---- 誰が見つけることができますか。」

＊先入観に支配された翻訳の問題が指摘されています。

ここで描写されている女性は財産を持ち、夫と家族を養い、気前が良く、自分で生産した商品を持ち、知恵を用いて話したり、教えたり、指導者たちの場所である町の門で賞賛を受けています。

一般の文化が、家庭という限られたスペース以外の所では女性を重んじることがなく、女性に公の場でリーダーシップを取る機会を与えなかったのに反して、旧約聖書の女性たちは神に召され、神から賜物が与えられ、特別な働きのために聖別され、彼女たちの権威は人々から認められたという証拠は十分にあります。確かに、彼女たちは例外的でした。しかし、神の命令が絶対なとき、神は例外をお作りになりません。

＊神に召され、神から賜物が与えられ、特別な働きのために聖別され、その権威が人々から認められていた旧約聖書の女性たちは、遺憾なくリーダーシップを発揮しています。

ポイント6．新約聖書の時代の文化的背景

新約聖書の時代に入っていくとき、イエスの生涯に登場する女性たちは、主に田舎の出身でユダヤ人であったことを覚えておくことが肝要です。

著書「聖書が肯定する女性」の中で、レオナード・スィドラーは「ユダヤ教の中心は、律法であるトーラーの学びと実践であり ---- 男性と女性の立場の違いはここでかなり明確に表わされています。なぜなら、女性は聖書（トーラー）を学ぶことを事実上禁じられていました」と指摘しています。彼はラビ・エリエーザー（ミシュナー3, 4）を引用しています。「トーラーのことは女性が託されるくらいなら、それが焼かれたほうがまだましだ・・・娘にトーラーを教える者は誰でも彼女にわいせつを教えるようなものだ。」

ラビたちは公の場で女性たちに話しかけることも、あるいは自分の妻、娘、または母に挨拶することもしませんでした。女性の役割は家事をきりもりし、子どもを産み、そして育てることでした。男性は妻を離縁することはできましたが、女性は極く僅かな例外を除いて夫を離縁することは許されませんでした。

女性の権利は非常に制限されていて、彼女たちには公の場は与えられていませんでしたが、彼女たちは家庭の中でかなりの責任と影響力を持っていました。しかし、家庭の中でさえ、女性がどれくらいトーラーを教えたか、あるいは教えられたかは定かではありません。なぜなら、彼女たちはトーラーを学ぶことを免除されていただけでなく、「子どもや奴隷と同様にシェマー朗唱、朝の祈り、または食事時の祈りをする義務はなかった（ミシュナー3, 3）」からです。

ラビたちの宣言に様々な違いが見られるという事実から、さらなる混乱が生じてきます。多くのラビたちが女性に対して軽蔑的な発言をする中で、ラビ・ベン・アザイは、男は娘に律法の知識を与えるべきだ、と言いました。ミシュナー・ナゲラム 4, 3 にはこのように書かれています。「彼は息子や娘たちに聖書を教えるのも良い。」

＊リーダーシップを発揮していた旧約聖書の女性たちに比べて、新約聖書の時代の女性たちの立場はかなり限定されたものであったことがわかります。

ポイント7. イエスの教えと模範

イエスは、このように女性に対して相反する態度を持っていたユダヤの社会に入って行かれ、新しい価値、新しい態度、そして新しい習慣を備えた新しい枠組み（パラダイム）を啓示なさいました。

＊当時のユダヤの社会の文化的背景を思う時、イエスが示された新しい価値感が如何に画期的なものであったかがわかります。

（1）イエスに香油を注いだマリヤ - マタイ26:6~13

ここで観察すべき重要な点は、イエスが、弟子たちが自分たちの霊的な理解がマリヤの理解よりも優れていると決めてかかっていることを非難しておられるということです。多くの学者たちはマリヤを「イエスの死の意味を理解した最初の人」として位置づけ、「彼女がイエスに気前良く振りかけた高価な香油は、イエスの埋葬のための彼女流の備え方だった」としています。

(2) 「汚れた」女性とヤイロの娘 - マルコ5:22~42

この個所では、イエスは伝統的なユダヤの規則を破りました。「汚れた」女性がイエスに触れたとき、イエスは彼女に話しかけ、彼女を受け入れ、彼女を癒して送り返し、ご自分が神殿に行く前に清められなければならないという儀式を無視なさいました。その代わりにイエスはもう一人の女性、ヤイロの娘を死から甦らせるために進んで行かれました。イエスは女性たちに対して全く違う評価をしていた文化の中で、女性に内在している価値だけでなく、尊厳、榮譽、そして尊敬を与えました。

(3) 離縁 - マルコ10:11~12

イエスの時代においては、妻に対する姦淫など聞いたこともなかった上に、男は妻を離縁することができても、女は夫を離縁することができなかったのも、イエスのこの宣言は非常に過激だったことでしょう。離縁に関する規則は申命記24:1~4に述べられています。スィドラーは「イスラエルにおいては、男が女を所有し、その逆は無かったので、男が女を手放す ---- すなわち離縁する ---- ことはできても、女は男を離縁することができませんでした」と述べています。

(4) サマリヤの女 - ヨハネ4:7~42

イエスと一個人との会話で、記録に残されている最も長いものは女性 ---- サマリヤ人 ---- とのものです。イエスは社会の底辺の人々 ---- ツァラートに冒された人々、足萎えの人々、盲目の人々、そして女たち ---- を一貫して尊厳と敬意をもって扱いました。そしてこの個所の場合、自分の夫でない男といっしょに住み、かつサマリヤ人である女に話しかけることによって、イエスはすべての禁止事項を破られました。イエスはこの女性を「霊的な洞察のできる」者としてご覧になりました。「(この女)をご自分の最初の伝道師としてお選びになることによって、この世が受け入れる基準は、キリスト教の働きにおいては決定的な要素ではないことを明らかになさいました。」

イエスは、「女が男と同様に完全に神のかたちに造られた人間である」と書かれた看板を持って通りの角に立つようなことはなさいませんでした。イエスをご自分の行為 ---- その行為自体がショッキングであり、重要であったので記録され、残されました ---- を通して伝統的な視点を率直に、そして静かにひっくり返されました。

＊女性に対するイエスの教えと模範のいくつかを見ても、イエス様の態度が当時の男性の態度と明らかに違い、女性に尊厳を与えていたことがわかります。

ポイント8. パウロの教え

イエスと関わりを持った女性たちとは対照的に、パウロの書簡に出て来る女性たちは主に都会人でした。ある者たちは明らかに裕福であり、多くの者たちは異邦人で、彼女たちの宗教的な礼拝や体験は異教のものでした。

会堂はキリスト教徒というよりユダヤ教徒の礼拝所であり、多くのキリスト教徒はそこで礼拝を捧げ続けましたが、彼らにとって礼拝の中心となる場所は家庭でした。それゆえ、今日、多く文化の中で私たちが経験するような教会と家との明確な分離はなかったことでしょう。その結果として、パウロが書簡の中で語りかけの対象を礼拝の共同体から家族・親戚に移行するのは極めて自然なことです。

(1) 差別の撤廃 - ガラテヤ 3:27~29

これは、人種、性別、階級の垣根はキリストに在ってすべて壊されたという、自身の主張を例証するためにパウロが用いた、初代教会で使われていたバプテスマ信条であったと考えられています。パウロは、大方の人が結論づけたのとは全く対照的に、男と女の一体性の具体的な広がりを見ていました。ガラテヤ3:28における彼の主張は、キリストに対する信仰は「神との新しい関係をもたらし、それにはすべての人類を包括する、ユダヤ人と異邦人、奴隷と自由人、男と女という信者同志の互いの新しい関係を伴っている」ということです。

F.F. ブルースはこのように言っています。「もし、異邦人がユダヤ人と同じくらい、そして奴隷が一般市民と同じくらい自由に教会の中で霊的な指導力を行使してよいなら、女性が男性と同じくらい自由に行使して何か不都合があるだろうか。」

*これに対して、私たちはいったいどのように反論できるでしょうか。

(2) からだに関する権利 - コリント人への手紙第一 7:4

この箇所には、夫と妻が自分たちふたりに関わる決断をいっしょに下す例が挙げられています。この箇所は結婚生活における権威についての革新的な教えから始まります。妻のからだは夫に属するという教えには何も新しいことはありません。しかし、「同様に夫のからだは妻に属する」というのは、全く新しい教えを導入することになります。その後、もし性的関係を保留したいのなら、それは両者の合意に基づいてなされなければならないという適用が極めて明確になされます。

これは、行き詰まったとき、必然的にひとりの人が決断しなければならないという考え方を否定するものです。もしパウロが男女の最も親密な関係において同意が存在しうると教えたのであれば、決断はパートナーシップによるのであって、上下関係によるのではないという考え方を強調していることになります。

*「パウロが男女の最も親密な関係において同意が存在しうると教えたのであれば、決断はパートナーシップによるのであって、上下関係によるのではないという考え方を強調していることになる」という論理が成り立つとすれば、男女間のパートナーシップという重要な考えを打ち出すことになります。

(3) 頭と権威 - コリント人への手紙第一 11:2~16

この個所はしばしば女性を制約するために用いられますが、実は、性の役割についてではなく、礼拝儀式についての個所であることを覚えておくことは重要です。「パウロは秩序の問題を取り扱っていたのであって・・・世の終りまで教会が守るべき基準を制定していたのではありません。」

＊この個所は、性の役割についてではなく、礼拝儀式についての個所であるというのは大切な指摘です。

この個所は男女が共に賜物を用いていることを前提にしています ---- ここで問題にされているのはどのようにしてそれをすべきか、ということです。この個所の文脈は、霊の賜物は愛をもって、一致のために用いられるべきである、ということです。

「頭」を意味するギリシャ語ケファレーは、この個所に13回出て来ます。釈義の問題は「頭」が権威を示唆するのか、それとも源を指すのかに関わって来ます。

西洋の生理学では、脳が体を支配するという事実から、「頭」は「支配者」を意味すると提議します。しかし、マーティンは、ギリシャ人の生理学の理解は違っていたと主張します。「彼らは心が知性の所在する場所で、頭は命と命の液のだと信じていました・・・それでゼウスが（アテナに）生を授けたとき、（彼女）は彼の頭から飛び出して来ました。父は彼の子どもの頭と呼ばれました。それは父が子どもの命の源であることを意味します。」

「聖書的視点に立った男と女」の著者ジェームス・ハーレイに代表されるような伝統主義者たちは、頭（ケファレー）は当然権威を意味するという正反対の主張をします。しかし、聖書解釈学の原則は一つのことばに一つ以上の意味があるときは、正しい意味は外から持ち込まれるべきではなく、文脈の中で決められるべきである、ということです。この場合、文脈は明らかに源または起源という意味を指し示しています。「男は女をもとにして造られたのではなく、女が男をもとにして造られたのです。」パウロは9節「男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです」において、そしてまた12節「女が男をもとにして造られたように」において、創造について語っています。しかし、彼はその同じ節において、男と女の相互依存（「同様に、男も女によって生れるのだからです」）を指摘することによって、全体のバランスを取ります。それから彼は、すべてのものは神に由来する（「すべては神から発しています」）と言うことによって彼の議論を完成させます。

ケファレーを「源」として理解するのに有利なもう一つの議論は、ヘブル語の「頭」ということばが支配または権威を意味したとき、七十人訳の翻訳者たちは、ケファレーではなく、ギリシャ語のアルコンを用いました。それはギリシャ語のケファレーは「権威」に用いられた通常のことばではなかったことを示します。

それゆえ、パウロの比喩の理解（コリントの人たちが理解した唯一のものだと思われます）は、「源」としての、特に「命の源」としての頭です。

＊これは、かなり斬新な解釈で、神学的な論争を呼ぶことでしょう。聖書解釈学の原則に則って、厳密且つ柔軟な議論をして欲しいものです。

（４）沈黙の意味 - コリント人への手紙第一 14:26~40

この箇所は、実際は預言をする時の規則、あるいは規制について取り扱っているのですが、しばしば文脈を無視して引用されるので、教会内の実践において矛盾が生じます。

もし、「教会では、妻たちは黙っていなさい。彼らは語ることを許されていません」ということばを字義通りに取るなら、女たちは賛美することも、報告をすることも、会衆の祈りや交読に加わることも、祈りの課題を出すことも、教会学校で教えることもできないはず。他の箇所については字義的な解釈を主張する人たちでさえ、多くの人はこの箇所をそれほど字義的には取りません。むしろ、パウロのことばは、礼拝、教育、礼拝の司会、あるいはことばを発する必要のない聖餐式において、女性がいろいろな形で関わるのを阻止するために用いられてきました。

＊この箇所を字義通りに受け止めることの滑稽さと、そうしないことの矛盾の両方が指摘されています。

ブルストゥが注意深く解説しているように、パウロがこの箇所で用いたことばは意義深いものです。

フィモオということばは強制された沈黙を指します。例えば、イエスが荒れる海を静めたとき、汚れた霊を静かにさせたとき、パリサイ人たちを黙らせたとき・・・もう一つのことば、ヘスキア、は女が静かでよく従う心をもって（テモテへの手紙第一2:11~12）静けさのうちに学ぶべきであるというときに用いられる沈黙を指します・・・しかし、この箇所では、パウロはシガオ——自発的な沈黙を用います。それは、弟子たちがイエスの山上の変貌について沈黙を守ることを決めたときに用いられたことば（ルカの福音書9:36）、そして、イエスが、もし、弟子たちが黙る（シガオ）なら、石が叫び出すであろうと言われたときのことばです。それはまた、裁判の最中のイエスの沈黙に対して用いられたことば（マルコの福音書14:61）であり、使徒たちや長老たちがパウロとバルナバによる報告を聞いたときの彼らの沈黙に対して用いられたことばです（使徒の働き15:12）。それは意図的に選んだ応答のかたちです。または、他の人が話すことができるように静かにしてください、と頼むときのお願ひにもなりえます（使徒の働き12:17）。それは、無秩序と騒動の最中に要求されるたぐいの静けさです。

＊パウロがこの箇所で用いたことばは、自発的な沈黙を意味するシガオであ

るということは、パウロの女性に対する態度を測るのに重要です。

ブルストウによるとギリシャ語には「話す」と訳すことのできることは30あります―― あるものは宣言する、言う、語る、教えるを意味します。しかし、もしあなたが「お祈りの間は話さないでください」と言いたいのなら、その動詞はラレオでなければならず、それがまさにパウロが用いたことばです。パウロの教えは礼拝の中の秩序と関係しているので、パウロが彼らに話をしないように ――― 礼拝中に話し続けないようにと――― 言っているのは明らかです。

パウロが「あなたがた女の人たちはいつも黙っているべきなので、質問をすることを止めるべきである」と言っているはずはありません。なぜなら、それは同じ教会の中での祈りや預言に対する前述の規定と矛盾するからです。しかし、彼が次のように言っている可能性はあります。「あなたたち女性はうるさくなり過ぎているので、静かにしているべきです。」これは誰であっても礼拝を混乱させてはいけないという一般原則が破られているときに、特殊な状況に対して語られているのです。その特殊な状況というのは、コリントの教会の女性たちが質問をすることによって礼拝を妨げていたということです。

おそらく、ここコリントの教会では、女性たちが教育を受けていなかったもので、彼女たちの質問は初歩的なレベルであり、礼拝を中断する必要はなく、教師たちに従い、家で学びの過程を始めるべきでした。彼女たちの学びが進むにつれて、彼女たちの質問は歓迎されるものになったでしょう。

書簡の全体は礼拝の秩序に関わるものであり、その文脈の中で、まだ礼拝を混乱させるようなかたちでしか質問することができなかった女性たちに対して、パウロが「話すことを止めなさい」と言ったと取る方がより適切だと思われます。

しかし、パウロはいつすべての状況において、すべての女性たちを黙らせているのではありません。テモテへの手紙第一2:11におけるパウロの命令は「女は教えを受けなさい」です。質問をすることは学習の基本的な方法です。ここでパウロは、不適切な質問に見られる妻たちの聖書教育の欠けに対して、夫たちは積極的な役割を果たすべきであると助言しています。

この個所における教えは、礼拝における自制と適切な行為に関してです。それは、キリスト者の共同体が、もともと改宗者たちが属していた異教のカルトのように見えて、結果的に福音の伝達の妨げになることを避けるためです。

パウロは女性の沈黙ではなく、礼拝における秩序の原則を打ち出しているのです。

＊パウロの教えの中でも最も物議を醸してきた、「女性に要求される沈黙」も、以上の解説によるとパウロは女性の沈黙についてではなく、礼拝の秩序を教えていることがわかります。

(6) 服従の意味 - エペソ人への手紙 4:15~16

この個所の文脈は、妻の服従と夫の支配ではなく、相互の服従です。ギリシャ語では、21節で使われている服従ということばの動詞形は22節では繰り返されてはいません。字義的な翻訳は次のようになります。「キリストに対する畏れをもって互いに従いなさい。妻たちは主に対するように夫たちに対して。」 妻の服従は ---- 互いの ---- 相互の服従から切り離すことはできません。

パウロは、夫が妻に示すべき愛は、キリストが教会のためにご自身をお与えになったように、自分のいのちを差し出すまでの、夫の側の服従を含むところの愛であると述べて、相互の服従の概念を続けます。

「従う」ということばは、妻に関しては用いられてはいなくて、むしろ、子どもや奴隷に対する上下関係に用いられています。夫に対する命令のどれ一つ取っても支配について語っていません。命令はすべて、妻を建て上げることを強いています。

ビレズィキアンは、服従の一般的な意味は「自分自身を上の権威の下に従わせることであり、地位的に、あるいは立場的に上の人願いに沿って方向性が定められることに頼り、(または) 支配に委ねることです」が、この個所では意味は全く違うものに変えられていると論じています。「互いに服従する」ということは「他の人に服従する」ということとは全く違う関係です。ビレズィキアンは続けて言います。

互いに服従するということは、同等の立場の人たちの間のみで可能です。それは、互いという代名詞を含まない服従の概念の中で暗黙のうちに語られている一方的（一方通行）な服従を排除する、相互（二方向）の関係です。相互の服従は、下の者に対する支配者の上からの優越性なく、(むしろ) 同等と立場の人たちの間の水平線的な人間関係を示唆します。

＊夫と妻の相互の服従が、妻が夫に従う大前提としてあることは、押さえておくべき点です。

もしパウロが伝えたかった概念が通常の従順であったなら、彼が使うことのできたことばがいくつかあります。彼は奴隷に関してはギリシャ語のヒュパクオー（エペソ人への手紙6:1）を用い、子どもに関してはペイサルケオー（エペソ人への手紙6:1）を用いています。ブリストウは、パウロがこれらのことばのどちらも使わなかったことは、妻を、子どもや奴隷と同じように男の権威の下に置くギリシャの哲学者たちとは違って、パウロにはそのようにする意図が全く無かったことを示すと指摘しています。

パウロはもう一つのことばヒュポタツソーも使うことができました。そのことばは能動態では、「支配する」という意味になります。パウロはそれを

神がなさることについて語る時にのみ用いています。パウロは夫が妻をヒュポタツソーするには命じていません。その代わり、ヒュポタツソマイという中性形を用いることによって、パウロは妻たちが自発的に夫たちに従うようにと訴えています。その性質上、自発的に行なうものを求めているので、ヒュポタツソマイは「忠誠を尽くす」と

か「必要に答える」「支える」または「応答する」という意味になります。同様に、パウロは教会員たちに互いにヒュポタッソマイするように訴えました。これは支配者と被支配者というランク付けをするのではなく、教会に対してその構成メンバーが「キリストのからだ」としての召しを具体的に生きようという端的な訴えです。教会にとって真実なことは、結婚においても真実であるとパウロは付け加えました。

＊ギリシャ語の用法から、この箇所の意味は、夫が妻を「支配」し、妻が夫に「服従」するのではなく、妻が夫に「自発的に忠誠を尽くす」、「必要に答える」「支える」または「応答する」という意味になるというのは、とても納得がいく説明です。

(7) キリスト者の行動 - テトスへの手紙 2:1~10

この箇所のメッセージは、キリスト者の行動について教えられていることは、健全な教理の教えに従ってなされるべきである、ということです。信仰と行動は一致しなければなりません。未信者はキリスト者の行動を注視しています。もし、キリスト者の行動が教えと一致すれば、神のことは敬われ、そうでなければ、神のことはそしられます。これがどのように実践されるべきかは、奴隷たちにとってそうであったように、女性たちにとって、文化的な問題です。パウロが奴隷たちに対して、キリストの品性を表わすように生きingことを求めたとき、パウロは奴隷制が神によって定められた制度だと示唆しているのではありません。また、パウロが女性たちに対して、彼女たちの文化の期待の中で、キリストの品性を表わして生きようにと教えたとき、パウロは彼女たちが家に居て、若い女性たちを教えるだけに留まるようにという原則を打ち出しているのではありません。彼女たちはその時代の文化的標準の中でキリストにある命と矛盾のない生活をすべきでした。

ポイント9. 歴史における女性に対する見方

(1) ユダヤ教における女性に対する見方

旧約聖書のユダヤ教の世界において、女性はかなり重要な指導的立場を持っていましたが、大多数の人の女性に対する態度は否定的なものでした。スィドラーの記述（「聖書が肯定する女性」）によると、女性は公の場で祈りに参加することは許されず、会議の定足数には入れられず、子どもや奴隷と同類視され、神殿において入ることができたのは異邦人の庭と婦人の庭に限られ、通りでは男性の挨拶を受けることができず、法廷では証言することができず、出産時に死ぬのはアダム之死をもたらしたことの罰だというラビの教えに耐えなければなりませんでした。

(2) 初代教会における女性に対する見方

女性の位置づけは、イエスの到来とイエスの十字架処刑後に神殿の幕が裂けたことにより劇的に変化しました。

裂けた幕は、神の御霊はもはや一個所に臨在するのではなく、人々の中に住まわれることを意味します。神の民は移動式天幕、すなわち神の聖所になりました。御霊が至聖所から出て来られたとき、至聖所と聖所の間の隔てが大きく後退しました。神は、特別に選ばれた祭司を排除して、聖所から祭司の庭に出て来られます。それから、神がイスラエルの庭に出て行かれることによって、祭司と一般の人の間の境は完全に取り去られました。神が婦人の庭に出て行かれたとき、男と女の壁は取り払われました。そして最後に、異邦人の庭に到達されたとき、最後の門はついに倒れます。聖霊が神殿の一番奥の聖所から周辺の庭へと外に向かって移動されたことは、イエスが地上において、異なる種類の人々と関わられた時に持っておられた優先順位を象徴しています。

＊裂けた幕の解釈を、「イエスが地上において、異なる種類の人々と関わられた時に持っておられた優先順位を象徴している」とするのには、議論の余地があるでしょう。

教会はその揺籃期において、女性が神からの召しに応答して奉仕に参加する自由を与えることにおいて、大きな前進を遂げました。

（3）二、三世紀の教会における女性に対する見方

初期の教父たち（特に、テルトゥリアヌス、アウグスティヌス、アンブルシウス、エピファニウス、アクィナス）に女性の位置づけの理解に関する方向付けを仰ぐとき、彼らの歴史記述は、彼ら自身の思考の枠組みに影響されていることを認識しなければなりません。

初期の教父たちは、女は霊的に劣っていると本気で信じていたので、女に権威を与えるということは殆どしませんでした。彼らは、女が神のかたちに造られたということを大まじめに疑っていました。この信念は、ある人々の間に、その後も存在していましたが、反対者たちはそのような区別をしませんでしたので、女も男と同じように殉教死を遂げました。紀元203年、21歳だったペルペチュアは、北アフリカのカルタゴで殉教しました。彼女は投獄されているときに日記をつけていました。その日記は、女性によって書かれた最初のラテン語の文だとされています。彼女の人生と著作は、後の説教者たちに感動を与えましたが、彼らは死に直面したときの彼女の忠実さを、彼女の「男らしい」特質のゆえだとしています。

テルトゥリアヌス（紀元160-225）は、女は欺き、誘惑する者であり、エバの娘たちは悔い改めの衣をまとうべきであると教え、また人類の苦しみは女の責任だと責めました。

エピファニウス（紀元315-403）は「女はだまされやすく、弱く、理解力があまり無い」と言いました。・・・アンブルシウス（紀元339-397）は、女が信仰を持つ時は、女の性質は消え、男の性の徳を帯びると教えまし

た。・・・アウグスティヌス（紀元354-430）はペルペチュアについて説教をし、彼女の魂の男らしさは、彼女の肉体が女であることを覆い隠すと述べました。彼はまた、「女は肉なるものを、男は霊なるものを象徴する」とも言いました。

アウグスティヌスは結婚している女性には少し有利な立場を与えました。

女は夫と共にあるときに、神のかたちです。ゆえに、夫婦合わせてひとつのかたちです。彼女に、女にだけ属する、助け手という立場が与えられるとき、彼女は神のかたちではありません。しかし、男に関して言うなら、彼は、女と夫婦であるときと同様に、ひとりでも完全に神のかたちです。

紀元584年、フランスのリヨンにおいて、63人の司教と代表者たちが、「女は人間か」という問いに対して投票し、32対31の一票差で、女は人間であると宣言されました。

女に対して否定的な声が多い中で、女の側に立ったのはアレクサンドリアのクレメンスでした。彼はテルトゥリアヌスと同時代の人で、紀元203年に迫害で追放されるまで、アレクサンドリアのクリスチャン・スクールの校長でした。彼は男も女も同じように「哲学的考察をすることができる」と主張しました。

＊二、三世紀の教会における女性に対する見方がこれほど低かったとは驚きです。

ブリストゥは、初代教会の教父たち、特に、アウグスティヌスの書いたものが、後代の人たちの考え方に影響を与えたと主張しています。なぜなら、彼らが教育を受けたギリシャの哲学的思考法に影響を受け、男性の指導者たちは「性的な偏見を持っており、その結果、当然ながら、パウロの書いたものを同様な発想で解釈するとようになりました。」ついに、

「教会の中で支持を得たのは、パウロが説いた模範（モデル）ではなく、パウロより5世紀後の異邦人の哲学者〔アリストテレス〕がキリスト教の聖所や寺院でパウロのことばを引用して説いた模範（モデル）でした。パウロのことばは文脈を無視して翻訳され、その結果、パウロが教会のために熱心に求めたもの、すなわち、キリスト者の間の性の平等性というパウロが掲げた理想には何の言及もありませんでした。

パウロが提唱し、次第に初代教会で実践され始めた模範（モデル）は、周囲の文化の哲学によって組織的に破壊されました。その後、パウロが抱いた性の平等という理想は、教会の中で致命的な一撃を受けました。

女性に関するこの異教的な見方は、ローマの文化を通してキリスト教に影響を与えました。遂には「教会の大黒柱である教会の正典が女の立場を男の権威の下に置くことを制度化しました。」

＊パウロの教えと思われていた女性に関する教えが、実は初代教父による解釈の結果であったということは注目に値します。

（４）中世における女性に対する見方

性の平等というパウロの理想の敗北は、トマス・アキナス（紀元1225～1274）の文書において最高潮に達しました。アキナスはアリストテレスの女は「欠けがあり、間違っで生れた」という考えに同意していました。この頃までに女性の軽視は、使徒パウロのことばのアキナスによる解釈に基づいて、完全にキリスト教の神学に取り込まれてしまいました。

聖ボナVENTOURA（1217-1274）は、アリストテレスの、害に満ちた意見に同意して女性を非難しました。また、ドンス・スコトゥス（1226-1308）は「女性を聖職に任命することには益もあるが、キリストはそうにお考えにならなかったの、それらの益は論外だと結論づけています。」

＊中世において、使徒パウロのことばのアキナスによる解釈に基づく女性の軽視が、完全にキリスト教の神学に取り込まれてしまったという流れが、その後の歴史に与えた影響の大きさを思います。

マルチンは、中世において、女性に対する二つの相反する考え方があったと指摘しています。

女は誘惑者エバの娘として軽蔑されると同時に、処女マリヤの伝統の中で崇拜されていました。・・・大多数が修道僧でしたが、作家たちの残した書き物によると、彼らは女性の性の真の模範としてエバまたはマリヤ礼賛しました。礼賛することは女性の真の性質を理解することだと主張しています。

（５）現代における女性に対する見方

マルチン・ルター（1483-1546）は「女は家に留まり、静かに座り、家事をし、子どもを産み、育てるべきです・・・もし女が弱り、ついに出産時に死ぬようなことがあるなら、それはかまいません。そのまま死なせなさい。彼女はその務めのためにいるのですから」と宣言しました。彼は、女は神の素晴らしい作品であるが、〔女は〕「男に比べて名誉と尊厳の両者において劣って造られた」と主張しています。しかし、彼は男性がいない場合には女性が公の場で奉仕する可能性を開きました。「そのような場合、女性が説教をするのも必要かもしれません。」

＊宗教改革者として尊敬されるマルチン・ルターがこのようなことばを残しているのは、彼もやはり時代の子だったということでしょうか。

チャールズ・ホッジ（1797-1878）は女性を「知識、義、そして聖化」において、男性と平等であると見ました。しかし、「神の権威」においてはそうではありませんでした。女性は支配する者としてではなく、男性に服従する者として神の栄光を現わすように造られています。

ジョン・カルバン（1509-1564）が、それは「第二等」ではあるが、女も、事実、神のかたちに造られたと宣言したとき、平等に向けて大きな一歩が踏み出されました。

＊「女も神のかたちに造られている」という、今日では当然のように受け止められていることも、歴史の中でこのような一歩を踏み出した結果であるのは感慨深いものがあります。

修道院に対する否定的な見方とともに、宗教改革は女性に対して伝統的な妻と母の立場しか与えませんでした。・・・そして、信徒としての奉仕は厳しく制限されました。このことは、「男性には意味深いフルタイムの働きという機会が提供されましたが」、独身女性は「結婚という彼女の人生に霊的な意味を与えうる唯一の関係を欠く」ということを意味します。

女性たちは、1800年代の初期から中期にかけて、信仰復興と奴隷制度廃止運動における指導者でした。彼女たちは、女性による説教を含めて、教会と社会における女性のより大きな機会と権利を主張し始めました。チャールズ・フィニー（1792-1874）は「女性を沈黙させる教会はその力の半分を奪われている」として、女性が公の集会で祈ることとあかしをすることを許し、大騒ぎを引き起こしました。

＊女性が公の集会で祈ることとあかしをすることが大騒ぎを引き起こすとは、隔世の感があります。それと同時に、時代によって、聖書の解釈がかくも違うものかと改めて思われます。

（6）現代における女性の位置づけ

マーティンが述べているように、「（女が）神のかたちに造られていることを否定されるのは、人間に対する神のご計画から除去されることを意味します。」今日、女は神のかたちを帯びていないという異端は排除されていますが、彼女たちの教会内における立場には大きな変化はありません。マーティンは次のようにも述べています。

女性は、少なくとも神学的には男性と同等の立場を与えられています。

（しかし）実際面においてはそうではありません。・・・神の目にはあなたと私は同等ですが、人の目にはそうではありません。

＊このことばに対する反応は、国によって、文化によって、教会によって異なるでしょう。

男性優位に固執する人たちに対する応答として、W. ワード・ギアスキーは「女性の位置づけについて伝統的な立場を取る人たちが当然だと思っているほど聖書の証言は明確ではありません」と書いています。彼は更に、世の中にはいろいろな役割や機能があるが、「聖書を用いて女性を・・・男性より低い・・・とするのは、神のことばの最も歪んだ用い方です」と言っています。

＊このことばは、この研究資料の立場をサポートするものです。

歴史を通じて、その時その時の状況が、キリスト者がどのようなライフ・スタイルを通して自分の霊性を現わすかという考え方に影響を与えて来ました。初代教会においては、キリスト者は信仰の故に殉教死したとき、殉教死は霊性の最高の模範であると見られました。コンスタンチヌスがキリスト教を合法にして、キリスト者がもはや殉教死を遂げなくなったとき、女性にとって、修道院が神に献身していることを現わすための選択肢になり始めました。教会が祭司に結婚を許すことにしたとき、牧師夫人になることが多くの女性が求める理想となりました。宣教活動が始まると、女性たちが自分の愛と情熱現わすための別の扉が開かれました。そして、それが理想の霊的な模範となりました。

＊このように言い切れるかどうかはわかりませんが、人の考えや理想が時代の空気に影響されることは事実でしょう。

ポイント9. フェミニズムに関連する考え方

フェミニズムは、吟味を必要としている階級制度や、教会の中における女性の位置づけ、神の特質と教会の特質についての教えに関して疑問を投げ掛けています。決まり文句の答えは十分ではありません。フェミニストの中にはアンチ教会の人もありますが、真剣に真理を求めている人もいます。自らをフェミニストと呼ぶ人たちをひと括りにまとめ、みな同じことを信じていると思い込むのは間違っています。自らをフェミニストと呼ぶ人たちが聖書に向かうとき、様々なアプローチを取りますが、その人たちと意味のある対話をするためには、その違いを理解する必要があります。

フェミニズム：男性優位の社会における男性と女性の平等な権利、平等な地位、平等な機会の確保に向かう動き。

フェミニスト：社会、家庭、教会において、性別に基づいた役割を排除することに賛成している男性、または女性。この枠の中にはいろいろな信仰の人がいます。

女の神や女神礼拝に関わっている異教の人たちもいます。フェミニズムについて議論する際に、神、啓示、宗教を排除するヒューマニストもいます。キリスト教の枠組みの中で考え、聖書記者たちは視野が限られていた時代の子であったと信じる人たちもいます。彼らは女性につまずきとなるようなものはすべて変える解釈学を用いるかもしれませんが、聖書には権威があり、そのように理解されなければいけないと信じていても、同時に、社会、教会、そして家庭における性別に基づいた役割を廃棄するというフェミニスト的な考え方を

取り込む人たちもいます。一般的に言って、聖書的な視点から女性の役割を理解しようとするフェミニストたちは、次のように議論します。

男女平等は聖書の中で肯定されていました。

イエスはフェミニストでした。

女性の従属性は罪の結果です。

ガラテヤ人への手紙3:28は神の前における霊的な立場に限定されず、社会におけるその立場の実践に言及しています。

男女の相互服従はエペソ人への手紙5:21~24で教えられています。

頭は「権威」ではなく「源」を意味します。

パウロは一つのことを教え、別のことを実行するわけではありません。

聖書は、役割は性別ではなく、賜物に基づいている、と教えています。

＊急進的なフェミニストの立場に距離を置きつつも、その立場を理解することは大切だと思われます。

ポイント11. 賜物に関連する考え方

大宣教命令は、女性と男性の両者を含む教会全体に与えられました。聖霊は「弟子を作り、教え、洗礼を授ける」のに必要な賜物を男性にも女性にも与えて働きに備えます。その備えはリーダーシップ、教育、またはミニストリーのどの分野であっても、権威を含みます。しかし、その権威は誰かの上に振るう権威ではなく、みことばと聖霊の権威です。結果として、

賜物は性差に関係しません。

特別な召しは性差によって決定されません。

性差や立場の違いは問題ではありません。霊的な献身こそが大切なのです。

真の祝福は既婚の男女と同じように、独身の女性や子供の

いない女性にも与えられます。

神が男と女を創造したとき一致を望んでおられました。

真の一致は階級制度を否定します。

神に従う者の尺度は、律法ではなく、愛です。

＊これが「性差と賜物」に関する、この研究資料の考えと立場です。

ポイント12. リーダーシップに関連する考え方

私たちはリーダーシップに関して何を信じているのでしょうか。どのように定義するのでしょうか。

リーダーシップの役割は：

- ビジョンを打ち出すこと
- そのビジョンを達成するために人々を動員すること
- 指導者を開拓すること
- 指導者を増やすこと
- 男性も女性も賜物に応じて有効に働けるようにすること
- それぞれの働きに就けるように助け合うこと

協力型リーダーシップは聖書的模範（モデル）です：そのリーダーシップは能力を与え、志気を挙げ、力を与えます。そのリーダーシップは支配的ではありません。

霊的なリーダーシップは

「キリストの性質を体現し、
キリストのビジョンを自分のものとし、
キリストの民に力を与える」

女性たちはこのようなことができます。女性は神のかたちに造られているので、男性と同じように神の愛を反映することができます。力や権威ではなく、愛こそが聖書的なリーダーシップの本質です。新約聖書の典型は、数人の長老たちによって共有されたリーダーシップが普通だったようです。

女性はどうような場合でも異なった視点を持ち込むことができるので、リーダーシップ・チームに加わるべきです。女性が異なった視点を持ち込むことができるのは、その性によるのではなく、その異なる経験によります。「もし、そのような立場を与えられるなら、女性がそのチームを指導するか否かにかかわらず、そのチームに女性が全くいないなら、それはまさに不十分です。」

教会は、女性がリーダーシップに持ち込むユニークな資質を必要としています。そして、このユニークな資質を活用するためには、教会のリーダーシップのスタイルは変わる必要があります。また、女性が女性であるという理由でリーダーシップから排除するということは、教会を貧弱にすることに他なりません。女性は、神が教会に与えようとしておられる賜物の少なくとも半分を持っています。

リーダーシップは権威や力についてではありません。キリストの弟子であり、人々をキリストに引きつけることです。また責任についてです。それは「わたしの羊を飼いなさい」という教えについてです。

*これが「リーダーシップ」に関する、この研究資料の考えと立場です。

ポイント13. 文化的制約に関連する考え方

パウロが「キリストにあっては男子も女子もない」と言うとき、彼は私たちが実践することを期待されている原則を述べているのです。その原則とは、文化の中で発展してきた、また罪の結果である区別をキリス

トがすべて取り払うために地上に来られたのです。これは創造の秩序に私たちを連れ戻す宣言です。階級制度を作り上げるのではなく、排除する宣言です。

文化が神学を決定づけるのを拒否するのと、福音のために文化に敏感であるのには違いがあります。

一つの文化の中でキリストにある自由をどのように行使するかというのは重要な問題です。ここで、パウロの勧告を適用することができます。キリストにあつて与えられている自由のゆえにすべてのことがゆるされていますが、すべてのことが有益ではないのです。女性がどんなかたちであれ、主の働きから除外されるべき神学的根拠はなく、彼女たちに自由や権利が与えられても、彼女たちには、他の人たちがつまづかないようにという配慮から、その権利を行使しないことを選ぶこともできるのです。この時点で、女性が生きているその文化を考えなければなりません。（コリントの教会ではこれが問題だったのです。）文化には人種、性別、言語、経済力に加えて、支配の文化が含まれます。

ここが、真の謙遜とサーバント・リーダーシップが顕著になるところです。もし、女性が信仰の共同体だけでなく、広い意味での共同体に仕えようとするなら、彼女たちは個人的な自由と共同体への服従、伝統に挑戦することと互いを尊重することの間で微妙なバランスを取らなければなりません。境界線を越えることなく、新しい地を開拓し、戦闘的に攻撃することなく現状を拒否する必要があります。彼女たちの奉仕の実践が、権威を振りかざそうとする人たちによって制約されるのではなく、神によって導かれていると感じるなら、そして、奉仕が性の故に排除されているのではなく、自らの選択によって限定されていると意識しているなら、男性と同じように女性もこのような文化的な問題に関して敏感になることができます。

＊「性差と賜物」と「リーダーシップ」に関する、この研究資料の考えと立場を明らかにした上で、固有の文化の中で賢く振る舞うことが奨められています。

ポイント14. 現状から幻（ビジョン）へ

私たちは何を達成しようと願っているのでしょうか。異なる文化には異なる目標があります。

- （1）資格のある女性の任職を許可するために、教会内規を変えること
- （2）女性の視点が決断に反映されるために、教会の役員会の女性の数を増やすこと
- （3）若い女性が成長し、より多くの責任を引き受けることを励ますようなメンターの組織を作り出すこと
- （4）傷つけ合い、相手を軽んじるのではなく、助け合い、育て合うような共同体を立ち上げること
- （5）女性のリーダーシップの良い模範を発見すること
- （6）女性たちに読み書きを教えること
- （7）教会の中における女性の経済的奴隷を廃止すること
- （8）女性たちの土地の保有権を弁護すること
- （9）女性たちの相続権、経済的権利、法的権利のために戦うこと

＊この研究資料が机上の学びに終わらず、信仰の共同体に対して描く、幻（ビジョン）に向かうための具体的な目標が掲げられています。この研究資料が1992年の世界福音同盟女性委員会に世界各地の代表からの要望として作成されたことを思い出す時、それぞれの国の必要を満たすためのこのような目標が掲げられることも肯けます。

ポイント15. エピローグ

私たちは共同体を分解するような世界に住んでいます。しかし、人種、階級、そして性の差別を無くすための唯一の希望は共同体の中にあります。もし、真の共同体があるとすれば、そこには、すべての人種と階級の男子と女子に平等が与えられています。

だれがこの模範的な共同体を作るのでしょうか。政府でしょうか。学校でしょうか。それとも会社でしょうか。いいえ、教会だけがそれを行うことができます。それを行うことができるだけでなく、教会は聖書が示す模範に立ち返り、それを実践しなければなりません。

この共同体においては、過去に対する怒りをもてあそぶ余地はありません。新約聖書の時代の女性たちが、自分たちが制約されていきた何年もの過去について男性たちと激しく議論している怒りの声は聞こえてきません。女性たちを「いるべき場所」に押し込もうとする男性の怒りの声も聞こえてきません。実際、怒りの声は全く聞こえてきません。私たちが目にするのは、男性も女性も福音のチャレンジを受け止め、御霊の力をいただき、彼らの文化の中でできることは何でも、キリストの御名によって行なうために出て行く姿です。その性質上、その共同体では男性と女性による相互の服従と相互の尊敬が必要です。それから、私たちは男性も女性も自由に神様の召しに応答することができるように、協力して当たらなければなりません。私たちは、キリストが教え、キリストが確立することを願っておられた共同体にできるだけ近いものを作り出すために、協力しなければなりません。

男性と女性の役割に関連して言うなら、それが私の幻（ビジョン）です。この学びが皆さんの幻（ビジョン）を形成し、その幻（ビジョン）を実践するのに必要な手段を提供できたと信じます。

ポイント 16. 類似例 — ラザロの復活

ラザロの復活の場面（ヨハネの福音書11：1～44）は、女性たちが、イエスが召しておられる豊かな人生に応答する自由を未だに許さない伝統と、教えによって縛られている実態を絵画的に描写するのに用いることができます。

＊著者も言っているように、聖書のこの個所の釈義を目指しているのではなく、劇的な説明のためのものです。

イエスのことばに従って、私たちは出て来ます。しかし、私たちはまだ墓布で手足と顔が包まれている状態にあります。私たちの社会の習慣や態度が私たちを固定観念に押し込むので、話したり行動したりすることができません。その固定観念というのは、神によってではなく、他の人たちによって決定された役割です。

イエスは、私たちに墓の石を取り除き、私たちがその新しい命に生きる自由を制限する墓布を互いに取り外すようにお命じになります。それをするために私たちはお互いを必要としています。個々の女性として、私たちが主の声に従うために、共同体は従順である必要があります。

石は私たちを墓に閉じこめるもの ---- 死の象徴、無の象徴 ---- です。それは、私たちが死んでいると決めつけるもの、私たちの生を邪魔するもの、私たちの存在価値を奪うものです。

イエスの第一の命令に従い、神に与えられた存在価値を妨げる石を取り除き、彼女に「出て来る」ようにさせましょう。

第二の命令はもっと難しいと感じるかもしれません。すなわち、彼女の墓布を取り外し、彼女を解放する ---- 彼女の存在価値の最終目標を成就するために解放する ---- ことです。

墓衣とは彼女の自由を制限し、彼女の手足を縛り、顔を覆い、彼女が主から召されたことを話したり、行動したりすることを妨げるものです。

ラザロはイエスの声によって復活しましたが、イエスは周囲の人たちがその状況に関わることを期待しておられました。彼らこそがラザロを縛りつけていた墓衣から解き放つ力を持っていた者たちです。

女性たちを向上させることの目標は、彼女たちが神の召しに応答できるように解放することです。この学びの目標は、彼女の墓衣を脱がせる手助けをすることです。墓衣とは彼女の声、彼女の賜物、彼女の慈愛に満ちた行為を渴望している世界の中で、彼女を抑制し、沈黙させるものです。

*イエスはすでに女性たちに新しいいのちに生きる自由をお与えくださいましたが、墓石を取り除き、墓布を取り外すのは周囲にいる私たちであるとチャレンジされています。

私たちの目標は励まし、教育、そして模範を通して障壁を取り壊すことです。

教会は、共同体として生きることを始めなければなりません。多くの文化の中で、教会によって認められている生活様式は、たとえそれが感情面や身体的な暴力を含んでいても、個人の家の中で起こることに対する説明責任を排除する、私的な、個人主義的な型（モデル）です。教会はそのような型（モデル）を排斥して、キリストが建て上げるためにこの世に来られた共同体で生活を始めるべきです。

＊教会は従来の在り方から、新しい共同体の在り方によって変わって行くことができるでしょうか。

クリスチャンの共同体は互いに従い、互いに尊敬し、互いに建て上げ、互いにチャレンジし、互いに配慮し、互いに分かち合う中で機能するのです。真にクリスチャンの共同体では、暴力もなく、虐げもなく、不公平もなく、性別、社会的地位、そして人種に基づいた排斥もないでしょう。

私たちは契約と相互依存の神学に基づいて生きることを学ぶことができます。教会の委員会や運営の決断方法を変え、指導的地位において男性も女性も共に機能することができます。

クリスチャンの共同体では、女性が全面的に参画することを阻むものを取り除くために、男女が協力して働くでしょう。私たちの社会の底辺で生きている者たちの尊厳を取り戻すために、男女は資源を出し合い、創造的になり、互いから学び、互いを助けることができます。もし、これが達成されるなら、教会はキリストの御名を崇める、情熱的な、人道的な共同体として自らを確立することができるでしょう。

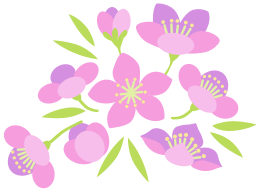
神は男性と女性の両方に世界を変える力を与えてくださいました。その力を分かち合うために励まし合い、共に労するために持っているエネルギーを用いようではありませんか。

女性たちが不平等の存在を指摘することができる機会を与えるように、一緒に教会にチャレンジしようではありませんか。それから、彼女たちの押し殺された叫び声や痛みの悲鳴に注意深く耳を傾けましょう。たとえ、それが怒りの叫びに押し殺されているとしても。

教会はイエスのことばに従順であるようにと招かれています。私たちはそのようになることができます。私たちはイエスの大きな声を聞くことができます。わたしたちは墓衣を取り除き、女性たちの存在価値の最終目標に到達できるように助けることができます。

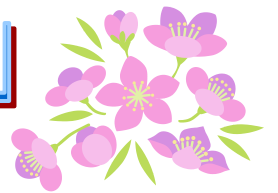
＊この本の声明文とも言えることばが連ねられています。これが実践に移されるために、私たちに今できることは何でしょうか。

「御国を来らせたまえ。みこころが天でなるごとく、地にもなさせたまえ」の実現に向けて一歩を踏み出しましょう。



参考資料②

「教会における女性の位置づけの四つの見解」



教会における女性の位置づけに関する 4 つの見解

Gender or Giftedness における女性の権威やミニストリーに関する見解は、いささか急進的で極端だと思われる方もいらっしゃるかもしれません。これは、長年に渡る議論や主張を念頭に置いた上で、また、各国の文化的社会的事情の故に生じている問題に光を当てる目的を持って研究がなされたためだと思われます。そこで、教会における女性の働きに関する異なる見解を整理して、Gender or Giftedness の考察の背景を理解することが助けになると考え、四つの異なる見解をまとめた Women in Ministry – Four Views – を簡単にご紹介したいと思います。

Women in Ministry – Four Views –

Edited by Bonnidell Clouse & Robert G. Clouse; with contributions from Robert D. Culver,
Susan Foh, Walter Liefeld & Alvera Mickelsen

伝統的見解	男性のリーダーシップを主張する見解	複数のミニストリーの在り方を認める見解	男女平等の見解
女は黙っていないさい。	女の頭は男です。	息子や娘たちは預言する。	キリストにあっては男も女もありません。
女性は男性に対して権威を持ったり、男性を教えたりすべきではない。	女性は、教えるのは良いが、権威を持つべきではない。	聖書の中心は権威の所在ではなく、仕える姿勢。極端に走らず聖書から女性の働きを捉えるべき。	教会においては男性も女性もまったく平等である。

I. 伝統的見解の解説

神は男女間に明確な差を設けられた。「頭」は「権威」を表し、「源」ではない。女は男から造られ、男のために造られた。神は御子に優り、御子は人に優り、男は女に優る。女が男に服従すべきことは、聖書の命令であると同時に、使徒が定めた決まりでもある。

教会では妻たちは黙っていないさいというのは、おしゃべりをして説教の邪魔をしてはいけないという意味ではない。当時は現在のように説教者が一人で語る方式ではなく、教える者と聞く者がディスカッションしたり質疑応答したりが普通だったので、パウロは、おしゃべりではなく、このような公の話しに女は加わってはいけないと言っているのである。

地域教会でリーダーとなるのは成長した責任ある男性であるべきだというのがパウロの主張（第一テモテ 2:8-15）で、女性の教会での沈黙と服従、男性を教えることの禁止は第一コリント 11 章、14 章に記されている。

罪を犯した時、エバがサタンに騙されたこと、系図は男性中心であること、女預言者の数が少ないこと、聖書の著者に女性がいないこと、祭司職はアロンの子孫の男にだけ許されたことから、女は教えるべきではないと考えられる。

男が女を支配する（創世記 3:16）のは神の定めであり、それを基にパウロはコリント、テモテで教えている。

神学教育を受けても女性が牧会できるわけではないので、神学校は女性を受け入れないことが望ましい。

I I. 男性のリーダーシップを主張する見解

女性の教会での奉仕について、聖書を解釈するに当たり、文化的、歴史的、地理的背景を考慮すべきで、パウロの教えは今日の教会には当てはまらないとし、女性に対する聖書の命令を相対化しようとする動きもあるが、それは適切な考え方ではない。

男女間に優劣はないが、機能には違いがあり、女は夫を助けるために造られている。アダムが女の名を付けたのはアダムに権威があったためである。

旧約時代、霊的に重要な責任を果たした女性たちがいるが、女性には制限があり祭司にはなれなかった。

イエスは女たちを尊び、使徒の働きでは、女たちが福音を広めるのに大切な役割を果たしている。が、女性が使徒、伝道者、長老になったという記録はなく、女性が公の場で教えたという例も見られない。

「頭」は旧約では「最も高い」、「前線」、「第一のもの」、「始まり」の意味。「源」の意味も含まれるが、それにより権威の意味が減じることはない。

パウロは女性に沈黙と服従を教えている。女性の教育を禁じるのではないが、権威をふるうことを禁じている。しかし、祈り、預言、男性に対する個人的教え、同性や子供を教える、は禁じていない。女性の長老は禁じていた。これはアダムが先に造られたことと、女が騙されたことの二つの理由のためである。これは女性が牧師になることが聖書で禁じられているとする根拠でもある。

I I I. 複数のミニストリーの在り方を認める見解

伝統的見解は男性にのみ権威があり女性は服従すべきだとし、クリスチャン・フェミニストの見解は、文化、歴史等の要因を踏まえて女性も男性と同等に教職の立場に就けるとする。双方の見解に対して反論や問題の指摘が可能である。また、教職の定義、按手の定義など、教派教団によっても違いがあるので、全てに共通する理解と定義を求めるのは無理だと考える。

按手の問題：新約ではミニストリーに就く場合に按手が必須ではなかった。よって、女性が教える立場や権威ある立場に就くことを考える場合、按手が女性にとって障壁となることはない。

権威の中心：教会の頭はキリストであり、牧師ではない。聖書が権威であり、長老は群れを監督するが、支配はしない。福音的教会では会衆に権威の中心があるとしているところが多い。権威は、みことばを語る説教者個人ではなく、みことばそのものにある。

サーバント・ミニストリー：聖書的ミニストリーは仕える姿勢であり、権威を振りかざすことではない。男も女も共に、他の人に対する力を有する高い地位を求めるべきではない。

いずれにしても、どちらの極端に偏ることもなく、聖書に女性とミニストリーの理解を求めることこそ重要である。

I V. 男女平等の見解

教会史を見ると、プリスキラ、キャサリーン・ブース、その他多くの婦人宣教師や婦人牧師の働きが見られる。新約聖書の中で、イエスの女性に対する見方、ペンテコステの男も女も預言の記述、主にあっては男も女もないなど、神が男女を等しく見ていることがわかる。

男女ともに神のかたちに創造された。男の「助け手」として、の「助け手」は神を表わすのに使われる言葉で、「彼に等しい力を造る」と訳す方がふさわしい。男の支配は罪の結果であり、神の定めではない。男が最初に造られたことも、ヤコブ、モーセ、ダビデが第一子ではないことから、優越性や権威にはつながらない。男が女を名付けたことも、エバがセツに名を付け、ラケルとレアが子どもたちに名を付け、マリヤがヨセフより先にイエスの名を告げられたことから、名前を付けることが男の優位性の裏付けとはならない。

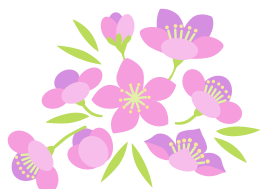
イエスが重要な真理を女性に教えたこと、イエスの復活の証人が女性であったこと、初代教会において女性が預言していたこと、フィベが執事であったことから、初代教会においては女性差別がなかったと言えるが、

二世紀以降女性の働きの制限が強まった。

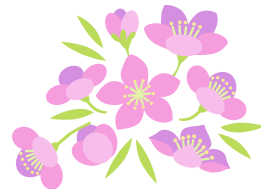
「頭」はリーダーシップを指すというより、「源」、「始まり」等々の意味がある。

「権威」について、パウロは普遍的真理として女が教えてはいけないとは言っていないし、教会も女性の宣教師や女性の讃美歌作者を認めている。

パウロはガラテヤ書で、男も女も不必要な縛りを受けることなく、神からの賜物と召しに従って自由に主の働きをするよう勧めている。



『性差によるのか、賜物によるのか』に対する JEA女性委員会考察



性差を強調することがむしろ性差別に当たるのではないかという思いを抱きながら、読み合わせが始まりました。

序文には「クリスチャン女性たちが、貧困と搾取(多くの場合は売春)の悪循環から抜け出すためには、そのための努力は聖書の教えに矛盾していないことを知る必要があります。」と記されています。今の日本にはこれほど極端な性差別があるわけではない状況で、出版の意味があるのかという疑問がありました。しかし、同じ女性として、アジアの女性たちの痛みを知ろうとする必要、そして共に祈る責任を覚えました。

日本の現状では性差別が歴然とは存在しないとはいえ、女性たちは時々女性であるということに制限を感じます。これを看過ごしにせず、考えてみようということになりました。

そして読み進む中で、共同体の回復という点においてチャレンジを受けました。共同体の回復は、一人一人の存在を必要とし、また高め合う豊かなものです。私たちは贖いの結果得られることを、どれほど味わっているのでしょうか。神と私の関係の回復というだけ満足しては、まだまだ豊かさを満喫しているとは言えないことがわかりました。教会という共同体の回復、という観点で現状を確認し、神様のみこころを実現していく必要があることを覚えました。この観点をもちながら、三つの点について意見交換しまとめました。

1. 日本の社会と教会の現状—問題の再認識

1998 年に男女共同参画社会基本法が制定されました。このこと自体、男女差別・男尊女卑の社会実態があることを物語っています。女性の就労に対しては門戸(職種の制限)が狭い、賃金が低い、能力に見合った内容の仕事がない(いわゆるお茶くみやコピー係)、立場の制限(管理職にはなれない)などがありました。女性が置かれている状況は、あまり注意を払われることもなく放置されてきていました。女性たち自身、仕方がないことと甘受してきたのではないのでしょうか。

確かに女性の社会労働(活動)生活での制限は否めません。子どもの成育において生物学的意味でも母親の必要性は当然ですから、女性が多くを負うことになります。この場合、子育て中の女性に対しては、制限ではなく配慮が必要なのではないのでしょうか。

結婚形態が崩れていると言われている現代、単身世帯は年々増加傾向にあり、全体世帯数の約3%を占めるようになりました。単身世帯のうちでも、母子世帯が122万5,400世帯、父子世帯が17万3,800世帯(すべて2003年総務省データ)とシングルマザーが圧倒的に多い現実です。その理由も、離婚や死別だけでなく、子どもの父が不明、正妻ではない、など複雑な事情があります。彼女たちは、経済的にも時間的にも社会的にも困難な状況に置かれています。

また、DVの実態がつかめないと言われている日本でも、内閣府が「男女間における暴力に関する調査」を1999年2002年2005年と3回にわたって行いました。2006年の報告では、これまでに結婚したことのあつた人(女性1,283人、男性1,045人)の回答として、

①暴力行為があつた 女性 26.7% 男性 13.8%

②暴言や精神的嫌がらせがあつた 女性 16.1% 男性 8.1%

ということを報告しています。これは、「世界の5人に1人の女性は暴力を受けている」というデータに合致しています。5人に1人・・・教会内外の女性の痛みに関心を向ける必要があります。

このような社会状況の中で、日本の女性宣教者も性別の壁を感じる必要があります。地域社会の中で

は女性であることのゆえに発言が認められないことや、会堂建築などの不動産交渉には男性の同行が必要になります。

性別の壁は、一般社会におけるものだけではありません。女性が献身して神学校を卒業しても、教会で仕える場がないという現状があります。海外の神学校で優秀な成績を修めて帰国しても、女性神学者を用いるポストがありません。女性が教えるということに対する抵抗感、日本の教会の経済力の限界ということがあります。賜物も能力も認められている女性を用いないことは教育における損失ではないでしょうか。

女性の献身者は、単身で教会に奉仕する教職者だけでなく、結婚して仕える牧師夫人がいます。多くの牧師夫人は、多くのストレスを抱えています。認識も役割も確定していない曖昧な立場ゆえに起こるアイデンティティクライシス、プライバシーのない生活、経済的困難を抱えての子どもの教育や老後の心配、家庭生活と奉仕の両立の困難さ、苦情や批判の受け手となること、夫への疑問や不満、自分の能力の不足、自分の時間の不足、相談相手の不足による孤独感、などが挙げられています。江戸時代に僧侶の妻滞が激増して出現した「寺族(寺庭婦人)」も同じような問題を抱えてきたと言われています(川又俊則「ライフヒストリーの宗教社会学——紡がれる信仰と人生」2006年)。また、公衆性が問われるような立場に置かれた夫人に対する社会姿勢や評価の問題は、日本だけでなく、アメリカでも韓国でも見られます。

しかし、このような性差の壁や課題を抱える一方、興味深いことに、ホーリネスやインマヌエルなど日本で生まれた教派団体が女性教職を認めています。日本のキリスト教界が柔軟な対応をもって、女性教職を認めているということの評価したいものです。キリスト教受け入れが、新しいものを受け入れていこうという精神にあふれた開国時期であったためかもしれません。廃娼、女性の参政、女子教育機関設立など進む中で女性の活動が受け入れやすい土壌があったと思います。

宣教地の特殊性という事情のゆえに、本国教会では教職としては認められない女性たちも日本に宣教師として派遣されました。多くの日本人信仰者たちは、このような女性宣教師たちによって信仰に導かれています。ミッションスクールを立ち上げた女性宣教師とその生徒たちの活躍もあります。彼女たちの多くは本国において一般信徒でありましたが、教会奉仕で培った組織運営力や教育の能力、音楽技能、会計能力などを携えて「女性宣教師」として派遣され、宣教においても、教育、社会福祉においても大きな貢献をしました。

また、この明治期には、バイブル・ウーマンの存在がありました。宣教師たちは、言葉や文化の違う日本での戸別訪問伝道において、彼女たちを用いました。バイブル・ウーマンのための女子神学校として全国24校が数えられています(神谷武宏「バプテスト派の日本宣教における“Bible Women”の働きとその実態—明治期から昭和初期、そして戦後の“Bible Women”を追う—」2007年)。教会形成に女性が参与する素地がありました。

戦後の宣教師にもバイブル・ウーマンに匹敵する女性献身者たちが仕え、宣教師たちの家庭生活や宣教活動を助けました。残念なことは、このような女性たちの働きが教会の中で位置付けられなかったことにあります。バイブル・ウーマンを再評価し、今後の日本宣教と教会形成に生かしてはどうかと思います。

戦後設立されたイマヌエル綜合伝道団の場合は、ホーリネスの伝統を引き継いで女性教職が認められていました。そして、同教団を創設当初から経済的に、霊的に、支えてきたのは女性信徒でした。ただ女性に教職を与えつつも、彼らが奉仕し仕える日本の伝統文化に違和感のない形、つまり女性はリーダーシップを持たないという形で、今日まで来ています。

このように女性の働き人を認め、その働きによって宣教や教会形成が進んできてきたにもかかわらず、残念ながら、教会において、女性信徒の能力が十分に活用されているとは言い難いのではないでしょう

か。女性信徒も、教会学校教師にはなりますが、役員や長老に選ばれることは少ないのではないのでしょうか。また役員に選ばれても礼拝司会の奉仕は制限されたりリーダーシップをゆだねられないケースがあります。教会で活かしきれていない女性信徒の力を発掘することで、日本の教会には新たな展開を生む可能性があるのではないのでしょうか。

今日の教会を支えてきたのは、縁の下存在である婦人会の働きに負うものが大きいと思います。教会の総人口の三分の二は女性です。しかし、その働きのどれだけの配慮をしてきたのでしょうか。昨今、婦人会の高齢化により、教会奉仕に困難を覚えている現実があります。この世代交代は、女性に対する配慮を検討するよい機会かもしれません。

2. 「伝統的な解釈」が形成されたプロセスについて—みことばの生活化の回復

初代教会は、「男性も女性もなく」というみことばどおり、老若男女からなる家の共同体でした。迫害も、男性も女性も、と記されています。マケドニア宣教を支えたピリピの教会は、女性たちの祈りから始まっています。イエス・キリストによる救いは、男女の壁を取り払いました。教会は兄弟姉妹による「神の家族」として、生き活きと存在していました。

にもかかわらず、職制の制限という伝統的解釈があるのは、教父たちによってもたらされたものであることがわかりました。なぜ、教父たちの解釈が女性に厳しいものになったのでしょうか。研究を深めたいところです。

教父の研究が、パウロ書簡に集中特化されていったために、バランスを欠いていったのではないかと推察しています。書簡の文化背景から語られていることの区別なく、女性への告責が強調されました。女性の発言権が制限され、女性が用いられる場が失われていきました。

社会的背景であるヘレニズム文化の影響も大きかったと思います。軍事力征服への盲従は、弱肉強食の虐げを復興させたことでしょう。弱い存在が対象となりました。

また、キリスト教国教化に伴い、家の教会の共同体の要素が薄れ、教会が崩れていったのではないのでしょうか。やがて、修道院運動の中で信仰生活は聖俗分化され、信仰者も、みことばを日常生活の中で聞き、実行することが乏しくなりました。交わりの本質であるコイノニア＝共有する、一つになることが、教会でも家庭でも難しくなり、隔てや壁を生むことになったのではないのでしょうか。日本宣教のネックの一つに、クリスチャンホームが信仰継承できなかったことを挙げることがあります。教会の共同体要素の崩れは、信仰生活の力を失わせ、宣教を阻むことになったと言わざるをえません。

神について知っているのではなく、神を知っていること。みことばについて知っているのではなく、みことばを聞いていること。主イエスがなさったこと・教えられたことを、しっかりと聞き従い続けることを大切にしたいものです。この日常生活でのみことばの実践の回復が、家庭の回復を生み、教会という共同体の回復につながるでしょう。

3. 共同体の回復—男性と女性の協力による豊かさへ

女性が創造された経緯からすれば、男性と女性とともに教会形成、社会形成することは必然でしょう。それは、女性も男性と肩を並べて対等に社会進出すべきということではありません。互いに補い合う存在として、共に主を仰ぎ、主のみわざに参与することです。このためには、教会の体制を整えることが必要になります。女性がリーダーシップに加わることによって、教会の6割を占める女性が生かされるようになります。男性だけでは聞こえなかった声があがり、女性の視点が入るからです。もちろん女性をひとくくりにできるわけではなく、個体差はあります。これが賜物の違いということでしょう。

一般的に女性の特性と言われる関連性は、強いネットワークを継続させる力になります。女性の母性は、リーダーシップの本質である他の人を養育し、励ますことにつながります。女性の感情豊かさは、共同体の真実な姿を問い直すことにつながります。泣く者とともに泣き、喜ぶ者とともに喜ぶ教会の交わりの回復です。女性の協調性は、他の人の賜物を喜び生かすことにつながります。周りへの配慮が生まれます。女性の創造性は、既成の在り方から抜け出せない問題解決に新しい視点を加えることができます。女性の弱さは、共同体にチャレンジを与え、成長の余地を与えていきます。祈りが生まれます。「弱いときにこそ、強い」「弱さのうちに働かれる主の豊かさ」を体験することができます。男性が警戒される宣教地でも、弱い女性は受け入れられます。現にこれまでも女性教職を認めない教団であっても、宣教師に限って職制を認めて派遣してきました。エクアドル宣教は痛みを通りながらでしたが、女性たちが用いられました。便宜上としてではなく、宣教における女性の働きを用いてサポートすれば、さらに主のわざは進むことでしょう。

性差のないリーダーシップの実例を救世軍に見ることができます。発祥の 1865 年当時、ロンドンは大恐慌の時代でした。救世軍は、失業者があふれたイギリス社会に、イエス・キリストの福音を生活化を目指して活動を開始しました。この活動の中で創設者ウィリアム・ブースの夫人カサリン・ブースは、公衆の面前で説教し、「婦人宣教論」というパンフレットを出しています。もちろん当時のイギリス社会でも、女性が講壇に立つことは問題になりました。女性は説教をしてはならないものとされていました。その中で講壇に立ったカサリンは、決して夫と肩を並べたり夫を押しつけて活動する女傑ではありませんでした。カサリンの娘時代には、このような記録が残っています。「ごく内気な性質であった。人の前で話をせよなどとは、もちろん誰からもすすめられたことはなかった。・・・『祈ってください』と言われても、彼女は声に出して祈ることができず、時には数分間というものは何も言葉が出ず、やっと二言三言祈ったようなこともあった。」（『救世軍の母カサリン・ブース』秋元巳太郎訳著 1974 年）このカサリンが講壇に立つようになったのは、1860 年 1 月 8 日の礼拝の中で聖霊の迫りを受け、それに応答したからだと告白しています。カサリンの説教は、人々の心をイエスに引きつける力がこもっていました。神様は、賜物を備えて女性を用いてくださいます。そして、カサリンの娘のエバンゼリン・ブースは、四代目の大将となりました（1934～1939）。救世軍は女性がいたからこそ、共同体の回復という視点から、痛みのあるところに愛を示し、福音を伝えるということを継続していくことができたのではないのでしょうか。日本開設は 1895 年。司令官山室軍平も、機恵子夫人、後妻の悦子夫人とともに社会福祉事業、公娼廃止運動、純潔運動に力を注ぎ、現在の救世軍の基礎を築いています。今日でも救世軍の少佐は、男女同じように任職され、派遣されています。そして、救世軍は、現在 124 の国と地域に広がっています。どの国の文化の中でも、この男女が共にという制度が受け入れられ、用いられています。教会という共同体の回復は、地域性、文化、伝統を越えることができる良き例証です。

女性が加わることの大切さがわかっている、女性をどう用いればいいのか戸惑いもあるかもしれません。まずは、女性を話し合いの場に加えてください。そして、その声に耳を傾けてください。ある宣教団体では、各委員会に必ず異性を一人は入れるというルールを作っています。こういうルールも必要かもしれません。女性とともに、という豊かさは体験していくものだからです。

女性教職を認めてきたイマヌエル綜合伝道団は、数年前からの組織改革により、教団運営委員（牧師と信徒で構成）に女性牧師部部長（単身、夫人牧師を合わせて 133 人の代表）が 1 人、また今総会期には女性信徒も加わりました。また教区主事（教区のまとめ役兼事務的責任者）に単身者、夫人牧師で教職按手前の女性牧師も含めて数人が任命され、女性にリーダーシップをゆだねるようになりました。また単身者、夫人たちがそれぞれ、また時には一緒に交わりを深める「会」もあります。結婚した女性牧師は、牧師の夫人というより、夫人でありながら牧師である「夫人牧師」との名称を用いながら、意識を改革しようとしています。但し尚、現実には、主任牧師である夫の理解が鍵となります。夫が今後更

に「妻」、「同労者」あるいは子どもの「母親」など多面性を持つ夫人牧師を理解し、教会での立場を位置づけることが重要ではないでしょうか。また、女性牧師は結婚しても「牧師、教職」としての意識を持ち続けることも大切でしょう。大切なことは、牧師夫婦が納得と話し合いの中で、それぞれに相応しく調和のとれた一致を持って奉仕することです。献身者の減少、牧師の高齢化という現実を踏まえながら、今後はさらに女性牧師、女性教職者を起用するようになって行くことを期待しています。

女性の働きを支えるために、女性に負担の集中しがちな子育てや介護の現状と意味を教会が理解することも必要です。子育てや介護でやむなく奉仕から離れる女性たちは、責任を果たしきれないことに心を痛めます。教会が責任のある立場に女性を登用しなかった背景には、家族の状況如何で十分奉仕内容を果たせないという女性の現状があるでしょう。しかし教会は、女性の家庭における働きも積極的に評価すべきではないでしょうか。信仰に基づく女性の家庭での献身は、家庭崩壊が社会問題にすらなっている今日の日本で、再評価されるべき働きです。未信徒の家族のいる家庭が大半の日本において、女性たちが家庭で信仰の人生を歩むことの意味は重要です。これは女性を家庭に閉じ込めるということではありません。家庭に派遣していくことです。教会が女性のライフサイクルを冷静に現実的にとらえ、教会や社会で活躍できる時期、家庭に遣わされている時期の両面で賜物が活かされるような体制を作ることが必要なのではないのでしょうか。

せっかくのポジションが与えられながら、女性たちが遠慮してしまうケースもあるようです。賜物は主からのチャレンジに応答していく中で磨かれていくという側面があります。主から受けているものを惜しまずに用いていくことによって、他の人が生かされていく喜びを味わうことができます。

教会においても、家庭でも、社会でも、男性も女性も共に主のみわざに参与する喜び・回復した共同体の豊かさを味わいたいと願います。

2012年3月

新旧女性委員：阿部恵子(ECC)、内田みずえ(JECA)、梅田登志枝(イムヌエル綜合伝道団)、高橋芳江(JECA)、藤井千明(救世軍)、三橋香代子(日本福音自由教会協議会)、八木橋みどり(日本バプテスト教会連合)、ランハンス・ドロテア(OMF)、
委員長：丸山園子(日本同盟基督教団)